

(一) 一の小有
 (二) 論十五丁左表
 (三) 疏五十二丁左記
 (四) 三丁左開解廿七
 (五) 以下の頌を釋論の
 (六) 流通分となす而
 (七) してこの頌を記に
 (八) は二門に分ち、疏
 (九) には四段に分て
 (一〇) 主の自稱なり。論
 (一一) 主の毛頭。十信な
 (一二) 三角。三賢な
 (一三) 四根。煥頂忍
 (一四) 世第一なり。

何の義を以ての故にか三處に廻向するや、謂はく、自所作の功徳を平等ならしめんと欲ふがための故に、眞如に廻向す、或は自所作の功徳を廣大ならしめんと欲ふがための故に、一心に廻向す、或は自所作の功徳を明了ならしめんと欲ふがための故に、本覺に廻向す、是くの如く知るべし、是くの如く觀すべし、是くの如く廻向するに何の利益かある、謂はく、衆多の故に、この義いかん、譬へば一微塵を用て大地の中に置くに、置く所の微塵と彼の大地と等うして差別無きが如く、廻向の法門も亦是くの如くなるが故に、又譬へば一注の水を用て大海の中に置くに、置く所の水注と彼の大海と等うして差別無きが如く、廻向の法門も亦是くの如くなるが故に、又譬へば(一)の小有を破すれば、即便ち大虚空と等うして差別無きが如く、廻向の法門も亦是くの如くなるが故に、すでに展舒功徳令廣門を説きつ、次に施於衆生普利門を説かん、「普く一切の衆生界を利せん」と言ふは、則ち是れ施於衆生普利門なり、謂はく、廣大圓滿の功徳を擧げて、周遍して衆生界を利益するが故に。

(一) 歡喜大士心を至して 無量の佛子衆海の中に勸め
 我れすでに(二)毛頭と(三)三角とを超え 生死の(四)四根を過ぎたり

(一) 義ある中に入る多
 (二) よれば第二僧祇に
 (三) の理を證せるの意
 (四) (快四丁右)
 (五) 信論 本釋は釋論なり
 (六) 釋參照 第七、三身成
 (七) 道參照 第七、三身成
 (八) 釋參照 第七、三身成
 (九) 釋參照 第七、三身成
 (一〇) 釋參照 第七、三身成
 (一一) 釋參照 第七、三身成
 (一二) 釋參照 第七、三身成
 (一三) 釋參照 第七、三身成
 (一四) 釋參照 第七、三身成
 (一五) 釋參照 第七、三身成
 (一六) 釋參照 第七、三身成
 (一七) 釋參照 第七、三身成
 (一八) 釋參照 第七、三身成
 (一九) 釋參照 第七、三身成
 (二〇) 釋參照 第七、三身成
 (二一) 釋參照 第七、三身成
 (二二) 釋參照 第七、三身成
 (二三) 釋參照 第七、三身成
 (二四) 釋參照 第七、三身成
 (二五) 釋參照 第七、三身成
 (二六) 釋參照 第七、三身成
 (二七) 釋參照 第七、三身成
 (二八) 釋參照 第七、三身成
 (二九) 釋參照 第七、三身成
 (三〇) 釋參照 第七、三身成
 (三一) 釋參照 第七、三身成
 (三二) 釋參照 第七、三身成
 (三三) 釋參照 第七、三身成
 (三四) 釋參照 第七、三身成
 (三五) 釋參照 第七、三身成
 (三六) 釋參照 第七、三身成
 (三七) 釋參照 第七、三身成
 (三八) 釋參照 第七、三身成
 (三九) 釋參照 第七、三身成
 (四〇) 釋參照 第七、三身成
 (四一) 釋參照 第七、三身成
 (四二) 釋參照 第七、三身成
 (四三) 釋參照 第七、三身成
 (四四) 釋參照 第七、三身成
 (四五) 釋參照 第七、三身成
 (四六) 釋參照 第七、三身成
 (四七) 釋參照 第七、三身成
 (四八) 釋參照 第七、三身成
 (四九) 釋參照 第七、三身成
 (五〇) 釋參照 第七、三身成
 (五一) 釋參照 第七、三身成
 (五二) 釋參照 第七、三身成
 (五三) 釋參照 第七、三身成
 (五四) 釋參照 第七、三身成
 (五五) 釋參照 第七、三身成
 (五六) 釋參照 第七、三身成
 (五七) 釋參照 第七、三身成
 (五八) 釋參照 第七、三身成
 (五九) 釋參照 第七、三身成
 (六〇) 釋參照 第七、三身成
 (六一) 釋參照 第七、三身成
 (六二) 釋參照 第七、三身成
 (六三) 釋參照 第七、三身成
 (六四) 釋參照 第七、三身成
 (六五) 釋參照 第七、三身成
 (六六) 釋參照 第七、三身成
 (六七) 釋參照 第七、三身成
 (六八) 釋參照 第七、三身成
 (六九) 釋參照 第七、三身成
 (七〇) 釋參照 第七、三身成
 (七一) 釋參照 第七、三身成
 (七二) 釋參照 第七、三身成
 (七三) 釋參照 第七、三身成
 (七四) 釋參照 第七、三身成
 (七五) 釋參照 第七、三身成
 (七六) 釋參照 第七、三身成
 (七七) 釋參照 第七、三身成
 (七八) 釋參照 第七、三身成
 (七九) 釋參照 第七、三身成
 (八〇) 釋參照 第七、三身成
 (八一) 釋參照 第七、三身成
 (八二) 釋參照 第七、三身成
 (八三) 釋參照 第七、三身成
 (八四) 釋參照 第七、三身成
 (八五) 釋參照 第七、三身成
 (八六) 釋參照 第七、三身成
 (八七) 釋參照 第七、三身成
 (八八) 釋參照 第七、三身成
 (八九) 釋參照 第七、三身成
 (九〇) 釋參照 第七、三身成
 (九一) 釋參照 第七、三身成
 (九二) 釋參照 第七、三身成
 (九三) 釋參照 第七、三身成
 (九四) 釋參照 第七、三身成
 (九五) 釋參照 第七、三身成
 (九六) 釋參照 第七、三身成
 (九七) 釋參照 第七、三身成
 (九八) 釋參照 第七、三身成
 (九九) 釋參照 第七、三身成
 (一〇〇) 釋參照 第七、三身成

第一無數粗滿じ訖つて 第二僧祇に始めて(一)無に入る
 如宜しく汝等もろくの佛子 左右の兩手を以て
 (二) 本釋の明鏡を捧げて 七識散慮の面に臨め
 六塵境界の垢を見て 法執人我の答を洗ふべし
 汝等佛子若し是くの如くせば (三) 法身應化の三身
 (四) 伊字を舒るが如く圓かに現前し 常樂我淨の四徳
 (五) 達池に入るが如く具さに出生し 我れ(六)四王自在處より
 下大海の龍宮殿に入つて 隨分にもろくの契經海を窺ふに
 惣じて(七)百洛及數あり 是くの如くの諸經の眞實の法
 無量無邊の差別の義 摩訶衍の立義の中に
 該攝し安立し具足して説けり 善男子善女人あつて
 若し(八)自手に斯論卷を捧げば 百洛及の經を捧ぐる者と名けん
 若し(九)自口に本文を經誦せば 百洛及の經を誦する者と名けん
 この人所得の功徳は 十方世界の微塵數の

諸佛及び大菩薩衆　おのゝ微塵數の舌相を出して
 是くの如くの微塵數劫の中に　息まらずして稱説すとも盡くすこと能はず
 いかん況んやその義理を觀察し　文の下シタの所詮を思惟せんをや
 善男子善女人あつて　不信の心を生じてこの論を誘せんに
 この人所得の罪業は　十方世界の微塵數の
 諸佛及び大菩薩衆　おのゝ微塵數の舌相を出して
 是くの如くの微塵數劫の中に　息まらずして過トガを説くとも
 是の人の往罪は滅するに所無く　一切の諸佛も救ふこと能はず
 是の故に行者本原に歸らんとおもはば　當さにこの論に依て修行すべし
 實に不信の心を生じて　甚深の大乗教を誹謗すべからず
 當さに願くばこの勸め遠く流布し　重々不説の刹シタに遍すべし

國譯釋摩訶衍論卷十終

本書は釋論の項目を掲げて指事とせしむる故に釋論と對照して自ら明なり故に其の頭註を略せり。

(一) 十種の論論
 (二) 四丁右裏

(三) 又馬鳴論一
 四丁左表

(四) 一代云云論
 の一七丁右裏

(五) 十種云云論
 一十二丁右表より論せり。

國譯釋論指事上

沙門空海の撰

第一卷

(一) 十種の論の名一代種種の論に總じて十萬九千部あり、皆此の十に攝す。
 (二) 又馬鳴所作の論に百部あり十種は義論の攝なり。
 五十一藏及び十藏三藏の攝なり、此は通じて諸藏を攝別しては阿毗達磨の攝なり。
 (三) 一代種種の經百洛叉あり十二部經の攝なり、此の論は通じて此の百洛叉の經を以て依となす。
 此の論の別依の經に百部あり各々名字を列ぬ。
 六種馬鳴出世の事
 總じて如來の八萬四千四十八種の功德を歎する中に、(四) 十種の取テ、十種の勝キ、十種の業ゴ、十種の遍ヒ、四種の智チ、四無礙ム、十種の法ホ、三聚ソ不定ナリ、正定、信の十種の義。
 本コンリフに建立五分の名一は因緣、二に立義分、三は解釋分、四は修行信心分、五は勸修利益分。

國譯釋論指事上

以上總じて此を説く。

造論八種の因縁大總持論の八十の因縁は此の八の攝なり

師と弟子と經を説き論を造る本願の事ホンクワン

立義分三十三の法門名數の中。

十六の所入の本法、十六の能入門、及び不二マカエ摩訶衍なり。摩訶衍といは説くに二あり一は法謂ふ所の法とは謂く衆生の心なり、是の故に則ち一切世間の法と出世間の法とを攝す、此の心に依りて大乘の義を顯示す、是の心眞如シンシンニョの相は即ち摩訶衍を示す體なるが故に、是の心生滅因縁の相は、能く摩訶衍を示す自體相用なるが故に。謂ふ所の義とは即ち三種あり、一にはマカエ體大減マカエの故に、一は法、二は門、二にはマカエ相大マカエ具足無量性功徳の故に、三にはマカエ用大善との因果を生ずる故に。

釋して曰く、此に三門あり、一には所入根本總體門シヨラコンボンソクタイモン更に一重二には能依趣入別相門ノウエシユラベツサウモン更に一重あり三には通達軌則不動門フウダツキソクフドウモンなり。摩訶衍とは總なりとは即ち是れ所入根本總體門なり。即ち是の根本摩訶衍の中に八の差別あり、一には一體一心摩訶衍、二には三自一心摩訶衍、三には無量無邊諸法差別不増不減體大摩訶衍、四には寂靜無雜一味平等不増不

摩訶衍 摩訶
は大の法義なり
八佛共に衆生なり
妄和合染淨一體
の因位にあり、法
さ心さは主客の異
なるのみ、法體に
つきて大いふ、法體
即ち衆生心の中
眞如にして、摩訶
衍の實體なり、摩
訶の相大なり、大
不空如來藏なるが
故に、無量の功徳
を自體に具足し包
藏するが故に、如
來といふ出如來藏
は如來を出する
故なり、用大眞如の
自體と自相とに由
つて自作用あり、
即ち世出世の兩重の
善因果なり。

減體大摩訶衍、五には如來藏功徳相大摩訶衍、六には具足性功徳相大摩訶衍、七には能生一切世間因果用大摩訶衍、八には能生一切出世間善因果大摩訶衍なり。是の如くの八種の摩訶衍の法は、皆能入に従へて其の名を立つ、謂く一體一心を以て其の門と爲して趣入する處なるが故に、名けて能生一切出世間善因果用大摩訶衍となす、乃至能生一切出世間善因果用大を以て而も其の門と爲して趣入する所なるが故に、名けて能生一切出世間善因果用大摩訶衍と爲す、譬へば轉輪聖王の其の輪相リンサウに隨て名字を立つるが如く、摩訶衍の法も亦復是の如し、其の門相に隨て名を立つ、大總持論の中に八十の門を開て廣く根本摩訶衍の法を釋す、今各十を攝して一種を成するが故に唯し八種を立つ、所入總體に八あれば能入と又八あり、第二重の四種の法の中に各三門を具す、一には本法所依決定門上に言ふ所の衆生心と云ふは是なり二には根本攝末分際門一切世間法出世間は是なり三には建立二種摩訶衍門上に此の心に依て摩訶衍の義を顯示するは是なり四衆四生、何が故ぞ不二摩訶衍の法は因縁なきや。答ふ、是の法は極妙甚深にして獨尊なり機根を離れたるが故に。問ふ、何が故ぞ機根を離れたる。答ふ、機根なきが故に。問ふ、何ぞ建立を須ふる。答ふ、建立に非ざるが故に。問ふ、是の摩訶衍の法は諸佛の所得なりや。答ふ、能く諸

爲りて三種の功德圓滿すと。文

第四卷

六種の(一)無明、闇の無明十種の名、歸徳成幻力無力門の三相業・轉・六相・計名・起業相・計名・起業相。業聚八識又は七、又は四、又は二、又は三、已上本上の無明の略釋なり、已下は總じて一苦相八識切の染淨の諸法を藪めて、更に同異の二門を作して、造論眞實の本意を表示す。同相門 此は唯一眞法なき、異相門 此は諸法種種の名とを示す。異相門 字相等を示す。

已上心生滅の字を明し已んぬ、已下は直に生滅の因縁を釋す。

本に意識五種の名釋に二門あり 攝義顯宗生解門 根本無明及び隨縁の本覺各各二の因縁あり、此の中に十一末那を説く 已上隨文散説門畢んぬ。已下相續業用差別門なり此に三義あり

次に唯心廻轉門 已上廣大末那轉

次に分別事識轉相門 本に復次に意識と言つは云釋に四門あり 已上生滅因縁の決擇已に畢んぬ、已下因縁殊勝不可思議の相を本に(二)無明熏習に依りて起す所の識とは云云六種の染心を説く、釋に五門あり 已上殊勝門已んぬ、下は生滅の相の差別を顯示す

第五卷

本に復次に生滅の相を分別すとは云云十四行、釋に五門 一は標釋俱成示相門、二は率相屬當假對治次第門、五は發起問答決疑門なり、已上生滅の門決擇分已んぬ、已下は染淨相熏相生して斷絶せざる義を顯示す。

(一)三紙 三紙が

本に復次に四種の法の熏習の義あり云云(一)三紙、四熏とは一は淨法名けて眞如と爲す、又二あり 一は自體相熏習、二は一切の染因無明と名く、又二あり 一は根本熏習、二は增長念業識と名く又二あり 一は業識根本熏習、四は妄境界六塵と名く、又二あり 一は增長念釋に五門あり、一には總標綱要門、六意あり 一は相待相成似有意、二は本無性空非有意、三は相待相成顯空意、二には立名略示門、又二門あり 一は淨眞法相、又三種の義あり、一は無明、二は三には通釋熏習門、又二門あり 一は比量譬喩、四には分割散説門、又四門あり 一の門に又二あり、五には盡不盡別門 此の中に本の因果始因果本有の三身十地等の義を説く淨法熏習、此の中に二あり 一は法身自然熏習門 此の中に本覺及び無明一異等の義を説く、又木中火等の因縁法譬を説く云云 已上は染淨の諸法の相熏相門なり、已下は分明に生滅門の中の三種の大義を顯示す。

本に復次に眞如の自體相とは云云釋に三門あり、一には自體大義門、又二あり 一は人平等二は時

第六卷

本に復次に眞如の自體相とは云云釋に三門あり、一には自體大義門、又二あり 一は人平等二は時

(一)無明 眞如の妙心には迷悟なし、緣かに迷念あるれば迷悟の二念なる自己を味ます所より起り來る故に之を不覺心といふ。本不覺なり、自己は眞如本覺なり、此の不覺を無明といふ。

(二)無明熏習 根本無明が眞如に熏習して微細の起きを生ずる所の業相を識等のこととな

寂然たるを止と名
け、寂にして常照
なるを觀と名く、
初修を止觀と名け
修成を定慧と名く

具等を説く。

第九卷

此の中には廣く種種の魔事及び對治門を説く、並びに讚歎三昧功德等を説く。

第十卷

此の中には兩輪具闕益損門を説く、又勸劣向勝不退門を説く、又勸修利益分、此の中に此の不二摩訶衍と三自摩訶衍とを授くることを説く、又龍猛菩薩の勸戒を説く。

國譯釋論指事上終

國譯釋論指事下

沙門空海の撰

第二卷

本に已に立義分を説く、次に解釋分を説かん 此の中には唯し四法を釋して所餘の法門は略して解
釋せず、九論に已に説くが故に、云何んが四と爲る、
一には一體摩訶衍、二には三自一心摩訶衍、三には眞如門、四には生滅門なり解釋に三種あり、云何んが三と爲る、一には顯示正義、
二には對治邪執、三には分別發趣道相なり、釋に曰く、是の如くの三門は、四法を解
釋する大門の數量なり。顯示正義とは一心法に依るに二種の門あり、云何んが二と爲
る、一には心眞如門、二には心生滅門なり、釋に即ち是れ建立
四種法相門なり 是の二種の門に皆各々總し
て一切の法を攝す、即ち是れ法門該
攝圓滿門なり 此の義云何ん、是の二門は相ひ離れざるを以ての故
なり、即ち是れ發起問答顯因門なり、正義を顯示すはより相離れざる故に
至る之を略説分と名く、此の中に三門あり、上の如く應知るべし。 心眞如とは即ち是れ一法
界大總相法門體なり、乃至唯し證と相應するが故に、此の中に三門あり、云何んが三と爲る、
一には建立名字門、二には眞詮眞體門、三には解釋名字門なり 心眞如とは即ち是れ一法界大總相法
決疑門、三には假說開相眞如門なり、第一門の中に三門あり、一には根本體性眞如門、二には發起問答

門體なり即ち是れ建立 所謂る心生は不生不滅なり 即ち是れ直に眞如門を 一切諸法は唯し妄念
 に依りて差別ありて且く彼の有を假 若し心念を離れぬれば則ち一切の境界の相なし 戲論の識
 を離るれば一切の妄境 是の故に一切の法は本より已來言説の相を離れ名字の相を離れ心縁
 界あること無きが故に 畢竟平等にして變異あることなく破壊すべからず、三離の功徳
 の相を離る 直に眞如門離絶の 畢竟平等にして變異あることなく破壊すべからず、三離の功徳
 が故 唯是れ一心なるが故に眞如と名く、總じて體眞 如を結す一切の言説と假名とは無實なり、但
 し妄念に隨て不可得なるを以ての故に 三離の因縁を顯 示するが故に 眞如と言つは亦相あることなし、
 第二傳の言に執 謂く言説の極なり言に因りて言を遣る 直に眞如の無相 此の眞如の體は遣る可
 きことあることなし一切の法は悉く皆眞なるを以ての故に 眞に約して 名を釋す 亦立つ可きことな
 し、一切の法は皆同じく如なるを以ての故に 如に約して 名を釋す 當に知るべし一切の法は不可説
 不可念の故に名けて眞如と爲す。總じて上に説く所 を結するが故に
 已上根本體性眞如門なり。

問て曰く、若し是の如くの義ならば、諸の衆生等云何んが隨順して、而も能く得入せ
 ん疑を生じて 答て曰く、若し一切の法は説くと雖も、能説可説あることなく、念すと雖
 も亦能念可念なしと知る、是を隨順と名く、若し説念を離るゝを名けて得入と爲す。

其の次第の如く彼の二の疑を決す、已上は發起問 復次に眞如とは言説に依りて分別するに、二種
 答決疑門なり、已下は次に假説開相眞如門を説く 義あり、云何んが二と爲る。一には如實空、能く究竟して實を顯すを以ての故に。
 二には如實不空、自體に無漏の性功徳を具足すること有るを以ての故に。言ふ所の空
 とは本より以來一切の染法は相應せざるが故に。謂く一切の法の差別の相を離れて虚
 妄の心念なきを以ての故に、當に知るべし、眞如の自性は有相にあらず、無相にあら
 ず、非有相にあらず、非無相にあらず、有無俱相にあらず、一相にあらず異相にあら
 ず、非一相にあらず、非異相にあらず、一異俱相にあらず、乃至總して説かば一切衆生に
 妄心あるを以て、念念に分別して皆相應せざるが故に説て空と爲す、若し妄心を離れぬ
 れば實に空すべきことなきが故に。言ふ所の不空とは已に法體空にして妄なきことを
 顯すが故に、即ち是の眞心は常恒不變にして淨法満足すれば即ち不空と名く。此の中に 二門あり
 一には如實空眞如門、二此の段釋論に牒文之を略す、離念の境界を以て證す、相應の故に。
 是れ亂住證なり、往向證にはあらず、已上 心真如門了んぬ、已下は心生滅門なり 心生滅とは如來藏に依るが故に生滅の心あり、乃至
 不覺の義なり。此に二門あり、一には所依總相門なり、二には能依別相門なり、此の中に二重あり、思を住
依とすが故に先 心生滅とは上を唱へて下を 如來藏に依るが故にとは 所依の一心なり、彼の多一心を
づ初門を説かん

れ上の心の字を下に降し、能依の法門なり、謂く生滅門なるが故に、所謂る不生不滅と生滅と和合して、異名を建立するが故に、**非一非異なる**を名けて**阿黎耶識**となす。分の名を略去して満の名を建立す、義は具足す、雖も言は未だ足らざる故に、此の中の所説の不生不滅及び生滅とは總じて諸の無爲を攝するを不生滅と名、和合とは、即ち是れ能無所無の差、總じて諸の有爲を攝するが故に名けて生滅と爲す。別を開示するが故に、**非一非異なる**を即ち是れ有爲無爲の同異に名けて**阿黎耶識**と爲す。總じて圓滿の字を結す此の上は下轉門なり、次に上此の識に二種の義あり、能く一切の法を攝し一切の法を生ず、云何んが二と爲る、一には覺の義、二には不覺の義なり。總じて大識の殊勝圓滿の相を顯示するが故に、此に二種の圓滿あり、一には功德圓滿、二には過患圓滿なり云云

第三卷

言ふ所の覺義とは乃至究竟覺にあらず。此に二門あり、一には略説本覺安立門、二には略説始覺安立門なり。本覺門の中に又二あり、一には清淨本覺門、二には染淨本覺門なり。始覺の中に又二あり、一には清淨始覺、二には染淨始覺なり。言ふ所の覺の義とは即ち是れ總句なり、自下は皆是れ別句なり、總とは通じて一切の覺を表するが故に、別とは各々差別に説くが故に、別句の中に先づ清淨本覺、清淨始覺と説き、次に染淨本覺と染淨始覺と説く、其の次第の如く説く心體離念の相と謂ふは、即ち是れ清淨本覺なり、心は自性清淨心なり、離念の相とは即ち相見つ可し心體離念の相と謂ふは、即ち是れ清淨本覺の體なり、是の心體を本覺と名く、離念の相とは即ち體は本有法身の體なり、是の心體を本覺と名く、離念の相とは即ち

本覺の辭なり、者と即ち人なるが故に、**虛空界に等しうして遍せざる所なし**是の如くの覺者は善く十種の徳義を具足する虚空の理を證するが故に、**法界一相**是の如くの覺者は所證の眞如界に於て而も即ち是れ如來平等法身善く二種の勝妙の理を證す、清淨者即ち是れ法身如來の自性自體なるが故に此の法身に依りて説て**本覺と名く**して清淨本覺の稱を建立するが故に、**以上清淨本覺を説きたんぬ。**

何を以ての故に、即ち請問の辭なり、清淨始覺を建立せんぞ欲して、是の如きの請を作す、**本覺の義とは始覺に對して説く**直に彼の始覺とは即ち本覺に同するを以て、其の所用を作す、謂く自然の始覺は彼の本覺と同なるを、**始覺の義とは本覺に依るが故に不覺あり。**不覺に依るが故に始覺ありと説く、通じて二種の離念の本依るが故に不覺ありとは、即ち是れ離念の本覺なり、不覺に依るが故に説て始覺ありとは即ち是れ離念の始覺なり、**又心原を覺るを以ての故に究竟覺と名く、心原を覺らざるが故に非究竟覺と名く、**釋に此の句を闕脱す、略して兩覺安立門を説き訖んぬ、已下は廣説兩覺決擇門なり、**此の義云何ん、凡夫の人の如きは乃至同一覺なるが故に**此に二門あり、一には**建立四相門**此に四門あり、の四相、二には**微細過患の四相**、三には**無常功德の四相**、四には**常住功德の四相**なり、二には**建立隨覺門**此に二門あり、一には**滿覺**

第一 十信位

如凡夫人とは、即ち是れ趣向行者なり位十信に在りて未だ不退を得ざるを、**前念の起惡を覺知するが**

即ち是れ修行因相を顯示す、未だ十信に入ることを得ず、已故に能く後念を止めて其をして起らざらば、前には二種の滅相は是れ大なる過患なりと知せず覺せず。故に能く後念を止めて其をして起らざらしむ治道不起す、氣力極めて弱きが故に名けて故なき。復た覺と名くと雖も即ち是れ不覺なるが故に、即ち熏離俱相を顯示す、所謂滅相の法は實に是れ過患なりと覺知す。

第二 三賢位

二乗の觀智と初發意の菩薩等との如きは、即ち是れ趣向行者なり、位三賢に在り、此の位の中に於て將て菩薩と同じて念異を覺して相を顯示す。念に異相なし、行因果相、麤分別の執着の相を捨つるを以て、異相なき緣、故に相似覺と名く、即ち是れ前を結し並びに兼て熏離俱相を顯示す。

第三 九地位

法身菩薩等の如きは、即ち是れ趣向行者なり、位九地に在り、九地の菩薩は眞如念に住相なし、行因果相、分別麤念の相を離るゝを以ての、無住相の緣、故に隨分覺と名く、即ち是れ並びに兼て熏離俱相を顯示す、生相の細念未だ出離せざるが故に。

第四 因滿位

菩薩地盡の如きは、即ち是れ趣向行者なり、此の中に二あり、滿足の方便一念に相應す、即ち是れ因示す、此の中に二の金剛喻定あり、一には因圓滿者、二には果圓滿者なり。滿足の方便一念に相應す、即ち是れ因示す、此の中に二の金剛喻定あり、一には方便金剛定、二には正體金剛定なり。

第五 果圓滿位

覺心初めて起れば心に初相なし、果圓滿者を顯示す、大圓鏡智分明に現前して乃至微細の念を遠離するを以ての故に、心性を見ることを得、心即ち常住なるを究竟覺と名く、此れ始覺の般も無生覺に到ることを、是の故に修多羅に説かく、若し衆生ありて能く無念を觀するものは、即ち佛地に向ふと爲すが故に、此は經を引て證す、又心起とは初相の知るべきことあることなし、而も初相を知ると言つは即ち謂く無念なり、此れ疑を除て勝解を生ぜしむ、是の故に一切衆生は名けて覺となさず、本より來た念念相續して未だ曾て念を離れざるを以ての故に、無始無明と説く、即ち是れ上の無念の義を成立す、謂く金剛已還の一切衆生は獨力業相と大無明念を未だ出離せざるが故に、若し無念を得れば、即ち心相の生住異滅を知るなり、此より下は始覺の境界の周遍圓滿することを顯示す、謂く大覺者已に彼無念等しきを以ての故に、何の義を以ての故か、是の如く知るや、自の無念を得る時は一切の諸の衆生も平等に得るが故に、而も實には始覺の異なることなし、四相俱時に而も有なるを以て、而も有爲なきを以て皆自立なし、本來平等にして同一覺な

(一) 秘中の云云
 自下の重釋中の第
 三重にして秘中の第
 二重なり。
 (二) 佛云云
 蓮花部、金剛
 部、三十七尊、金
 剛界曼荼羅の三十
 七尊なり。二教論、
 十住心論、參照。
 (三) 四佛、阿闍、
 寶生、彌陀、釋迦、
 の四佛なり。
 (四) 四法、一心と
 三大ないふ。
 (五) 秘中の云
 中、自下四重釋の
 秘中の第三重なり。
 (六) 頂禮云云
 釋
 論の卷頭の序なり。

兩重の一法界心は是れ真如門、是れ則ち眞言なり、兩重の三大義は則ち生滅門、皆是れ種因海なり。復次に一心法界三大義に於て眞如生滅の二法門あり、其の眞如は是れ眞言、生滅は則ち顯教なり。此れ復各二義あり、一には顯が中の秘、二には皆第十の住心の分齊なり、九種の住心の秘密にあらず。復次に能入の門は顯教、所入の法は眞言なり、次に(一)秘中の深秘門に就けば、此の不二・眞如・生滅の三門は是れ三部の法門なり、次での如く(二)佛・蓮・金・是れなり。此に復た三重あり、三部に各三門を具する故なり。復次に此の三十三種の法門は、是れ(三)三十七尊の三摩地なり、不二は是れ大日不二の總體、一心・三大は是れ(四)四佛、前後兩重の門法は四波羅蜜以後に之を配すべし。復次に前重の一心・三大は四佛、十六門の法は十六菩薩、後重の(五)四法・總は是れ四波羅蜜、眞如所入は内の四供、能入は外の四供、生滅門の法は四攝なり。(六)秘中の深秘に就けば、皆是れ大日如來の法曼荼羅身なり、一一の法に各各の法を具して互相攝入し、輪圓具足して横豎無邊なり、數量刹塵に過ぎて理理各各無數なり。(七)頂禮したてまつる圓滿覺と乃至賢聖衆とは歸敬の序なり、頂とは身密、三業の中に身を以て禮するは身業の勝れたることを表す、顯教の心業を勝れたりとするが如くにはあ

(一) 三業平等身
 業、口業、意業、
 平等なり。
 (二) 自覺云云
 覺行圓滿の三義あり。
 (三) 疏 贊云疏一
 三十六丁表。

(四) 次の一句論
 の句にして覺と所
 證と法と藏ととの
 一句なり。

らす。禮とは三業に通ず、(一)三業平等にして能所不二なり。圓滿覺とは衆多の義を具す、一には三身なり、圓とは法身圓圓海の佛なり、滿とは報身修圓海の滿果なり、是れ則ち報の義なり、覺とは化身、(二)自覺・覺他・覺行圓滿は作變化身釋迦牟尼佛等なり。復次に圓覺は眞佛、滿覺は俗佛なり。復次に圓覺は不二の佛にして前の如し、滿覺は修因海の佛なり、因滿果滿等各別の佛是れなり、圓滿覺とは不二の佛なり、(三)疏に云く、此の論文に約せば餘教の説に異なり、三十三種に佛寶あるが故に、應に隨て同・別・住持の三種の三寶を合具するが故にと云云具には疏の釋の如し。復次に、二字因果に通ず、若し末を攝して本に歸せば唯不二の佛を取る、自餘の法門には佛なきが故に。復秘釋に就かば圓滿覺とは曼荼羅の諸佛を名けて圓滿と爲す、餘の法門の中には具足せざるが故に。(四)次の一句は果・理・教・行の四法なり。因分の門法分分に具足す、若し其の本に尅せば唯不二のみあり、果とは果位の萬德なり。又覺とは是れ人法不二の言なり、故に下に不二摩訶衍とは圓圓海の諸佛なりといふ、云云是れ則ち眞實の法寶なり。又覺とは能證の智なり、所證は理、法は教、藏は行なり、又是れ無盡莊嚴藏なり、今此の次第は是れ因・行・證・入なり、覺とは金剛部、理とは眞如智、法とは語密

(一) 證 一本に註
 (二) 大 三法羯 前
 (三) 卷 參照
 (四) 論 論
 (五) 論 論
 (六) 論 論
 (七) 論 論
 (八) 論 論
 (九) 論 論
 (十) 論 論
 (十一) 論 論
 (十二) 論 論
 (十三) 論 論
 (十四) 論 論
 (十五) 論 論
 (十六) 論 論
 (十七) 論 論
 (十八) 論 論
 (十九) 論 論
 (二十) 論 論
 (二十一) 論 論
 (二十二) 論 論
 (二十三) 論 論
 (二十四) 論 論
 (二十五) 論 論
 (二十六) 論 論
 (二十七) 論 論
 (二十八) 論 論
 (二十九) 論 論
 (三十) 論 論
 (三十一) 論 論
 (三十二) 論 論
 (三十三) 論 論
 (三十四) 論 論
 (三十五) 論 論
 (三十六) 論 論
 (三十七) 論 論
 (三十八) 論 論
 (三十九) 論 論
 (四十) 論 論
 (四十一) 論 論
 (四十二) 論 論
 (四十三) 論 論
 (四十四) 論 論
 (四十五) 論 論
 (四十六) 論 論
 (四十七) 論 論
 (四十八) 論 論
 (四十九) 論 論
 (五十) 論 論
 (五十一) 論 論
 (五十二) 論 論
 (五十三) 論 論
 (五十四) 論 論
 (五十五) 論 論
 (五十六) 論 論
 (五十七) 論 論
 (五十八) 論 論
 (五十九) 論 論
 (六十) 論 論
 (六十一) 論 論
 (六十二) 論 論
 (六十三) 論 論
 (六十四) 論 論
 (六十五) 論 論
 (六十六) 論 論
 (六十七) 論 論
 (六十八) 論 論
 (六十九) 論 論
 (七十) 論 論
 (七十一) 論 論
 (七十二) 論 論
 (七十三) 論 論
 (七十四) 論 論
 (七十五) 論 論
 (七十六) 論 論
 (七十七) 論 論
 (七十八) 論 論
 (七十九) 論 論
 (八十) 論 論
 (八十一) 論 論
 (八十二) 論 論
 (八十三) 論 論
 (八十四) 論 論
 (八十五) 論 論
 (八十六) 論 論
 (八十七) 論 論
 (八十八) 論 論
 (八十九) 論 論
 (九十) 論 論
 (九十一) 論 論
 (九十二) 論 論
 (九十三) 論 論
 (九十四) 論 論
 (九十五) 論 論
 (九十六) 論 論
 (九十七) 論 論
 (九十八) 論 論
 (九十九) 論 論
 (一百) 論 論

門蓮華部、行とは入の義なり、是れ因より果に至るの義なり、若し從本垂跡ならば、行とは發行の因なり、因は即ち行なり、教とは教行なり、理の爲めに發能證教なり、理とは蓮華部の理なり、果とは果中の果入涅槃なり。復次に四種曼荼羅なり、次での如く之を配す、(一)大・二・法・羯・羯なり、(二)次の二句は僧寶なり。復次に一切の菩薩、及び外金剛部諸の賢聖衆一味和合する曼荼羅會なるが故に僧と名く。(三)次の一行は是れ發起の序なり。淺深重の意あり、一には隔檀門は後重の一心門なり。往向位は三自門なり。二には隔檀門は兩重の眞如門往向位は兩重の生滅門なり。三には隔檀門は一心法界、往向位は三大義なり、四には隔檀門は不二門、往向位は三十二種なり、五には隔檀門は蓮華部門、往向位は金剛部門なり、六には隔檀門は金剛界、往向位は胎藏界なり。次の句に諸の衆生とは、三定聚の衆生なり、此の(一)三定聚に三義あり釋文の如し、皆是れ所化なり、但し佛果を名けて正定聚と爲ることは、三十二種の佛なり、九種住心の衆生は皆所化の人なり。次の句の中に師とは二重あり、一には釋迦・馬鳴、二には大日・金薩なり。淺略一分の義を説き、無盡の大恩を報ふるが故なり。(二)論して曰く乃至已に本趣を説つ、といふは造論の(一)五因なり、二義あり、一には自師とは淺畧

(一) 漠漠等 漠漠
 冥冥として 窺窺の
 境に絶え、思惟の
 なを云云

(二) 次に云云 造
 論の第四因なり。
 (三) 或は云云 今
 造論の第五因な
 り。

は疏鈔の如し、二には自師とは深秘に依らば人に名くれば不二圓海の諸佛、法に名くれば不二大乘なり。其の體深とは法佛の三密は因分の境にあらず、故に深玄と名く。其の窮微妙とは微細心地の法身は顯教の麤強にあらず、故に微妙と名く、皆是れ不二大乘の境界なり。未だ正證を得ずとは、是れ修行種因海の分なり。未だ邪行を出せずとは種因海の位なり。(二) 漠漠等とは重ねて言ふは兩部曼荼羅の能迷の心なり。次に、或は利鈍の衆生をして乃至所詮の理とは、隔檀門往向位に六重の義あり、彼の門に隨て當に利鈍を分ち所詮を明すべし。所詮に六義あり、一には後重の一心法界、二には兩重の所入、三には不二門なり、四には不二法なり、五には蓮・金・不二佛部なり、六には兩部不二一心本源なり。(三) 次に、或は師の亭毒極めて深重なるに由るが故に乃至師の大恩を報せんが爲めの故に、とは頌の廣釋なり。次に(四) 或は秘に等とは、秘密の道眼を開き觀察するに、諸教の末學、心續生の次第を知らず、執着邪論を起すが故に。次に、或は親り等とは、馬鳴及び一切の本の意趣本樂を聽受するなり。次に、是の如く等の因縁あり等とは、此の五因是れ五佛、五智、五大願等なり、等の言の表する所は無量無數の義なり。

(二) 論別論の一
四丁右表初行、本
書六頁二行。

(三) 答ふ一本に
は或はに作る。

(四) 其の開示云
論一の四丁左
表、本書七頁三行。

(五) 藏の差別論
一の五丁右表、藏
の差別を説かんと
本書七頁。
(六) 或の言は是れ真言の中の無盡藏に對して或の言を置くな
の文字をいふ。

次に、(二) 論別等とは、問ふ、顯論に局るか、當爲顯密の論等に通ずるか。
答ふ、十萬九千部の論の中に因分果分の論あるが故に顯密に通ずるに失なし。次に馬鳴
菩薩所作の論等とは。

問ふ、何が故に龍樹は是れ千部論師なるに、馬鳴は唯千部の論を作りたまふや。(三) 答
ふ馬鳴は是れ深義を會して顯人に隨ふが故に、又本源を顯すが故に。又淺畧を表する
が故に、龍樹は彼の義に翻するが故に、顯密を開くが故に、枝末を表するが故に、深
廣を顯すが故に不同なり。次に、(三) 其の開示する所は同なりや異なりや等とは、二義
あり之を知るべし、三十三種の法體十論之を建立するが故に攝義論と名く。

問ふ、何が故に華文論をして攝義論と名けざるや。

二義あり、一には文の多少に依りて攝義・華文と名け、二には義の多少に依りて攝義・
華文と名く。

問ふ、三十三種同じく之を建立するや。

答ふ、分明に見えず、百六十摩訶衍等の文末だ不二大乘と見えす、此の義決すべし。

次に、(四) 藏の差別等とは、(五) 或の言は是れ真言の中の無盡藏に對して或の言を置くな

(一) 其の行法云
論一の六丁左
裏。

(二) 摩訶衍論云
論一の六丁右
裏。文狭く凡そ
一萬七百四十言な
る故に。

(三) 總じて六馬
鳴論一の七丁右
裏、本書頁。

(四) 本は云云論
一の十一丁左表。
(五) 本を唱て云
云論一の十一丁
右表、本書頁。

り、五十一藏は皆是れ顯教なり、之に就て因藏とは種因海なり、果藏とは果海なり、
諸宗絶離の極果は是れ密藏の本なるが故なり。

行者を引くとは、顯を引て密教に入る意なり、今明す所の三藏とは顯密總持の三藏な
り、唯顯の三藏にはあらず。次に、(二) 其の行法を持して等とは、不二總持藏の釋なり、
兼て因分に通ず。次に、經の差別を説かんと等は、今此の顯經の中に又少分不二の義
理を説く、權多實少の判なるが故なり、又秘家に入つて之を見る時は甚深秘密の義を
説く、心經の秘鍵に之を判するが如し。次に、(三) 摩訶衍論は(四) 文狭く句少うして等とは、
所依は是れ百億部の經なり、能依は則ち摩訶衍論なり、是れ經論次第本願の故なり、若
し所詮の義に依りて之を判せば、百億の經は是れ能依所攝なり、起信論は是れ所依能
攝なり、散説の經に望むれば此は攝義論より深なり、隱密して未だ開顯せざるが故に、
釋論に望むれば又是れ淺なり良に以へあるなり。次に、(四) 總じて六馬鳴あり等とは、龍
樹菩薩の意の云く、今起信論は是れ何れの馬鳴何れの時節と判すべからず、機に隨て
皆是れ相違の失なし。(五) 本は大光明佛等とは、盧伽と翟那とは是れ定慧二法なり。馬鳴
菩薩は是れ大光明佛、定慧一體の大日佛なり。次に、(六) 本を唱て釋を作らん等とは、

今此の釋論は餘の論教に異なり、一字多義を明すが故に、此れ則ち字相・字義等の意なり。次に、惣攝一切衆命門、二には歸向圓滿大覺門なりとは、釋門の佛實に準じて之を知る可し。八萬四千四十八種の功德とは、不二法身如來の功德なり、一一の功德秘釋に依て之を知るべし。十寂は一には超過寂、此は不二法身、彼の顯の一乘三乘の二乘を遠離するが故に、二には出離寂、此は不二法身、三大義と一心法界との域を永離するが故に、三には對治寂、今此四住地の中に見一處住地とは、是れ闇の無明の中の見一處住地なり、根本無明なり、種因海は是れ無明の分位なり、彼の不二法身は頓に無明を斷じて不二一如の理を見現するが故なり。四には厭患寂、今五蘊とは心經の秘鍵に明す所の五蘊は横に迷境を指すと云云九種の住心は皆れ迷境なり、不二法身は彼の境を過ぐるが故に。五には離愛寂、今六道の岐とは是れ根本無明なり、不二法身は亦別る、故に、次の五種の寂は上に準じて之を知れ、法身如來の十は圓を表す。十勝とは、一には力勝とは、二には處非處智力、三顯宗論に云く、一切の法の自性の功德有と知る處智と名け、亦非有と知り非處と名くと。不二法身獨り曼荼自性の徳と知る、勝義の般若を具するが故に。二には無畏勝、三、大日經に云く、心の無量を知るが故に、

(一) 一には云云
勸註三十一丁裏に
は來註さす
(二) 顯宗論 三十
六丁裏
(三) 大日經 百字
果相應品なり

則ち(一) 四種の無量を得、得已りて最正覺を成じ(二) 四無畏を具足して獅子吼すと云云因海は不知の故に、不共の故に。三には不共勝、不二法身、獨り十八瓊伽不共の法を具足するが故に。四には道品勝、不二法身獨り三十七尊の三摩地道品を具足するが故に。五には變化勝、不二法身獨り利他の四法身を具足するが故に。(三) 次の五種は上に準じて之を知れ。(四) 十業とは、一には(五) 自然業、不二法身の所作は是れ自性法然なるが故に、因分は然らず、生滅なるが故に、二には(六) 平等業、不二法身は(三) 三平等なるが故に、因分は爾らず。三には(七) 相應業、顯機に隨て現じ、秘機に應じて出るが故に、因分は爾らず。四には(八) 具足業、(九) 二界の功德を圓滿するが故に、因分は爾らず。五には(一〇) 無盡業、無盡莊嚴邊際無きが故に、因分は爾らず。次の五は上に準じて之を知れ。(二) 十遍とは、一には根遍、不二法身は諸身三世に常に法界に周遍するが故に、因分は爾らず、一徳となるが故に。二には識遍、不二法身は諸の心識達せざる所なきが故に、因分は爾らず、心識微少なるが故に。(三) 後後上準じて之を知れ。四智等とは、一には光明無盡藏智大圓鏡智なり、二に二智あり、法界體性智は今分明にあらず略して三義あり、一には(四) 四智具足圓智とは是なり、二には光明藏智は大日の佛智

(一) 四種の無量
身と智と衆生と虚
空となり。此の
一句は取意なり。
(二) 次の五種云
云、次の五種本書
頁を参照せよ。
(三) 十業論一の
十二丁裏。
(四) 自然業、作意
を用ゐざるをい
ふ。
(五) 平等業、身口
意三業の平等なる
をいふ。
(六) 相應業、萬機
に相應する業なり。
(七) 具足業、輪圓
具足して闕少なき
なり。
(八) 二界、金剛界
胎藏界。
(九) 無盡業、横に
十方に三世の
十丁左裏、論一の
十三丁裏、本書
頁。
(一〇) 後後、第三の
境界に至る。第十
等遍に云云。
(一一) 四智云云、論
一、十四丁右裏に曰
く、是を名て四智

となす、契經の中
に於てに四種の圓
智といふとあり。

(一)礙一本には
量に作る。

(二)法と僧云云
論の二十四丁左
表、本書二十二頁。
論一十五丁右裏。

(三)等の言は云
云、論一十五丁裏
二行、本書二十四
頁。

なり、無盡藏智は大圓智なり、三には能證の智は是れ大圓智なり、所證の智は大日不
二の智なり、能を擧げて所を遍す意か、此の五智は則ち人に名く、五佛則ち五大と成
る、是れ秘密の意なり。四無礙等とは、法無礙とは不二一法の上の理智定慧體用等と
不二平等の性相とを了知するが故に、二には義無礙とは不二一法の上の一多無礙の
三十三種淨法の義と恒沙無盡の五種有爲の染法の義とを了知するが故に、三には辭無
礙とは不二法身は假名を壞せずして^ア文字^イ字^エ等の實相を説くが故に、四種法身橫平等
の故に、自受法樂の故に、四には樂説無礙とは四種法身豎差別の故に、利他の故に、
及び顯教を説くが故に、四智と四無礙とは體同にして義異なり、四智は金剛界、四無
礙は蓮華界なり。次に(二)法と僧を説かん等とは、四法は是れ語密中の三密等なり、前
の如く之を知れ。(三)十種の眞如並びに正智とは、暫く十地の次に依て滿數を表するが
故に、實には理理無數、智智無邊なり。今此の論の中に十識・十智・十理・十眞・十如・
十本・十覺・向上平等・向下平等・等を説く。次に(三)等の言は極めて甚深なりとは、三義
あり、一には所歸の三寶に就く、此に多義あり、人法平等、三寶平等、能説所説平等、
能證所證平等、因と果と平等等は是れなり、二には能歸の人に就く、馬鳴と衆生と平等身

(一)本趣論二十
六丁右裏三行。
(二)地前論一十
七丁右裏、地上同
上。
(三)正體智
(四)論一十七丁右
裏初行に正後二僧
とせり。

(五)問ふ云云此
の問意は、論一十
七丁左裏三行に、
馬鳴菩薩は彼の初
門を須あたまふの
句ある故なり。
(六)次に總體云
云、論一十八丁右
表四行にあり。

と命と平等なり、三には能歸所歸命根平等、又能歸所歸身平等、此の如く等の無量無
邊の人法等の平等なり、總平等、分分平等、總別平等、又重重なり、今僧寶の中に上
中下の僧寶あり、上中は是れ不二の僧寶、又分分の上中の僧寶は因分の中にこれあり、
此の三寶本論の意に依らば顯略隱密なり、今は開顯深廣に就くが故に、釋論の三寶の
如く之を知るべし。次に(一)本趣を説かん等とは、甚深大乘の正道とは正しくは是れ不
二大乘、兼ては三十二種に通ず。疑惑等とは三十二種の能迷なり。連續門とは上轉下
轉なり、二義あり、上轉とは三十二種の佛位に連ねて不二の佛種を續き、三十二の大
乗を説きて、次の不二大乘に連續するが故に。(二)地前とは因分、地上とは果分なり、
又因分に通ず。(三)正體智僧とは金剛界の僧なり。(四)後得智僧とは是れ四重曼荼羅の僧
寶なり、又顯教に通ず。次に未だ圓滿の果を得ずとは、始は因果の生、終は因分の極
位に至るまで是れなり。

(五)問ふ、何が故ぞ馬鳴菩薩初門を須ふるや。

答ふ、馬鳴因法を説て機を導くが故に、今龍樹の意は開顯して因を引て果に入るが故
に、實に三門を具するなり。次に、次に總體を開かん等とは略して三義あり、一に

(一) 能入所入云
論一十九丁右
裏。
(二) 次に建立、論
一十八丁右裏、本
書廿九頁。
(三) 五分、五分因
果の法にして論一
十九丁左表、本書
廿九頁。

は不二總體の上に十六門を開くが故に、二には不二總體の上に三十二種を開くが故に、三には一心三大總體の上に十六能入門を開くが故に。次に所入門とは、科門なるが故に門と名け、又十六所入は不二の爲の門なるが故に。次に有法とは總じて十六能入門法を標すと。云云 二重あり之を知るべし。次に所詮の理に於てとは、正しくは不二兼ては因分の所入なり。次に彼の法の爲に依止と作すが爲にとは、二重あり、其の十六所入門は、十六能入門に望むれば是れ依止なるが故に、又不二所入の法に望むれば是れ能依止なるが故に。能く信根を起すとは、門法作業の相なり、今此の能起所起、各々二重あり、上に準じて之を知るべし。(一) 能入所入種種差別とは、不二總體の上の差別縁起の法なり。次に、(二) 次に建立を明さば等とは、説くに(三) 五分ありとは、因果の法門に通じて之を建立す、本論の五分は後重の二法二門を以て宗と爲して之を建立す、釋論は五分を開説す、末論に依れば本論も亦深し。

問ふ、因縁分の中の機は唯是れ因分の機か、又果分に通ずべしや。

答ふ、二義あり、隠れたるに依らば、通じては三十三種、兼て十論華文に建立す、略本論は果分の法は離機離教なり、釋論に依り大師の意に就かば八種の因縁は因果に通

(一) 不動と立理
論一十四右裏に明
す所の十論中の第
八不動本原論の第
九甚深立理論なり
本書七頁。

(二) 八種論一ノ
行二十一丁左裏三

ず、能起信根の機、既に因果に通ずるを以てなり、又(一) 不動と立理との中に五分を建立すべきが故に。

問ふ、何が故に見えざるや。答ふ、暫く因分に準じ本論に任せ、隠略に依り、一義に就て説くが故に失なし、建立、非建立、亦以て之に同じ。次に(二) 八種根本總體等とは、

二義あり、意を留めて之を知る可し、八種の根本、八種即ち根本なり、不二の八種、因分の八種、根本總體に義あり。次に一切の諸の教法は皆立義分に盡き等とは、因果二教に通ず。一切の諸の所化の機とは亦因果二機に通ず。

問ふ、大師の二教論に云く、地論、釋論には其の機根を離れたりと稱すと云云又云く、龍猛の釋論には圓海不談の説を挾むと云云 何が故ぞ大師の意趣に違せん、造論の旨説に背て今猥しく此の義を注す甚だ以て不可なり。

答ふ、此の論に就て大師の意趣一準にわらず、豎中の豎淺略の一義に就て彼の説を作したまふ、若し豎中の深秘に依らば、正しくは因を説き兼ては果を明す、若し又秘中の深秘に就かば、正しくは果分を説き兼ては因を明す、若し又秘中の深秘に依らば、惟果分の因果を説て因分をば説かず、今此れ等の義に就かば是れ眞言所學の論なり、

顯秘の差別又此の論の中に説けり。彼の初重は是れ本論に依りて末論の義を判するなり、八種の因縁は是れ本論に依り、因分隨機に就く、淺略隱深の義なり、一には因分の機なり、末論に依らば因果に通じ、開顯に就かば因果二分の機なり。○是の如く此の論は乃至總攝せんと欲ふが爲め等とは、如來とは不二摩訶衍なり。次に、○三世諸佛の一切の教理等とは、不二の教理は自然常住一味平等にして分別を離れ言慮に超えたり、然れども衆生の根生利鈍萬差なれば教法無量なり。又能化の人も自ら同なること能はず、人に三身四身の別あり、教に三十三種あり、而るに其の不二大乘は唯だ是れ一味、唯だ是れ平等なり。廣大とは、正しくは能入、兼ては所入に通ず。深法とは所入なり。無邊の義とは三十三の法門なり、所入の上に於て廣大の義を作すが故に、無量廣大なり。次に、○兩重の廣略法門を出興すとは、二義あり。一には經論に就かば廣略の教法あり、故に其の因縁を問ふ。二には此の論の前後兩重の教法に就て因縁を問ふ。次に立義分を説かん。一には一法を立て、諸法を攝す不二大乘なり、又一心法界なり、金剛一乘なり、一如一藏一大法身等是れなり。二には二法を立つ、一には性徳圓滿海、二には修行種因海、顯密の二教、能所の二法、門法の二法、自他の二身、因

○是の如く云
云論の二十六
丁右表。○三世諸佛云
云論の二十六
丁右裏。

○兩重云云
の二十七丁左裏

果兩界等の二法、一心三大の二法、體相の二法等是れなり、三には三法を立つ、不二と真如と生滅との三門、不二と前重と後重との三門、實知と、真如と、一心との三法、三諦、三寶、三身、三部、三密等是れなり。四には四法を立つ、不二大乘と、不二門と、真如門と、生滅門と是れなり、又一心と三大是れなり、又真言と權佛と三乘と小乘と是れなり、四智、四印、四無量、四地、四曼、四法身等是れなり。五には五法を立つ、不二と一心と三大と是れなり、不二と真如所入と真如門と生滅所入と生滅門と是れなり。真言と四種大乘と是れなり、五部、五智、五方、五大、五佛等是れなり。六には六法を立つ、不二と不二門と一心と三大と是れなり、不二の門法と前重の眞生と後重の眞俗と是れなり。不二と不二門と真如と真如門と生滅と生滅門と是れなり。真言と四種大乘と小乘と是れなり。六根、六識、六境、六大、六會等是れなり。七には七法を立つ、不二と並びに不二の一心と三大と真如と生滅と是れなり、又不二と並びに不二門と前重の二法と後重の四法と是れなり、不二と前重の三諦と後重の三諦と是れなり、不二の五法と前重と後重と是れなり、真言と華嚴と天台と三論と法相と成實と俱舍と是れなり、真言と權佛と菩薩と緣覺と聲聞と天と人と是れなり、七藏、七

識、七菩提等是れなり。八には八法を立つ、果分の一心と三大と因分の一心と三大となり、八大乗、八門、八葉、八宗、八正道、八識等なり。九には九法を立つ、不二と及び八大乗と是れなり、不二と前重の四法と後重の四法となり、不二と及び一心と三大の因分と一心と三大是れなり、亦五佛と四波羅蜜となり、九會、九尊、九身、異生を除て餘の九心と九世と九識と是れなり。十には十法を立つ、不二の五法と前重の四法と後重の四法と是れなり、不二と不二門と八法と是れなり。不二と不二門と前重の四法と後重の四法と是れなり、十本、十覺、十如、十識、十住心、十界、十世、等是れなり。十一には十一法を立つ、不二と及び不二門と前重の四法と及び一心と三大と、後重の一心と三大と是れなり、不二と不二門と因分總體の四法と八大乗と是れなり、十一地等是れなり。十二には十二法を立つ、不二の一心と、三大と、前重の四法と、後重の四法と是れなり、不二の四法と及び八大乗と是れなり、不二の三大に十二大を開く、眞如門に十二大を開く、生滅門に十二大を開く、總じて是れ十二大なり、一心三大の四法と、及び八門となり、十二地是れなり。十三には十三法を立つ、不二と、及び一心と三大の四法、八門と是れなり、不二と、及び一心と三大と前の四法と後の四法

院十三大院胎
藏界曼荼羅十三大
抄一十三地通明
地とは、十地に三
地、普賢地、普賢
地、毘盧遮那智
藏大地、毘盧遮那
王經執十七丁參
照。

と是れなり。十三大院、十三地等是れなり。十四には十四法を立つ、不二と及び四法と前重の四法と、及び四法と後重の四法と是れなり、又不二と及び因分總の四法と及び四門と八門となり。十五には十五法を立つ、不二と不二法と因分總の四法と、及び四法と八門となり、不二の五と、眞如の五と、生滅の五と是れなり。十六には十六眞を立つ、不二の十六と、前重の十六と、後重の十六と是れなり、又八法と八門となり、十六大生等是れなり。十七には十法を立つ、不二と及び八法と八門となり。十八には十八法を立つ、不二門を加ふ、五佛と四波と九會と是れなり、十八會なり。十九には前に因分の總體を加ふ、又不二と不二門と因分の總と八法と八門と是れなり。二十には果の四法と因の十六と是れなり。二十一には果の五法と因の十六と是れなり。二十二には果の五法と、因の四法と及び十六と是れなり。二十三には果の門、法と因前の四法と、及び八門と、後の四法と及び八門と是れなり。二十四には果の八法と、因の十六門なり。二十五には果の九法と、因の十六と、九法となり。二十六には果の九法と因の四法と又十六となり。二十七には果の十六と、因の前の五法と、及び八法となり。二十八には果の四法と因の二十四となり。二十九には果の五と因の二十

九法此の二
字恐は刺か
か。五 恐くは三

四となり。三十には果の五と、因の二十五となり、又果の九法と、因の二十一法となり、三十一には果の六法と、因の二十五となり。三十二には果の三十二と、因の三十二となり、又果の八法と、因の二十四となり。三十三には果の一と、因の三十二となり、又果の十七と因の十六となり。三十四には果の二と因の三十二となり。三十五には果の二と因の三十三となり。三十六には果の四と因の三十二となり。三十七には果の五と因の三十二となり、五十三と、七十三と、一百二十と、一千五十七と、三千一百七十一と、乃至不可説不可説の十佛刹、微塵數、無量無邊究竟如來の三摩地なり、一にして多なり、多にして一なり、一に非ず多に非ず、亦は一亦是多なり、九種の心量の及ぶ所にあらず、又一一心の所縁に非ず、但し是れ不二心の境界なり。

問ふ、不二と三十二種と何の差別ありや。答ふ、種種の差別あり、一には不二は是れ能生なり、三十二種は是れ所生なり。二には不二は能依、三十二種は所依なり。三には不二は能起源根にして因縁を離れ、三十二は縁起の枝末にして因縁を帶せり。四には不二は明の分位なり、三十二は無明の分位なり。五には不二は能攝、三十二は所攝なり。六には不二は三世間を攝し、三十二は三世間を攝せず。七には不二は能得、三

十二は所得なり。八には不二は三十二を得、三十二は不二を得ず。九には不二は總體、三十二は別相なり。十には不二は因分の教の中に説かず、三十二は因分の教の中に能く之を説く。十一には不二は因分の機根を離れ、三十二は因機の所了なり。十二には不二、不二は因分の教の中には因機の爲めに之を建立せず、三十二は能く之を建立す。十三には不二は能く眞如を生じ、三十二は眞如を生せず。十四には不二は果分なり、三十二は因分なり。十五には不二は密號を知るが故に第一義諦を知り、三十二は密號を知らざれば中道を知らず。十六には不二は言説名字心量ありて、能く不二を説き不二を知る、三十二は四種の妄言説假名字、九種心識の分位にして不二を談せず。十七には不二は所入の如來地なり、三十二種は能入の車なり。十八には不二中道は菩薩二乗等の因分の境界にあらず、三十二の極位は彼の二乗等の所知なり。十九には不二の佛は最大乗、廣多殊勝なるが故に、三十二の佛は最小狹劣なるが故に、二十には不二は中道第一義なり、三十二は前後兩重眞俗二偏なり。二十一には不二は是れ三十二種の不二なり、三十二は不二の別門なり。二十二には不二は所絶離の境界なり、三十二は能絶離の分位なり。二十三には不二は因分の中にあり、三十二は果分の中に無し。

（二）金剛果曼茶羅は
羅曼茶羅なり、
智開顯せられた
る佛智の境界を
曼茶羅に開きし
のに於て、胎藏
曼茶羅なり、胎
藏曼茶羅に於て
は未だ開顯せら
ずして胎藏に於
之れに因曼茶羅
ふ。

二十四には不二は能く自門他門を知る、三十二は猶ほ自門を知らず、況んや他門をや。二十五には不二は真如常住なり、三十二は生滅無常なり。二十六には不二は心王なり、三十二は心數なり。二十七には不二は一心の總體なり、三十二は三大の別相なり。二十八には不二は理智不二の佛部なり、三十二は真如生滅の蓮金二部なり。二十九には不二は兩部の大曼茶羅なり、三十二は真如生滅の心數の曼茶羅なり。三十には不二は能生の六大なり、三十二は生滅所生の四曼なり、三十一には不二は（三）金剛果曼茶羅なり、生滅は胎藏因曼茶羅なり、三十二には不二は横中の横なり、生滅は豎中の横なり。三十三には不二は唯是れ不二なり、生滅は唯だ生滅なり。三十四には不二は不生滅なり、生滅は不二なり。三十五には不二は生滅に非ず不二に非ず、生滅は亦是れ不二なり、亦是れ生滅なり。

問ふ、所入の法と能入の門と何の差別ありや。答ふ。多の差別あり、一には所入の十六は常に一味なり、能入の十六は常に差別なり。二には所入は第一義諦なり、能入は眞俗二諦なり、是の如くの別あり。

問ふ、前重と後重と何の差別ありや。

答ふ、多の別あり、一には前重の八法八門は甚深廣大なり。後重の門法は淺略なり。二には前重は利根の爲め、後重は鈍根の爲め。三には前重は本法なり、後重は末法なり。四には前重は能生、後重は所生なり、前門より後法生ずるが故に。五には前重の所入は本より一心三大の名言なし、後重の所入は一心三大の名あるが故に。六には前重の八法は皆是れ一心なり、後重の八法は常に四法なり、是の如くの別あり。

問ふ、前重の門と後重の法と別ありや。

答ふ、二義あり、一には同なり、前門即ち後法なるが故に、又前門より後法生ずるが故に、然れども一體同なり。二には後重の法に異なり、後重の機に對すれば第一義諦なるが故に、所入なるが故に、根本なるが故に、二門を作すが故に、二邊を離るゝが故に、前門の能入なるが故に、眞俗なるが故に、能依なるが故に、枝末なるが故に、是の如く異りあり。

問ふ、華嚴と三十二の因海と差別ありや。答ふ、同あり、異あり。同とは能説の（二）應化同なるが故に、同じく無明の分位なるが故に、同じく一心を究竟と爲すが故に、同じく緣起因分なるが故に、同じく不二不可説と稱するが故に、同じく顯教の分齊なる

（二）應化釋迦佛
は應化佛なり。

智の字一本になし。

摩訶衍云云。論一十九丁左裏。法體云云。論二の二丁右表。

が故に、異とは彼は九識を説き、此は十識を説くが故に、彼は後の住心を知らず、此は後の住心を知るが故に、彼は多一心を以て極と爲す、此は一心を以て極となす、彼は但淺略無明の分位、此は淺深明無明に通ず、彼は自位を以て極と爲す、此は自位を以て無明の分位と爲す、彼は眞理に言説等なしと談じ、此は眞理の中に言説ありと説く、彼は一理を説き、此は多の理智を説く、彼は但し如情所謂の法なり、此は眞言の淺略と成じ、彼は所攝、此は能攝なり、彼は果分を以て自救の分位と判じ、此は不二を以て尊と稱し、自位の極と判せず。
問ふ、前重の一心法界は十住心の中には何れの所攝ぞや。
答ふ、二義あり。一には第九住心の所攝なり。二には第十の住心の淺略なり。又立義分とは不二法體の上に三十二の差別の義を立つ、故に立義と云ふなり、不二は是れ能建立の法體、三十二は所建立の別義なり。文に曰く「摩訶衍の法は唯是れ一なりと雖も恒沙の法門の體性たりと。云云 又云く」法體は分れざれども義門別なることを得るが故に。云云又立義とは三十二種と不二總體の義とを立つ故に立義と云ふなり。又立義とは、一切諸經の無量無邊の差別の義を攝して三十三種を立つ、故に立義と云ふなり。

摩訶衍云云。起信論立義分の本なり。一切の諸佛云云。起信の立義の文の後文なり。

鈔主此の字の上二には三字脱するか。

「摩訶衍とは總なり」より「善因果の故に」至るまでは法門緣起の次第是れ下轉門なり。「一切の諸佛」より「如來地に到るが故に」至るまでは修行轉勝の次第是れ上轉門なり。

問ふ、三十三種の門法の緣起開立如何ぞや。

答ふ、多義あり、一には疏主の義、鈔主の義、義少し別あり、不二大乘より八法の不二、總體生ず、此の總體の上に入門に隨て八大乘を開く、此の八大乘・一心・三大の四法と成る、此の四法の上に各の二門に隨て八大乘を開くは疏の義なり。鈔の義は前門を以て後法と爲す。今大師の意趣に就ては、不二とは三十二種不二なるが故に不二と云ふ。一心・三大不二なるが故に不二と云ふ、不二の義無量無邊なり、三十三種の法、平等平等にして一なり、横豎無礙にして互に主伴となる。秘密眞言教とは是れなり。此に就て之を謂はば、或は不二法界の上に同時に流出す、皆同じく一性なり。或は不二の中より次第に緣起して乗乘差別するなり。今顯機の爲めに他受用應化佛の二身を現じ、彼の不二の上の淺略の一義の三十二門法を開説す、是を顯教と名く。今此の立義分の中に顯密の二義あり、思を留めて之を察すべし。不二と別なるが故にと

不二と別論一二十八丁左表の頌文。

(二) 根本摩訶衍云
同丁左裏。

(三) 論に曰く云
云。論一の二十九
丁右裏。

(四) 初の二門云
云。論一の二十九
丁右裏。具文は初
の二種の門に其の
重ありとあり。
(五) 皆能入云云
論一の二十九丁左
裏。
(六) 譬へば云云
論一の三十丁右表。
(七) 四種輪とは云
云。論一の三十丁右
表。具文には轉王
の其の輪相に隨て
名字を建立するが
如くと、今其の取
意なり。
(八) 八種論一三
十丁右表に開陳せ

(一) 大總持論云
表。論一三十三丁左

(二) 或は能入云
云。論一三十三丁
左裏。

(三) 何故に云云
裏。論一三十四丁右

(四) 何故に別説云
云。論一三十五丁
右表。

は、獨一無比の義なり。(二) 根本摩訶衍の中とは不二大乘なり。摩訶衍とは總なりと
は、所詮の法體に就かば但是れ不二大乘なり、能説の字相に依らば三十三種の法門な
り。説に二種ありとは三義あり、不二門と前門と後法となり。又二義あり、一には立
義分は皆是れ不二摩訶衍の説なり、二には因縁分を説て因分を建立す、不二は説かず、
不二は建立せず、此の二義に就て一一の文文料簡すべきなり。(三) 論に曰く、此の文中
三門あり等とは、一には此の三は是れ不二の三門なり、二には此の三門は因分の三門
なり、三には所入根本、總體門は不二なり、別相門は三十二種なり。(四) 初の二門に兩
重ありとは、一には前後兩重是れなり、二には總體門の因果兩重、別相門因果兩重
なり。次に(五) 皆能入に従へて其の名を建立すとは、初は緣起因分説、若し不二の第一
義諦に約せば、本有秘密號あり。(六) 譬へば轉輪聖王の如しとは不二なり。(七) 四種輪と
は二義あり、一には本有不二の一心三大に約す、諸の粟散王等是れ三十二種なり。二
には緣起に約せば前重の一心三大の法なり。八種の身法を分別開説すとは、不二の上
に於て應化身(八) 八種を開説するなり。馬鳴菩薩正しく彼の文を攝したまふとは、能説
の字相に就て之を説く。又顯教の八種の法を以て果分總體の中に歸攝するなり。此の

中の總の言とは、能説の字相門に約すれば、前後兩重を總攝するが故に、所詮の法體
門に就かば不二大乘なり。兩處とは前重後重なり。(二) 大總持論中、八十の門を開きて
廣く根本摩訶衍法を釋すとは、能依の八種の根本大乘なり。言ふ所の法とは、本有に約
せば不二大乘なり。修生に約せば後重の所入なり、三大義も亦爾なり。凡そ三十二種
の門法皆本有修生の二義あり。(三) 或は能入に従て其の名を建立すとは、二義あり、一
には所入の法に本より一心三大の名ありて或と云ふ。二には本有に約して或と云ふ。
(四) 何故に不二摩訶衍の法は因縁なきや等とは、緣起因分にあらざるが故に因縁なし、
隨他の根機なきが故に。建立する所にあらざるが故に。諸佛の所得なりやとは、眞如
門の諸佛なり。能く諸佛を得すとは、亦眞如門の佛なり、能得は不二の佛、所得は眞
如の佛なり。次に諸佛は得するや、不なるが故にとは、生滅の佛なり、生滅の佛は眞
如不二の佛を得せずといふなり、三十三種を三門といふ意なり。菩薩二乘等とは、秘
密曼荼羅の十界なり。次に八種の本法等とは初の諸佛は本の八佛、次の諸佛は末の八
佛なり、次の諸佛は不二なり、本佛は末佛の所得なり、本末の諸佛は不二を得せずと
いふなり。(五) 何故に別説門の中に一心を別して一と爲すとは、眞如門の一體を表する

云云。已は總門云
論一三十五左

なり。三大を總じて一となすとは、生滅門の多相を表するなり。(一)已に總別の二門を説くとは、二義あり、一には前後兩重の二門なり。二には總別二門とは、科門にはあらず、不二二門となす。如來地とは、不二大乘なり、五重の問答之れある義の故に。問ふ、何の義に由るが故に三十三種あることを知るべきや。答ふ、能入の別相に十六種あるが故に、所入に十六を成す、及び不二を加ふるが故に。

(二)問ふ、自下頌
文及び差別なしに
至るまで論一三十
丁左裏にあり。

(三)問ふ。三十三種法門の勝劣廣狹其の相云何ん、頌に曰く。

平等平等にして一なり、 皆別異なることなし、 各々諸法を攝するが故に、
然れども終に雜亂せず。

是の如く三十三種の法相は遍滿遍滿、平等平等、一味一相にして皆差別なしと。云云十住心論の大意に就かば四義あり。一には九種住心とは是れ秘密莊嚴住心の前方便なり。二には九種住心は是れ秘密莊嚴住心の一分の實德實號なり。三には毘盧遮那の大圓鏡の内證、萬徳の不共の法門なり。四には皆大毘盧遮那に同じきなり。又六意あり。一には豎、二には横、三には豎が中の豎、四には横が中の横、五には豎が中の横、六には横が中の豎なり。又四意あり、一には淺略、二には深秘、三には秘中の深秘、四に

(一)十六支門弘
法大師の法華經釋
三丁、異本問題下
にあり。

は秘秘中の深秘。又(二)十六支門あり、遮情表徳、淺略深秘、字相字義、一字攝多、多字攝一、一字成多、多字成一、一字破多、多字破一、一字釋多、多字釋一、順觀旋轉、逆觀旋轉、又一の言、一一の名、一一の成立、字相字義等の五十字門に各各に之を具足することあり。

國譯真言所學釋摩訶衍論指事 終

本編は釋摩訶衍論を以て釋し、
たるものなり、
教大師の撰なり、
原本に撰號なし、
雖も、便宜の爲に
之を掲げたり。

(一) 論、釋摩訶衍
論の序、本卷に掲
げたり。(二) 大師云云、二
教論上九丁取意。(三) 第
五、五重問答。(四) 第十、攝不攝
の文。(五) 大師、三學錄
の文。(六) 二教論云云、
寶鑰、二教論、秘藏、
十住心論、秘藏、皆本書
論釋部に掲載せり。
參照。(七) 密實顯權、密
教は眞實にして顯
の意。(八) 金剛頂の開
闡、及び大日經の開
闡、共に弘法大師
の撰。

國譯愚案鈔第一本

興教大師選

問ふ、釋摩訶衍論は顯密二教の中には何れぞや。

答ふ、今私に之を案するに、密と云ふべし、正しくは密藏の旨を説き、傍には顯教の義を演ぶるが故に。彼の(一)論の序に云く、釋摩訶衍論とは、斯れ乃ち性海の源を窮むる密藏、行因の本を罄の淵詞なりと云云。性海とは、(二)大師の云く、是れ眞言密教、自性法身なり。云云。又此の論の第一の卷乃至(三)第五、(四)第十等の中に、盛に顯密の淺深を説き、具さに性修の優劣を明せり。又(五)大師、殊に此の論を抽て眞言所學の論と名け、密藏所依の教と爲るが故に。又(六)二教論、寶鑰、十住心論等同じく此の論に依りて顯淺密深の旨を判じ、(七)密實顯權の理を證す。又(八)金剛頂經の開闡、大日經の開闡等亦此の論に依りて眞言の義を釋し、秘藏の門を開く。又若し唯顯ならば、云何んぞ此の論の中に、眞如、不二一心より生ずるの旨を説き、眞理、不二大乘より劣なるの義を顯はさん、乃至具には此の論の第一、第五、第十等の中の如し、故に知んぬ正しくは是れ眞

言の法門、實には密教の論藏なり。常曉和尚の請來の表の中に云く、此の論正しくは密藏を談じ、傍には顯教を括ると。云々又大師の奏狀の中に、其の旨分明なるものか。

問ふ、此の論は三十三種の大乗と顯密に分別するの方如何。
答ふ、且く三重あり、一には不二は眞言、餘は皆顯教なり、二には前重と及び不二とは密、後重十六は顯なり、三には三十三種同じく是れ密なり。

問ふ、第一重の意如何ん。
答ふ、不二大乘は(一)兩部の密藏、二界の大日なり、即ち是れ性徳圓海、(二)果分不可説の境界なるが故に、大師又之を以て眞言の人法と判じたまふ。餘の三十二は是れ修行種因海、因分可説の法門なるが故に顯といふ。又(三)隨機の教は隨他意の故に。又是れ所攝所得にして能得能攝にあらざるが故に。又淺劣なるが故に。又緣起なるが故に。

又云
問ふ、第二重の意如何。

答ふ、不二は上の如し、前重に二あり、一には唯法を取るが故に、二には(四)兼て門を取るが故に。初めに法に約すとは、謂く此の八法は直に不二大乘根本總體の上に於て

(一) 兩部の密藏、金剛界胎藏界の所攝なり、又次は金胎兩部の大日なり。
(二) 果分不可説、不二大乘の果位の分は言説を以て顯示す可からざるが故に、因分可説に對す。
(三) 隨機、衆生の機に隨つて説く故に、之れ他意に隨ふ爲めなり。
(四) 兼て門を取る、次の四四四頁六行にあり。

(一) 四佛四波阿闍、寶生、彌陀、釋迦の四佛、金、波羅蜜なり。
(二) 四度、四波羅蜜菩薩なり。

(三) 八葉の八尊、胎藏界中臺大日、圍繞する八尊、王、無量壽、開敷華、雷音の四佛と、普賢、文殊、觀音、彌勒の四菩薩となし、八尊といふ。
(四) 九識、眞言所立の九識に相違あり。

(五) 法界體性智、顯教は八識を轉じて唯四智即ち大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四智のみを得るも、眞言密教は更に法界體性智を建立す、總體智なり。

開示する所なるが故に、若し金剛界に約せば不二は佛部の大日なり、獨一無比不二平等の法身なるが故に。八法とは(一)四佛四波の八尊なり、眞門の四法は即ち四佛なり、俗門の四法は是れ(二)四度なり、佛陀は果なり、理なり、菩薩は因なり、智なり、故に且らく爾かいふなり。或は又云、若し胎藏界に約せば、不二は是れ中臺大日なり、八法は内證の八印、即ち(三)八葉の八尊なり、謂く四智、四行、次の如く眞俗に配知せよ、是れ又眞言本有の(四)九識なり、顯教の九識に相濫すべからず、何を以ての故に、此は能く無量の識を攝す、彼は未だ無數の心を知らざるが故に、又此は本有性徳淨妙法身の九識なり、彼は緣起無常戲論妄染の九識なるが故に。問ふ、縦ひ彼れ難じて云く、顯家の九識に二義あり、謂く八識は是れ四智の所斷なるが故に、且く妄染等と云ふべし、第九識は是れ眞如の理なり、何が故ぞ妄染戲論無常等と云ふや。又八識に於て染淨の二義あり、若し因位の八識に於ては、且く爾か云ふ可し。若し淨位の八識ならば、何んぞ妄染戲論等と言んや。

答ふ、先づ初の疑を破して云く、汝が宗の一眞如、第九識とは我が宗の(五)法界體性智の所斷なり、或は不二摩訶衍より緣起する所なるが故に、汝が眞識は眞にあらず、如

にあらず、又本有にあらず、又清淨にあらずと云ふ、後の難を破して、汝が教の淨位の八識、佛地の四智とは、我宗の一心の所破、四智の所斷なり、皆是れ無明の分位、妄染の邊域なり、是の故に當に知るべし、顯宗の佛果は淨位にあらず、果地にあらず、眞智にあらず、實佛にあらざることを、或は復た不二は是れ兩界の大日、八法は是れ兩界の四佛なり、俗門の四法は胎の四佛に配し、眞門の四法は金の四佛に當つ、或は金は俗智なるが故に、胎は眞理なるが故に。次に門を兼ぬとは、此に亦二あり、一には門は胎、法は金なり、此は因果の淺深に約す、二には門は金、法は胎なり、此は理智の能所に約す。

問ふ、第三重の意如何。

答ふ、三十二種は又是れ不二一心共體の徳、大日遍照普門の身なり、或は直に是れ共體なり、正しく是れ一法なるが故に。

問ふ、三十二は是れ不二所生の枝末、一心所起の分流なり、何ぞ不二の共體大日の一身と云ふや。

答ふ、能所本末は是れ豎門暫爾の説、分滿源流は又教道一往の談なり、理實には則ち

(一) 文に曰く、
(二) 提心論なり。
(三) 又云く、
聖位
經なり。

(一) 金勝云云、
(二) 剛界は果に由るが
故に勝れ、胎は因
に申るが故に劣な
り。
(三) 秘藏記 上卷
十二丁。阿字 五字な
り。
(四) 鑊字 七字な
り。

能所不二なり、横に觀すれば則ち因果即一なり。故に(一)文に曰く、諸尊皆大毘盧遮那の身に同なりと。(二)又曰く、自性及び受用・變化、并びに等流、佛徳三十六、皆自性身に同なりと。云云 又曰く、横に觀すれば則ち智智平等にして一味なりと。云云 此の如くの文證其の數甚だ多し、若し所生所起に依るが故に不二の共體等にあらずと云はば、三十六尊等は是れ大日の所生所起なり、何んぞ大日の共體法佛の一身なりと云はんや。乃至云云

問ふ、若し爾らば、不二及び兩重の法を以て兩界の法門に配するの方如何ん。

答ふ、略して六義あり、一には不二は兩界の大日なり、前重の八法は金剛の四佛四波なり、後重の八法は胎藏の八葉の八尊なり、眞門の法は如来なり、俗門の法は菩薩なり。此は且く(一)金勝 故に胎劣 故に(二)の一往の義に依りて此の配屬を作すなり。理實に依らば則ち兩界不二平等にして即ち一なり、已に優劣なしと説く、何んぞ淺深ありと言はん。二には不二は兩界の大日なり、前重の八法は胎藏の八尊なり、後重の八法は金剛の八尊なり、所以者何んとなれば、今亦且く一往の義に依るが故に。謂く(三)秘藏記に云く、(四)阿字は大日理法身の種子、(五)鑊字は智法身の種子なり、理智相離れず、理、智用を起し、智、大

悲を起す、大悲をば水に喩ふ、鑊字は水輪の種子なり、仍て智法身の種子となすと。文今此の文に依らば、理界の大日は能生の體なり、智界の遍照は所生の用なり、用は體より生じ、體は能く用を起す、智は理より起り、理能く智を生ずるが故に、是の故に能生總體の前重の法を以て胎藏と爲す、所生別相の後重の法を以て金剛に配するなり。今相とは用の義なり、相性と云ふ、相の時には相を以て用を攝するが故に。

問ふ、何を以てか金剛界は是れ智、胎藏界は是れ理なりと知ることを得るや。

答ふ、(一)秘藏記等の中に分別に説くが故に、又胎の大日の(二)定印に住するは、是れ圓寂を表するなり、金の(三)大日の(四)智拳を結ぶは即ち大智を顯すなり。又云云又胎藏の名は已に是れ理の攝持不失等の義なり、金剛の稱は亦是れ智の能破・能勝等の義なり。又胎は蓮花を宗となし、理の清淨攝持不亂等の義を表するが故に、金は月輪を宗と爲し、智の能照破暗明了等の義を表するが故に。乃至云云

問ふ、(五)秘藏記の中に胎金の(六)大日の理智法身の體用能所の義を説くと雖も、未だ兩部の四佛二界の菩薩の體用能所の義を見ず、何んぞ法身體用の文を以て應等の能所の義を證するや。

(一)秘藏記 上卷
六丁、文に云く、胎藏は理なり、金剛に智なりと。
(二)定印 胎界大日如來の印契たる法界定印なり。
(三)智拳 智拳印なり。本書事相部を參照。

(四)秘藏記 第廿五章。

答ふ、四佛、四菩薩は皆是れ大日の共體、遍照の種智、法佛の滿德、性身の一理なるが故に、況んや復た心王已に體用と爲る、心數盡んぞ能所と作らざらん、伴は必ず主に隨ひ、臣は定んで王に順するが故に、又云云

問ふ、若し秘藏記に依りて體用能所の義を云はば、胎は勝、金は劣なりや。

答ふ、二意あるべし、謂く圓融一往の義に依らば爾か云ふべし、兩部互に主伴となるが故に、若し深秘理實の意に依らば爾るべからず、二界等して優劣なきが故に、體用等の義に依るが故に且く胎勝といふ、因果等の義に依るが、且く金優といふ、理智不二、因果即一等の故に無優劣といふ。

問ふ、深秘の意如何。

答ふ、(一)秘藏記の中に優劣なしと云ふが故に、若し相離と言はば二法あるべし、所以に優劣を論ずべし、既に(二)不相離と云ふ、應に知るべし一法なり、何に因てか淺深を分たん。不相離とは不二即一の義、平等無別の意なるが故に。

問ふ、若し爾らば兩重に配すること旁々以て不可なり、(三)三失あるが故に。所謂る所配の兩部は平等に就て説き、能屬の兩重は淺深に依りて立す、豈に淺深差異の法を以て理智平等の佛に類せんや。又何んぞ後重淺略の大乘を以て本初金剛の深智に配せん

(一)秘藏記 上卷
六丁。
(二)不相離 本卷四四五頁十三行秘藏記に云くの文なり。
(三)三失 三失の中、恐は第三の失を脱するなり。

や。

答ふ、誰れか自宗の意は、兩重は偏へに深淺に依ると言ふや、一往の義には兩部互に主伴と爲ると謂はざるや、主伴の故に二界淺深の旨を壞せず、深秘の故に兩重平等の義を立ることあり、是の故に第一と第三との失なし、第二に後重の法を以て本初の智に配する失とは、後重に又本初の義あり、三十三種は皆是れ本有性徳元初の法門なるが故に、金剛に又後重の意あり、兩部の次第を云ふに、多く胎は前、金は後、理は始、智は終と言ふが故に、是れ又因果の前後に約し、(三)灌頂の次第に就くなり、故に三の失なきなり。

(二)灌頂 事相部を參照。

問ふ、當論の意を案するに三十三の中に不二一心獨り性徳の名を受け、別して本初の理を得、餘の三十二は未だ此の如くの稱を樹てず、總じて行因の法と名く、何んぞ皆本初性徳を具すと云ふや。

答ふ、汝が難する所は我が所立の三重の義の中の第一重の意なり。今此に説く所は第三重の意なり、何んぞ第一重の豎の義を以て第三重の横の理を難することを得ん、横豎門を分ち、寛狹途を異にせり、妄りに異門を以て異門を難することなかれ。又云云

問ふ、若し爾らば此の重の意何んが論文を會するや。

答ふ、此の重の第二の問答の中に決斷するが如し。一には前重の中に於て真門の一心三大は金の四佛なり、俗門の一法三義は胎の四佛なり、後重の中に於て真門の四法を金の四波に配し、俗門の四法を胎の四行に屬す、此れ亦且く金果胎因の淺深の義に約す、前勝後劣の次第なり。四には前重の俗門の四法を金剛の四佛と爲す。生滅門とは智なるが故に、金に配す。真門の四法を胎藏の四佛と爲す。胎は理なり、眞如門又理なるが故に、後重の眞如門の四法を胎藏の四行の菩薩となす。上に準生滅門の四法を金剛の四波羅蜜と爲す。上に準五には兩重の十六の摩訶衍とは(二)内證十六の摩訶衍なり。六には十七の法とは十七尊なり、此に二あり、一には常の如し、金剛薩埵の十七尊なり、二には大日に就て私かに之を作る、其の名下の如し。問ふ、何が故ぞ上來には唯法に配して門を取らざるや。

(二)内證十六 金剛界十六大菩薩なり事相部を參照。

答ふ、且く二意を顯さんと欲ふが故に、一には法の外に門なし、門は法を離れず、法門不二にして能所即一なるが故に、故に論に云く、平等平等にして一なり、皆別異なることなしと、二には淺假を攝して深實に歸するが故に、意の云く、門とは能入の門、法とは所詣の岸なり、住宮の位は門戸既に捨つ、登岸の後船筏何の用ぞ、又門とは

(一) 四法 一心三
體と相と用の三大
なり。
(二) 第八識 第八
識阿頼耶識は大圓
鏡智なる故なり。
(三) 七識所依 第七
識阿頼耶識は前七
轉識の所依となり
從て萬法の根本所
依となるなり。

(四) 經に云く 理
趣經なり。
(五) 經 理趣經な
り。
(六) 論 起信論立
義分。
(七) 又云く 論一
二十九丁右表 根
本摩訶衍の中に八
の差別を設く、其
の第三門なり。
(八) 寂靜無雜 同
第四門なり。以上
第三第四門は即ち
體大なり。
(九) 大日云云 第
二廿四丁。
(一〇) 秘藏記 本の
四丁。

各々四法を具するが故に十六大乘と成るなり。

問ふ、凡そ(一)四法を以て四智に配する意如何ん。答ふ、一心法界は大圓鏡智の異名なるが故に。意の云く、此の智は是れ(二)第八識なり、即ち(三)七識所依の體、萬法所歸の源と爲る、一切の諸法、十界の衆生、皆悉く此の一心を以て體となし、依となし、本となし、主とするが故に。又云く心王心主等と、云云故に論の第一に云く。云云第二に云く。云云秘藏記に云く。云云又云云次に體大を平等性智と名くることは、略して二義あり、總別是れなり。總とは此の智を又は義平等と云ふが故に。(四)經に云く、義平等の現等覺は、大菩提一義利なるを以ての故にと。又は義利施と名く故に(五)經に云く。云云又は義利性等と名く、皆是れ三大義の意なるが故に。別とは(六)論に云く、一には體大、謂く一切の法は眞如平等にして増減せざるが故にと。文(七)又云く、無量無邊諸法差別、不増不減體大摩訶衍、(八)寂靜無雜一味平等、不増不減體大摩訶衍と。文(九)大日經開題に云く、體大とは若は相、若は用、眞性と與に而も常遍廣博なること猶し虚空の如くなるが故にと。文是の如く等の文は並びに皆平等性智の義を明す、故に論に云く、一には乃至。二には一味一相智、恒沙の一切の諸法は差別なしと通達するが故に。(一〇)秘藏

(一) 又云く 此の
F云云の二字脱す
るか。
(二) 論 起信論立
義分。
(三) 又云く 論一
三十丁所引の大覺
經。如來云云 八
種の身法の中の第
五。

(五) 論 起信論立
義分。如來藏 如來
性を藏するをい
ふ、即ち佛性をい
ふ、在纏如來藏は
凡夫に付け、出纏
如來藏は佛に云
ふ。

(七) 論 論一十四
丁右表。

記に云く、性淨の智水は情非常を簡ばざるが故に、彼此同如の故に、常住不變の故に、名けて平等性智と曰ふと。文(一)又云く。次に相大を妙觀察智に配することは、(二)論に云く、二には相大、謂く如來藏に無量の性功德を具足するが故に。又云く。云云又云く(三)如來藏功德顯了、大趣入身法圓滿性、功德顯了大趣入身法と。大日經開題に云く、相大とは恒沙の身密不可思議にして互相ひに即入し、微細重重無盡なるが故に、此くの如く等の文は並びに皆妙觀察智の義を明す。

問ふ、此の文を以て彼の智に配する方如何ん。答ふ(四)論に(五)如來藏とは、此の智は亦無量壽如來の法藏と爲ることを表するか。或は云云。論に具足とは、此れ此の智は五眼を具足し種智を圓滿することを明す。又成菩提證菩提等の果徳圓滿等の義歟。論に無量とは此の智を亦是は無量壽無量光等と名くることを表す。又妙の義を明すか。妙とは難思難測等の義の故に、開題に不可思議とは正しく是れ此の義なり、即ち是れ妙觀察智の妙なり。又無邊の義か、無邊光と名くるが故に、無邊智と稱するが故に。故に(六)論に云く、三には大悲無邊智と、云云開題に、無盡とは又此の義なり。論に性功德とは此の智の證の義を表す、謂く性徳とは性海果徳等の義なり、上の具足の言に並すれば、性

(一) 文に云く 秘藏記上五丁。

(二) 文に云く 大日經開題二。

(三) 文に云く 秘藏記上六丁表。

(四) 論 論一三四

(五) 經 大覺經。
(六) 文に 秘藏記
(七) 經 大覺經な
(八) 論 起信論の
立義分なり。

徳圓滿海の義か、但し不二性海と或は同、或は異なり成菩提・證菩提の義か。具足とは、又成就の義歟、復次に性功德とは、且く分て二と爲す、一には性、二には功德なり、初の性に略して二義あり、一には法然本有、ハハホシホシ常住不變、不改不壞等の義なり。故に(一)文に云く、法然不壞の故に、名けて性と爲すと。又云く、常住不變の故にと、又云く。云云即ち皆是の智の義なり、故に、(二)文に云く、無量壽妙觀察智の異名とは、法身常住不壞の徳是なりと。云云一は性別の義なり。本論に無量とは亦是れ此の義なり。開題の恒沙無盡等の文亦た爾なり、即ち此の智は五眼種智悉く皆具足せるが故に性相を分別し邪正を決斷して不亂不謬なることを表するなり。(三)文に云く 五眼高く臨んで邪正謬らすと。又云く、其の水中に一切の色相シキサウの差別明了に現見するを妙觀察智に譬ふと。文故に又智慧門と名く、智とは簡擇決斷、分別辨智等の義の故に。次に功德とは萬行已に備り、萬徳本より圓なり、即ち此の智の證果等の義を表す、前に已に釋するが如し、又(四)論に引く所の(五)經に顯了とは相名の義を明すか。又顯了とは此の智の明了不謬・審諦・觀察等を表する歟。故に(六)文に云く、邪正謬らすと。云云又云く、色相の差別明了に現見すと。云云又(七)經に圓滿とは即ち(八)論の具足の言なり、具足の義は略して前の如し。

(一) 論 論一十四
(二) 開題 第二四丁。

(三) 論 起信論立義分。

(四) 經 大覺經。
(五) 出生云云八種の身法中の第七。次の出生云云は身法中の第八なり。

(六) 開題 大日經開題第二四丁。
(七) 文に云く 秘藏記本六丁。

(八) 羯磨 恐らくは羯磨智なるべし

(九) 瑜祇經 序品なり。

或は又此の智の普周遍滿の義を表するか。故に(一)論に云く、隨て一化を起すに一切十方世界に遍滿するが故に。大日經の(二)開題に云く、身虚空法界に遍し、心性相理事に亘る、此の身此の心、何れの處にか有らざらん、誰れの生、誰れの物か、逃出して攝せざらんと。云云次に用大を成所作智に配することは、(三)論に云く、三には用大、謂く能く一切世間と、出世間善因果を生ずるが故にと、又云く。云云(四)經に云く、(五)出生世間因果自在、無礙大趣入身法、出生出世間妙因果、自在無礙大趣入身法略(六)開題に云く、用大とは業用周普せること體の遍するが如くなるが故に、無間不斷に方便を行するが故に、所謂る神變加持とは是れ皆成事智の義なり、故に(七)文に云く、二利應作の故に所作と曰ふ、妙業必ず遂ぐれば成の稱なりと。又云く一切の情非情の類は水に依て滋長することを得るを成所作智に喩ふと。凡そ要を擧げて之を言はし、業用作用等を成所作智と名くるが故に、亦是(八)羯磨と名く、羯磨は業なり、業用作用事業威儀等の義なるが故に、謂く三業の妙用を起し、四印の神變を揮て群類を化導し、萬物を生育するが故なり。云云

問ふ、何が故に大日に十六大菩薩を加へて私に十七尊と爲るや。答ふ、(九)瑜祇經を案

(一) 金剛頂經 金剛超勝三界經三丁

(二) 經 金剛智譯の三摩地儀軌十六丁。次に正覺云云。前文に引ける超勝三界經の大なり。經 三摩地軌(三) 經 第三の意は金薩を除きて大日を加へ十六生といふ。第四の義は因果の義に於て因果の二義を具すか。十六の隨一なるが故に因なり。諸徳圓滿なる故に果なり。十六生を以て義を成すべきか。

するに、大日の一字心密等を説く中に云く、持明阿闍梨、十六の義を思惟して、一字心密を誦すれば、三十七圓滿すと。文 具には經文を見るべし 又此の宗の意は、但信受するものは現生の中に於て十六大菩薩の生を經歷して、次に大日と成る、故に(一)金剛頂經に云く、若し但し信受すれば十六生を経て次に正覺を成すと。文

問ふ、何が故に次と云ふや。答ふ、此に多義あり、且く一義に云く、前の十六菩薩とは四智なり、次に成正覺とは、次に法界體性智の大日と成る。

問ふ、若し爾らば、何が故に(二)經に後十六生成正覺と云ふや。答ふ、且く四の意あり、一には第十六の金剛拳の生に已に四智具足するが故に、自らはれ佛なるが故に。二には此の正覺とは修成の佛か、彼の(三)次に正覺を成すとは性徳の佛と成るか。三には(四)經に云く、現世に歡喜地を證得し、後の十六生に正覺を成すと。文 歡喜地とは金剛薩埵の位なり、後十六生とは法界智の生を成するか、若し爾らずんば、何んぞ後十五生と云はざるや、若し後とは金剛拳の位を指すと言はば、何が故に第十六生成正覺と言はざるや。四には、彼の極無自性心の中に普賢に歸して證果すと云ふが如し。已上の四義又た未だ之を案じ定めず。

問ふ、既に初の意を聞きつ、第二の意は三十三の本法を以て何等の法に配するや。答ふ、此に亦多意あり、或は三十七尊に配す、中に於て又三あり。

(一) 四波羅蜜菩薩なり。
(二) 四攝 金剛鉤、金剛索、金剛鏡、金剛鈴の四菩薩。

問ふ、初の意如何ん。答ふ、不二は大日なり、前重の八法は四佛、(一)四波羅蜜の八門、及び後重の八法は十六大菩薩なり、後重の八門は八供養なり、(二)四攝は或は不二に攝し、或は四智に攝す。

問ふ、何が故に不二に攝するや。答ふ、四攝とは直に大日より生ずるが故に不二に配するなり。

問ふ、何が故に四智に配するや。答ふ、四攝とは四智の別稱、四智の異義なるが故に。問ふ、何が故に此の論四攝を略して別に之を開かざるや。答ふ、其の故上に準ず、或は復た因論なるが故に、不二の四義を分別せざるか、或は四攝は能護、餘尊は所護なるか。今且らく所を擧げて能を攝するか、故に文に云く、菩提心の戸を守る金剛鉤乃至。云云 或は復。云云

問ふ、次の意如何。答ふ、不二は前の如し、四佛・四攝は前重の八法なり、十六菩薩は前重の八門、及び後重の八法なり、八供養は後重の八門なり、四波羅蜜は或は不二に

攝し、或は四佛に攝す。
問ふ、何が故に不二に攝して別に之を開かざるや。答ふ、四波は大日の四親近なるが故に。

問ふ、何が故に此の論に之を略するや。答ふ、或は因論なるが故に。或は云云

問ふ、何が故に四佛に攝するや。答ふ、四佛・四波は同じく是れ大日の四智、遍照の四德なり。故に印契、種子同一にして異なることなし、自門の主爲るが故に、四佛の名を得、大日の伴たるが故に菩薩の稱を得、因果異なりと雖も法體惟一なり。或は内眷屬の故に四波なり、大眷屬の故に四佛なり、遠近殊なりと雖も人體不二なり、或は復た定妃の義に依て四波と名け、慧男の義に就て四佛と名く、權相二に似たれども實體即ち一なり、或は復た内證外用の異、自利他化の別なり、皆是れ一法の二義、同體の異用なり、或は復云云

問ふ、何が故に此の論の意不二の四法を開かざるや。答ふ、或は因論なるが故に、或は云云

問ふ、後の意如何。答ふ、不二は前の如し、四佛・四波は是れ前重の八法、十六菩薩は

(一) 定妃 四波羅蜜菩薩は大日如來の前後左右の侍者四親近の女の菩薩又三際一切諸聖賢の生成養育の母なり故に妃と對して定といふに

(二) 四供養 金剛燒香、金剛華、金剛燈明、金剛塗香の四尊なり。金剛嬉戯、金剛舞、金剛歌、金剛舞の四尊を内の四供養といふ。
(三) 文に云く。論の一三十四丁。
(四) 大師 二教論なり。

即ち前重の八門、及び後重の八法、内の(一)四供養、四攝とは後重の八門なり、外の四供養は或は四智に攝す。或は云云

問ふ、何が故に此の論の意は不二摩訶衍に別に門を立てざるや。答ふ、三の意あり、一には且く因論なるが故に不二門を立てざるなり、故に(三)文に云く、機根を離れたるが故に、教説を離れたるが故に、乃至云云又(四)大師の言く、並びに因位に約して談す、果人を謂ふにはあらず。又若し眞言果海の教に依らば、又不二門を立つべし。二には或は前重の八法を以て不二門となし、或は三十二を以て門とするが故に。三には既に不二門と言ふ何んぞ門法を分たん、亦た一心と目く豈に能生を異せんや。

問ふ、何なるを不二門と云ふ耶。答ふ、此に多の意あり、若し教に約せば兩部の教門を不二門と名く、金剛頂經等の開題に此の意あるが故に、若し智に約せば或は四智を以て門となす、法界智を以て不二法とするが故に、或は直に法界を門となす、下皆之に準せよ。若し佛に約せば、四佛は是れ門なり、大日を不二とするが故に、若し法に約せば四曼を門となし、六大を不二大日とするが故に、若し法に約せば(四)四曼を門となし、六大を不二大日とするが故に、若し部に約せば(五)金・寶・蓮・羯の四部、之を以

(四) 四曼 大、三、羅、羯の四種曼荼羅なり。
(五) 金寶蓮 金剛部、寶部、蓮華部、羯摩部をいふ。

が故に。後の別門の中に又二つあり、一には總。二には別。總とは不二佛部なり、別とは金等の四部なるが故に。若し(三)論に就て云はゞ、法義二法にして、未だ四法と八法とを開かざるの時なり。

問ふ、已に不二の二門を聞つ、請ふ不二の三門を説け。答ふ、或は三密を以て不二門とするが故に、又三部、三寶、三點、三身等皆是れ不二の門なり。又論に約するに三門あり、一には不二の不二門、二には不二の一心門、三には不二の三大門なり、初の^一は真俗不二の總に約し、出世即一の本に就く、次の一心は俗に異ならざるの眞なり、後の三大は眞に異ならざるの俗なり。初の不二不二門に更に體相用の三あるべし、微細甚深にして言慮の境を離れたり但し證文に依て之を立つ、次の一心法界門に更に體相用の三あるべし、論に之を言はずと雖も、宗の意を以て之を案するに、理必ず有るべきが故に、又不二既に之を立つ、一心豈に之を存せざらんや、後の不二三大門開きて三と爲す、三大とは體大、相大、用大なるが故に。

問ふ、不二摩訶衍真言宗の中に更に體相用を立つる其の説文如何。答ふ、大師の即身成佛等の中に此の義を説くが故に。

(三) 字印形 種子と印契と形像にして、一尊上の標示なり。

(三) 三密云云 本書論釋部にあり參照。

(三) 答ふ 此の下豈の字を脱するが

問ふ、其の證如何。答ふ、略して之を言はゞ、六大は體、四曼は相、三密は用なり、又大日經の(三)開題に大日の大の言を釋するの中に云く、體大、相大、用大と。云云
問ふ、不二の不二、不二の一心、不二の三大の三門を以て各々三部に配するや。三密三身等も亦爾なり。答ふ、爾か配すべし。

問ふ、其の方向。答ふ、佛・蓮・金・に次の如く之を配せよ、身語心も亦復此の如し、(三)字・印・形・の三身、法・應・化・の三身茲に如なり。

問ふ、不二の不二門の中の體相用の三大を以て何等の法に配するや。答ふ、三密に配すべし、三身等も亦爾なり。

問ふ、其の相如何。答ふ、次の如く之を配せよ。

問ふ、即身義の中に(三)三密加持速疾顯の句を以て用とするの意如何。答ふ、今之を案するに略して二の故あり。一には三密とは又は三業と名く、業は即ち用の義なるが故に、謂く業とは作業、事業、作用、業用等の義、皆是れ用大の義なるが故に、且く用に配するか。二には加持速疾顯の句に就て且く用の義とするか。

問ふ、若し爾らば三密を以て唯用大と名けて體相と名くべからず。答ふ、其れ爾ら

んや、謂く三密に各々三大を具す、或は身語心次の如く體相用なるか。

問ふ、若し爾らば何ぞ、彼の文中に唯用に配するか、答ふ、三密に無量の名義ある中に且く三業用の一義を以て用大に配し、又加持速疾顯の句に依るが故に、且く用と名くるなり。爾か云ふて體相二大に名けずと言ふにはあらざるなり。爾る所以は、夫れ三密とは豈には三大三自を超え、普く萬法の總攝となり、應に知るべし性相の能攝、體用の所歸、只是れ三密の一法なるのみ、或は後云

問ふ、六大・四曼・俱に體・相・用を具するや。答ふ、具すべし。

問ふ、若し爾らば六大・四曼を三密に相配す可きや。答ふ、爾なり。

問ふ、先づ六大を以て三密に配する方如何。答ふ、(一)御作に依らば地・水・火・は身、風・空は語、識は意なり。

問ふ、四曼を以て三密に配する方如何。答ふ、二の意あるべし、一には通。二には別なり。初門の中に又二つあり。一には或は大・三をば身密に攝し、法をば語密に配し、羯をば意密となす。此の意の云く、大は顯色、三は形色なり、顯形の二色は皆是れ身の攝なるが故に、又三は印なり、是れ即身なるが故に、故に文に云く、一切の色を身

(一)御作 異本即身義一五丁表

に攝す、身は即ち印契なり、色を見るなりと。文次に法曼を以て語密に配することは釋を待たずして知んぬ可し、若し猶ほ重ねて説かば、法は法門、文字、教法、種子なり、皆是れ語なるが故に、故に(二)大師は法部を以て語密に配するなり。次に羯磨を以て意密に配することは、謂く羯磨の業用等の義とは即ち意業智用等の義なるが故に。二には一一の曼茶羅各各三秘密なるが故に、謂く且く大曼の三とは大曼茶羅身を又は形像と名け、又は大智印等と名く、皆是れ身密の義なり。此の大曼茶羅身の諸佛に、各各に眞言智慧等あり、即ち是れ語密の二密なり、諸佛とは五佛是れなり。若し佛部に依らば(三)等を語密となす、法界體性智を意密と名く、餘は皆之に準知せよ、或は復、大曼茶羅とは大日及び阿闍アシュクなり。今且く阿闍に約せば阿闍の相好具足の身、衆色綵繪の形、之を身密と名く、意の云く、眼相は青蓮華アウレンダの如く、身色は紺瑠璃に超えたり、定の拳を膝の上に置き、慧の手を觸地に作る、此の如く等の色相之を身密と名くるなり。或は此の金剛部に亦餘の三曼茶羅身を具すること常の如し、(四)等の眞言は是れ其の語密なり。大圓鏡智淨菩提心等は是れ其意密なり、乃至羯磨曼茶羅に三密を具すとは是れに又二あり。一には且く成所作智不空成就羯磨部に配す、若し此に依らば、此の尊は施無

〇〇等の字 恐くは刺字か。

畏等の印を結び、相好威儀具足圓滿の形、之を身密と名く、咒等の眞言〇〇等之を語密と名く、成所作智等之を意密と名くるなり。或は又此の部に餘の三曼茶羅身を具す、謂く羯磨杵等、咒字等、衆綵莊嚴の身等、是皆身密なり、語密は上の如し。二には五佛に皆各羯磨曼茶羅を具す、上に準じて之を知れ、謂く羯磨は諸尊所有の一一の事業威儀等是れなり、又は羯磨智印等と名く、之を身と名く、此の如く羯磨の諸尊に各眞言心智等を具する、之を語意と名く。次に別門を明さば、謂く四種曼茶羅共には是れ身密なり、四種曼茶羅身とは是れなり、又は四種智印と云ひ、或は四種法身と名け、及び三種秘密身と稱する等皆是れ此の義なり、但し此の身とは心口に異ならざるの身、語意を具するの體なり。又是れ三密の總稱、萬法の都名なり。

〇〇論 起信論立義分。

問ふ、既に不二の三門を開きつ、不二の四門如何。答ふ、此に多の意あり、或は一〇・三大を四門となすべし、或は四曼、四印、四智、四德、四佛、四身、四量、四攝、乃至無盡なり。問ふ、一心・三大を以て四門とする意如何。答ふ、〇〇論に云く、一には法、二には義と、義の中に三あるが故に四種と成るなり。問ふ、法に二を開き、義に六を分つが故に八門なり、而るを何ぞ四と云ふや。答ふ、

八は開説に就き、四は合の意に依る、謂く四が上に八を開くが故に、八は淺、四は深なり。

問ふ、若し八門の外に別に四法を立てば、既に是れ三十七の大乗なり、豈に〇〇三十三種の文に違背するにあらざらんや。答ふ、今此の論の中には且く不二を秘して、極妙甚深の名を稱揚すと雖も、未だ内證秘密の實を顯説せず、故に暫く不二の四門を略するか。

問ふ、若し爾らば根本總體の中に又四あるべし、何を以ての故なれば、〇〇論に云く、能入の別相に八種あるが故に、所入の總體にも八あること應に知るべし、之に準じて之を思へ。能入の別相既に四種あり、所入の總體豈に四法なからんや。〇〇答ふ。

〇〇三十三種云云論一廿八丁右表の頌文。

〇〇論 論一三十丁裏。

〇〇答ふの下古本亦文を開けり。

國譯愚案鈔第一本終

國譯愚案鈔第一末

興教大師撰

前後兩重は金胎兩部なり、前重の八法は金剛界の四佛・四波なり、後重の八法は胎藏界の四智・四行なり。真如門の四法は四佛なり、生滅門の四法は四菩薩なり。各々次の如く之を配せよ、不二は大日なり、是れ兩重所入の法、二界所歸の體なり、謂く前重の法より趣入する所の不二を金剛界の大日と名け、後重の法より趣入する所の不二を胎藏の大日と爲す、謂く不二心の法、門に従て體を分ち、獨一の性佛、界に依りて名を異にするなり。一^{是れ}或は前重の八法は兩界の四佛なり、謂く真如門の四法は金剛の四佛、生滅門の四法は胎藏の四佛なり、不二は前の如し、後重の八法に二義あり。一には兩界の四波四行なり、前後次の如く金胎に配するなり、前重の八法は直に不二より開く所の法なるが故に如來と爲る歟。後重の八法は是れ前重より生ずる所の法なるが故に菩薩と爲る歟。二には外用の故に、顯教の故に且く配す可からず、淺略の故なり。是れ或は前重の八法は金剛の四佛、内の四供養なり、後重の八法は四攝、外の四供養なり。

(一)四佛 四波は四佛に同するなり

り、不二は前の如く知んぬ可し、十七大乘を以て十七の尊とするなり。又理趣會の十七尊に配すべきなり、或は復四佛・四攝を以て前重の八法となす、内外の八法を以て後重の八法と爲す可き歟。^{是れ}或は三十七尊を以て三十三に配すべし。但し此に三様あり、一には内の四供を略すべし、二には四波を略すべきか、不二に攝するが故に、或は(二)四佛に同するが故に、三には四攝を略すべきか、能守護の尊なるが故に、今は且く所守護等の三十三尊を取るが故に。

問ふ、何が故に外の四供養を守護するか、答ふ、大日を守るが故に、定んで其の供物を守らざらんや、又四佛を守るが故に、其の儲くる故の供を守るべし。

問ふ、何が故に内の四供を守るや、答ふ、上に準じて之を知れ、謂く四佛を守るが故に其の供物を守るべし。大日を守るが故に其の儲くる所を守るべし。

問ふ、何が故に眷屬等を守るや、答ふ、或は其の主を守るが故に、譬へば世人の主人を守るが故に、能く其の眷屬及び庫藏珍寶等を守るが如し、十六大菩薩を以て前重の八門と後重の八法とに配す可きか。不二は前の如し、餘は宜に隨ふ。

國譯愚案鈔第一末終

(一) 勤劣云云、
 樂業を勝といふ、
 不約して
 云ふ。信心に約して
 (二) 四心理觀の善
 薩五十二位階級の善
 中初この十位に付
 念心、此の信心に付
 念心、此の信心に付
 (三) 論第十の七
 丁の左表。第十の七
 述の如し。下品前
 (四) 十信以前は三實を
 信する能はず、故
 に邪定聚といふ。故
 或は進み或は退て
 決定せざるが故に
 得ざるなり。
 (五) 心外差別云
 云。一法界の理に
 達せざるが故に妄
 想分別を起すに
 (七) 平等云云。勝
 力の菩薩は一切善
 同の眞如、同一法
 身と觀見するに
 法

國譯釋摩訶衍論廣短冊

(一) 勤劣向不勝退門

金剛佛子順繼の撰

初問

(二) 四心理觀

(三) 論に云く、若し彼の佛の眞如法身を觀して。文意如何ん。

答ふ、自の所説を賛せんが爲め、經文を引く中に、彼の佛の眞如法身を觀すと云ふ、此の文の意なり。

問ふ、爾らば今此の觀門は(四) 心下品の人の所修なりと云ふ可しや。

答ふ、此の事を云ふに學者の意不同にして一定し難しと雖も、且く一意を存するは四心下品の觀門と云ふ可きなり。

問ふ、答へ申すに就き明かならず、凡そ無相の理觀は是れ深位の所修利根の觀門なり。

而るに(五) 十信は是れ未得不退の淺位、(六) 心外差別の智品なり、寧ろ四心下品の人は眞如法身の觀に凝らんや。之に依つて第五卷の論釋には(七) 平等見諸佛の文を以て發心已

や、既に教門に依り自ら理觀を許さば、何ぞ枉げて往生の業因を妨ぐ可きや。但し住正定聚の文に至りては、二の意を存じ申すべし。一には西方處不退の土を指して正定聚と云ふ。故に元曉法師今の文を釋して云く、九品往生は皆正定と名くと判じ、雙觀經には其れ衆生ありて彼の國に生ずるものは皆悉く正定の聚に住すと宣べたり。一には云く、四心下品の人、終に初住正定に至るべきが故に余かいはなり。是を以て通法大師第一卷の疏に云く、既に往生を得て佛を見るに由るが故に、終に退あることなし、漸次に正定聚に入ることを得るが故に、云云此の意なり。若し所難の如く初住已上の行相を述べれば、已に住正定聚と云ふ、何んぞ得益の文と爲せんや。次に經文は多類の往生を顯すと云ふこと爾るべからず、所引の經文の説相、明なる故に重釋の論判を須るす、經論の意全同なりといふ事、誠に以て明鏡なり。若し四心下品の觀門に非ずんば、之を引て何の用ぞ。次に所立の義科の中に更に無相の觀門を出さずとは、論は且く有無の二觀を合釋し、經は廣く事理の二門を別説するが故に。若し彼の佛を觀する已下の經文を以て、(二)謂く意を専らにし、佛を念する因縁を以ての文に合し、畢生することを得て等の文を以て、願に隨て生ずることを得る以下の論文に合すべし。凡そ

(二)謂く云云起信論本文、論の十、七丁右裏にあり。

(一)輕毛云云十信は美惡何れの因縁に遇ふも何れに向ふも不定なること輕毛の如きが故に(二)強緣彌陀攝取の悲願なり(三)彌陀云云法藏比丘願を説て曰く我れ世に超たる願を立つる必ず無上菩提に至らん(四)暫く云云有相の事觀を明す諸文なり(五)元曉の起信論の疏なり

(六)習種 十住位なり。

(一)輕毛の修行疎なりと雖、願力に乗じて報土に託し、四心の根機劣なりと雖(二)強緣に屬し往生を許す、是れ則ち真如三昧の力用なしと雖も、(三)彌陀超世の願に依り、無漏無生の眞土に生ず、(四)暫く所難の文は悉く此の機に約して釋するなり、何ぞ一類劣鈍の釋文に塞て四心下品の理觀を遮すべけんや、隨て諸文事の行を勸むと雖、強に真如理觀の修行を遮さらんや、故に過無しと答へ申すべきなり。問ふ、成し申す所尙ほ理教に叶はず、先づ正定聚に於て二の會釋俱に明かならず、初の會釋に就て今の論の意は、三賢十地を以て正定聚と定めたり、馬鳴菩薩彼の初門の論判を須ひたまふこと分明なるが故に、論釋に違して處不退を以て正定聚と云ふと成し申す條甚だ然るべからず、但(五)元曉の釋に至りては、彼師正定聚に於て三釋ある中に、豎者の依憑する所は第三の釋か、其の義論釋に違するが故に依用すべからず、故に第二釋に云く、十解已上を名けて正定と爲す、定不退位を正定と爲すと。文此の釋は論家の定判に同するものか、次に雙觀經の文は、淨影大師彼の經の疏に云く、(六)習種已去の位に分に退せざるを説て正定と爲すと述べたり、彼の經文を釋して初住已上を指して正定聚と爲すの旨明鏡なり、後の會釋又然るべからず、終に至る可きの處を

擧ぐ可くんば十地佛果等を擧ぐべし、何ぞ初住正定を指すべけんや、是を以て新羅の元曉は(二)十解已上菩薩は、少分眞如法身を見ることを得、是の故に畢竟往生を得と判せり。長水の子璿は十信満足及び三賢位の人は眞如法身を觀するを以て勤修習するが故に願て彼の間に生せんと宣べたり。諸師の解釋一致なり、論藏何ぞ此の義に違せんや。次に四心下品の所修に非んば、之を引て何の用ぞやと云ふに至りては、正證にあらすと雖、因に往生の多數あることを顯さんが爲めに之を引くか、或は同文の故に來るか。次に若し彼の佛を觀する等の經文を以て、謂く意を専らにし、佛を念する因縁を以ての文に合すると云ふ事尠るべからず。論家彼の文を釋して云く、他方の淨土種々の依正を憶念すと。文依正の二報を觀するは是れ有相の事觀なり、豈に無相の觀門に合けんや、成し申す所は此等の難を招く、今度分明に成じ申せ。

答ふ、凡そ四心下品の人は、無相の觀解を作すべしと云ふ事、文理の兩證は先重に出し申す如き問難は多重に及ぶ、豎者愚昧にして決し難きものか、但し今論意は初住已上を以て正定聚と定むる御難は、豎者元より遮し申さるる所なり。然して今所引の經の正定聚とは處不退を指し成じ申す所なり。尠る所以は論家は得善處定不退門の科名

を立て、永く惡名を離れ定に從て動せずの解釋を作して、處不退の義を成し畢り、引證する所の正定聚豈に處不退の義にあらずや、就中所引の經は是れ觀經等を指すか、筆削記の中には修多羅等とは即ち阿彌陀無量壽(一)瑞相及び觀經等と判せり。而るに彼の無量壽經に既に、諸の邪聚及び不定聚なしと簡ふて、皆悉く正定の聚に住すと述べたり。今之所引は彼の經文を指すにあらずや、尠らば淨影は習種已去と釋し無論の施設に違ふものか、之に依りて群疑論の中に位所淺しと雖、唯し勝緣に遇ふて念念に進んで大乘の聖道を修して決定して退すること無きが故に名けて正定聚と爲すことを得と判せり。此の釋は深く經王の深旨に叶ふものか。次に遠く初住以上を指すと存じ申す意は、因果の相對一准ならず、故に四心下品は是れ不定聚の攝なるが故に之を望で正定聚を得益と爲すなり。所以に畢究生を得るは西方に往生するの義なり、正定聚に住すとは彼の土に生じ、後漸次初住に至る、爲言通法大師、既に往生を得、佛を見るに由るが故に、終に退あることなし、漸次に正定聚に入ることを得る故にと釋すは此の旨を爲すと見へたり。彼の元曉等の釋は文理に違ふ、必ず依用すべからず。次に依正二報は有相の觀なり、何ぞ無相の行に合すと云ふに至りては、有勝方便と云ひ、念佛因

(一) 三賢位論六の報身章の釋なり。
(二) 筆削記第五なり。
(三) 未だ云云此の意は但だ淺根の論には但だ淺根を云ふて十信の凡夫は皆して淺根と云ふや。

(四) 第一卷云云論一の廿四丁右裏に勝緣力如來信心を攝護したまふに佛を念する因縁を以てなり。
(五) 正定聚云云常に佛を見て永く惡道を離るる故に。

分齊なりと雖、(一)三賢位に業識唯心の觀解を許す、例するに又十信は事識に依り心外の境を緣すと雖、何ぞ又業識見佛の義を許さらんや、故に(二)筆削記の中に委く此の旨を成す。次に群疑論に至りては淺深二根の不同を述ぶと雖も、(三)未だ十信の理觀を遮せず、何ぞ忽に難文に備へんや。次に吉藏の釋に至りては彼の具なる釋に云く、但た佛を念するに二種あり、一には念佛法身、二には念佛生身と。文既に念佛の言は法身生身に通じ、有相無相に亘る、今の論の念佛因縁の詞は二種に通ず可しと云ふ事、誰れか之を疑はんや。次に正定處不退の事、所引の經文は事理の二觀に就き、二重の因果を明す。若し彼の佛を觀する以下、は理觀の修因得果を述ぶ、已上の文は事理の修行得益を明す、因果二重なりと雖も、同じく極樂を以て得果と爲すなり、何ぞ事觀の得果を處不退と許し、理觀の得處を處不退と許さらんや。(四)第一卷の八の因縁の中に勝緣力を以て正定聚に安立せしめんが爲の故にといふ、彼の(五)勝緣力とは義科の中の如來方便殊勝門に當る、(六)正定聚に安立する故は、今の得善處定不退門に同するにあらずや、故に彼の第七因縁に今の本文を引き、能化の教法を爲すこと之を思ふ可し、此の如く答へ成する上は、諸難悉く遮せらるゝものか、過なしと答へ申すべきなり。

(一) 探玄記第三に世界海を釋するに十門を以てす、中に於て第四門染淨に於て法と約し、位に約する中に約し、門あり、第四は退不退なり。
(二) 堪忍位、十住位の第一初發心住なり、已去とは第二住以て往たり、此れ凡夫より信心此行を修して滿して此の位に至るなり。
(三) 輕名、十信位なり。

り。觀經の疏吉藏云く、但し念佛に二種あり、一には念佛法身、二には念佛生身なり、念佛法身とは、須菩提石室の中に在り、端坐して諸法の實相を念するが如し念佛法身と名く、念佛法身とは如來三十二相八十種好金容莊特なるを念す念佛生身と名く。今無量壽佛を念す是れ佛の法身を念するにあらず、乃ち佛の生身を念す、何となれば正しく如來相好光明等を觀する故なり、然るに念佛生身に復二種あり、一には但念佛、二には通の念、五種あり、謂く念佛、念徒衆、國土、時節等と。文(一)探玄記等三に云く、四は退不退に約す、謂く十住に入り已去不退住の三賢菩薩の生處を名けて淨土と爲す、中に於て亦四果二乘等あり、阿彌陀の土は彼に生し皆正定に住す等の如し、(二)堪忍已還の(三)輕毛退位三聚衆生共生の處は淨土と名けずと。文起信疏下法藏に云く、引經の中に二あり、先づ經を引き、後に常に佛を見るの下は經文を釋す、若し法身を觀れば畢竟往生するを得等と言ふとは、但往生の人に約するに二位あり、一には蓮華未開の時、信行未だ滿たざるが如し、未だ不退と名けず、但處の退緣なきを以ての故に不退と稱す、二には信位滿足の以去は花開き佛を見、十住の位に入り、少分法身を見ることを得正定の位に住す、三には三賢位滿ちて初地に入り、已去遍滿法身を證して

(一) 同論疏元曉の起信論疏下に具釋あり。

(二) 無量壽云云遊心安樂道を指す佛因に生ずるものは皆正定聚なり。

無邊の佛土に生ず、佛記に龍樹菩薩等初地に住して淨土に生ずる等の如し、此の中舉究等は是れ後の二位と。文(一)同論疏元曉云く、正定に住すれば通じて論するに三あり、一には見道以上を方に正定と名け無漏道に約す正定の爲の故に、二には十解以上を名けて正定となす、定不退位を正定と爲す故に、三には九品往生は皆正定と名く、勝縁力に依りて不退を得る故に、中に於て委悉は(二)無量壽料簡の中に説くが如しと。文

報身報土

問ふ、何の經文を引てか勸劣向勝不退門を證するや。

答ふ、若し人西方極樂を專念す等の文を引きて、勸劣向勝不退門を證すと見へたり、故に、論に云く、修多羅に説くが如し、若し人西方極樂世界の阿彌陀佛を專念して所修の善根を廻向して彼の世界に生せんと願求すればと。文

問ふ、余らば西方の佛土は報身報土なりと云ふべきや。

答ふ、此の事經論の施設區々にして諸師の解釋非一なり、或は報身報土と云ふ、或は化身化土と云ふ、二の傳あるべきなり。

(一) 是を以て云云論六の三身章の本文なり。

(二) 御身廣大云云觀經第十三の雜相觀の下なり。(三) 國土云云天親の淨土論の文なり。

(四) 論中 論六。

問ふ、出し申す所の二の傳は俱に以て明かならず、先づ報身報土と云ふ傳に就き思ひ難し。夫れ能化の佛土を定むることは、専ら所化の機根に任す可きなり、既に十信凡夫の所見なり、寧ろ報佛の身土と云はんや、(一)是を以て本論には凡夫二乗心所見は名けて應身と爲すと。釋論には識の龜細に隨て所見の佛身隨て龜細の故にと述べたり。明かに知んぬ十信凡夫の能化の身土は報身報土にあらざるべしと云ふ事を。次に化身化土の傳に就て明かならず、彼の佛土を思へば(二)佛身廣大にして而も身量無邊にして是れ凡夫心力の及ぶ所に非ず、(三)國土寬廣にして究竟して虚空の如し廣大なること邊際なしと判せり、知るべし化佛の身土に非すと云ふ事、是を以て善導和尚の釋に云く、西方安樂阿彌陀佛は是れ報身報土と判せり、是れ豈に報佛の身土と定むるにあらずや抑も出し申す二の傳の中に豎者終に何れの傳を存じ申す可きや。

答ふ、西方極樂に於て報土化土の諍論旗鼓を擧げ、論師人師の解釋鋒楯を成す、先哲尙ほ是非に迷ふ。今愚豈に邪正を辨せんや、然りと雖も權實二教の判文を拾ひ、顯密兩宗の義理を探りて報身報土の義を立て申すべきなり。今の(四)論中に報身を釋すとし、勝妙の因を具し極樂の果を受けて自然自在決定安樂にして苦相を遠離すと。文阿

(一)三經 同性經、
雙觀經、觀經なり。
(二)諸論 佛地論
等なり。
(三)彌陀の別願
超世の大願なるが
故に別願といふ。

(四)觀音聲經 是
には阿彌陀鼓王聲
王陀羅尼經とい
ふ、失譯なり。
(五)觀音授記經
具には觀世音菩薩
得大勢菩薩受記經
といふ、劉宋の曇
無竭の譯一卷な
り。
(六)淨影大師 義
章十九にあり。

彌阿經の中には衆苦あることなし、但し諸樂を受く故に極樂と名くと説けり、經論の
文義全同なり、知るべし極樂自在の身は報身なるべしと云ふ事、是を以て善導和尚は
(一)三經の説を引て報佛の身土と定む、懷感禪師は(二)諸論の文を會して報土の義理を成
ず、但し十信凡夫の所見は報身にあらざるべし云ふに至りては、(三)彌陀の別願の力に
乗して具惑の凡夫報土に生ずるに何の過ぞや、他力往生といふは此の意なり、之に依
て觀經の玄義に云く、若し衆生垢障を論すれば實に欣趣し難し、正しく佛願に託する
に由て以て強縁と作す、五乘をして齊しく入らしめ致すと判せり。次に三身章の本釋
二論の文に至りては大途の義相に就く、西方の佛土は彼に異なるか、此の如く存し申
すは御難自ら遮せらるゝものか、過なしと答へ申す可きなり。

問ふ、答へ申す所余る可からず、凡そ諸經の施設を案するに、(四)鼓音聲經の中には彌
陀如來に於ては父母王國魔王調達等を出す、他受用既に生身にあらず、何ぞ父母等を
存するや、又(五)觀音授記經には彌陀入滅の行相を示し畢りて未來補處の弟子を定む、
他受用は是れ不斷常の佛なり、寧ろ入滅等の相を存せんや。此等の經說に依るに變化
身の佛土と云ふ事異論あるべからず。是を以て(六)淨影大師は、凡夫事淨の土と定め、

(一)智者云云 觀
經疏にあり。
(二)極樂云云 極
樂界の阿彌陀佛を
謂ふには非ず、凡
そ報身の化身の釋
受樂相に簡ふの釋
なり。
(三)天台云云 天
台大師の阿彌陀經
の義記なり。

(四)凡そ云云 天
親の淨土論の語な
り。
(五)無生 無生忍
なり、彼の土に生
じて無生忍を證す
るが故に、即ち無
漏の土に住し無生
の法を悟ることば
其の明なること月
の朗なるが如きの
意なり。
(六)花池云云 無
量壽經上の意。
(七)而るに云云 觀
經の第七華座觀
の下。

(一)智者禪師は凡聖同居上品淨土と判せり、文理俱に掌を指す會釋何ぞ心を迷さん耶。
但し報身章の釋に至りては(二)極樂の果を受くとは、化身の受樂の相に簡ふ詞なり、何
ぞ此を以て彌陀報身の義を成せんや。次に阿彌陀經文に至りては且く娑婆世界に對し
て余なりと云ふなり。故に(三)天台の釋に云く、若し賢首に望むれば猶是れ下品なり、
但し娑婆に比るが故に極樂と名くと。文次に善導懷感兩師の釋は文理に背く故に信用
し難きものか。次に彌陀別願の事誰れか共許する所たるや、西方は是れ凡聖同居の
土の故に異生等彼に往生す、何ぞ猥しく報土の義を成して他力往生の會通を構へんや。
余らば此等の諸難を會して分明に答へ申すなり。

答ふ、(四)凡そ安養の淨土は三界を超過するの國、月は無漏(五)無生の光を朗にす、廣大
無邊の境花は非有非空の句を發す、色を見るに皆眞色なり、(六)花池寶閣悉く寶藏因行
の成する所、音を聞くに悉く法音なり、水鳥樹林皆彌陀果地の作す所なり、何ぞ濫し
く同居の莊嚴に准へて強て界内の疑殆を抱くべけんや。重ねて經論の施設を窺ひ再び
諸師の解釋を詳るに、觀經に無量壽佛は八萬四千相ありと説き、心地觀經には八萬四
千の相好は地上の能化と定め、又初地二地等所坐の花葉は百葉千葉等なり、(七)而るに

(一) 那伽羅樹 龍
蓋と翻し舊には龍
樹と譯す。
(二) 清淨國云云
智度論三十八にあ
り。
(三) 婆藪盤頭 世
親と譯し舊には天
親といふ。
(四) 珠珍の臺 蓮
華臺なり。
(五) 佛地論 親光
菩薩の作、第一に
他受用身の土を明
す下にあり。

(六) 不斷常 在世
は多分なり。間斷は
少時なり。

彌陀如來所座の蓮花は八萬四千葉と云云 是れ豈に還て地前能化の應化身ならんや。之に依て群疑論に云く、八萬四千の相好は、是れ唯他受用身佛と判せり、加之(一)那伽羅樹は八宗の高祖となり、(二)清淨國は三界を出てたりと述べたり。(三)婆藪盤頭は千部の論師と爲して勝過三界道と判せり。爰に知んぬ(四)珠珍の臺界内の所有にあらず、寶玉の林は同居の莊嚴に非すと云ふ事を、是を以て禮懺經には受用智慧身阿彌陀佛と云ひ、(五)佛地論には報身の土を出すとすとして、或は西方等處所不定なりと判せり、安養淨土は化佛の身土にあらずと云ふ事顯密の説相一撥なるか、但し鼓者聲經說に至ては慈恩大師之を會して云く、此は是れ他受用身の示現、亦父母王國あり、實には即之れ無し、實には女人惡道等の怖なしと。又父母等を化現す、實類の父母にあらず。爲言次に觀音授記經に至りては、他受用身に又入滅の相あり、故に心地觀經に云く、前佛入滅後佛成不同化佛經劫現と。又不斷常とは多分に約するか。之に依りて溜州大師の襄勝の疏に云く、相續と言ふは多分に約して説く、他身の多百千劫に始めて一び現するには同せざるが故にと釋し、慈恩法師の唯識の疏に云く、湛然と言ふは他受用に簡び、及び化身に簡ふ、彼は時として斷するが故にと述べたり。此等の釋の意は他受用に於て

(一) 今の論 論六
なり。

(二) 具縛云云 縛
は煩惱、煩惱を具
足する凡夫、底も
亦下なり。凡劣の
事なり。
(三) 五劫思惟 法
藏菩薩は五劫思惟
して他力別願を果
す。
(四) 超世の願 法
藏菩薩四十八願を
説き已りて頌を説
て曰く、我れ超世
の願を建つ。云云

少時の間斷を許すと見へたり。次に淨影の釋に至りては、彼の義章の中に事相眞の三種土を明すの時、西方を以て凡夫事土と判す、是れ往生人の一邊を守る、未だ彌陀別願の廣大なることを知らず、故に彼の釋は信用し難し。故に天臺の釋は經論の説文に應せず、所以何となれば、(一)今の論の決定安樂して苦相を遠離するの文と阿彌陀經の衆苦あることなし但諸樂を受くるの言と其の意全同なり、何ぞ彼の經文を以て娑婆世界に望めて極樂と名くと云ふや、是を以て群疑論には衆苦あることなし、但諸樂を受くる等の故に、唯是れ他受用土なりと判せり。次に彌陀別願の事は、凡そ彌陀如來は是れ濁世利物の導師、娑婆有縁の薄伽なり、六八願の弘誓は遠く未來の衆生に被らしめ、三三品の淨利は在惡凡夫となり。是を以て(二)具縛底下の凡夫は一毫の惑を斷せず、直に無漏の報土に生ず、是れ(三)五劫思惟の成する所他力別願の果す所なり。若し所難の如くんば、何ぞ更に別願と號し又(四)超世の願と稱すべけんや、故に過なしと答へ申す可きなり。

問ふ、成し申す所は尙ほ明かならず、凡そ三乘同見の佛身を以て變化身と定むることは、西方佛土既に二乘凡夫雜居するが故に化身の佛土たるべしと云ふ事勿論なり、故

は化身の土にあらずと云ふ事、但三乗の人難居の故に化土なる可しとは、此の事は諸師の解釋不同にして所立の義文一准ならず、且つ善導懷感兩師の解釋に依りて之を存するは、善導自ら問ふて曰く、彼の佛及び土は既に報なりと云ふは報法は高妙なり、小聖階ひ難し垢障凡夫云何んぞ得入せん、答て曰く、若し衆生垢障を論すれば實に欣趣し難し、正しく佛願に託して以て強縁と作すに由り五乗をして齋しく入らしむ。懷感禪師は、然るに阿彌陀佛殊勝の本願増上縁力を以て、彼の地前諸小行菩薩等をして識心劣なりと雖、如來本願の勝力に依託し乃至故に名けて他受用土に生ずと判せり、是れ則ち彌陀別願の致す所、何ぞ始に奇とせんや、次に佛地攝論等の判文に至りては、群疑論に之を會して云く、佛地論等に、初地已上は他受用の土に生じ、地前の菩薩は變化の土に生ずと説けり、此れ自力に據て地前地上の二土に居することの別なることを分判す、他力別願の勝縁に據て説かずと述べたり、會釋誠に明鏡なり、誰れか疑殆を作すべけんや、次に彌陀如來相好多少に至りては、先づ觀經の説は彌陀如來の實身は廣大無邊にして下劣凡夫の所知に非ず、故に引入方便の爲めに且く一丈六像を觀せしむるなり、故に經の次き下の文に云く、無量壽佛の身量は無邊なり、是れ凡夫心

(一) 大賢の釋、觀經、大無量壽經、小阿彌陀經、稱讚淨土經の各古述記等に上生經疏上の二に具文あり。

(三) 契經、心地觀經なり。

力の及ぶ所にあらず、然るに彼の如來は宿願力の故に憶想するものあらば必ず成就を得ん。文此の義文に依り儀軌の説を案するに初心行者の爲に且く三十二相等の形相等を示すか、儀軌の中に、廣くは無量壽經の所説の如しと云ふ、知るべし儀軌の意は觀經の説に違すべからずと云ふ事、次に三界を勝過するの文に於ては、惠遠妙樂等の釋具には理致に叶はず、恐らくは胸臆の會釋に似たり。故に曇鸞道綽善導等の諸師、經論の立旨を探て専ら報土の義理を成す。次に妙顏天子は實類の女人と云ふ事は文證何ぞや、明證なくんば重難となすべからず、父母等を示現すと云ふ事は分段身の菩薩を化さんが爲め、更に父母王城等を現す、之に依りて(一)太賢の釋に云く、既に報土に實の如なし、佛及び菩薩化して母等と爲りて分段を化す等と。文次に慈恩の釋は報土化土の二の釋を作す中に、唯報土の義をば所存の正義と爲すと見へたり、故に(二)上生經の疏の中に、執化二土に通するの義をば有人の釋と爲し唯報土の義を以て自の義となす。次に心地觀經の文は彼の次き下に、化佛の劫を経て現するに同じからすと云ふ、此の文の顯す所、他受用に又小時の間斷を許すにあらずや、之に依りて留闍大師は、化身は多百劫に始めて一現するに同じからざるが故にと釋す、實に(三)契經の説に冥き

(一) 慈恩云云 阿彌陀經通贊の疏三卷の中卷なり、文は取意なり。

(二) 雙觀經云云 無量壽經下に云く、慈氏菩薩佛に白して言く、世尊何の因縁を以て彼の國の人民胎生と文の如く説きたまふ。

(三) 嘉祥大師の觀經の義疏にあり。 (四) 唯識論 同論第十。 (五) 荊谿云云 釋義第六。 (六) 淨土釋義に於ては之れ無動國に於ては安養國にあらざるなり。

(一) 撲揚 唯識演義第七に具文あり。 (二) 淨土 淨土釋義に於ては之れ無動國に於ては安養國にあらざるなり。 (三) 出し申す 云云 前の演義の文に「何んぞなれば先きに同居の淨土に化身所居の土は淨土と名くることを得ず」と云ふ故也。 (四) 前の説に同じ 第一釋に云ふ。 (五) 他受用云云 唯識第十に云く、他受用身謂く諸の如來の平等智の由りて示現し玉へる微妙の淨功德身ぞ。 (六) 此の中 莊嚴論を指す、食身とは受用身の異名なり。 (七) 七地以前の云 分段の菩薩なり。 (八) 十地の菩薩

ものか、而るを前後地の機根に約すれば御難頗る余るべからず。次に佛地莊嚴等の論文に至りては、彼は自受用に約し未だ他受用には據らず、故に全く相違と爲すべからず、故に過なしと答へ申す可きなり。

問ふ、難答多重なりと雖も、尙ほ不審なきにあらず、報化二身の所化は變易分段各別なり、是を以て(一)慈恩通贊疏に云く、報佛の所化は變易身、化土の菩薩は分段身なりと文而るに西方淨土の往生の人は分段身なるが故に報佛の身上とは云ふべからず、是を以て(二)雙觀經の中には疑心修善の人は極樂邊地に在りて胎生を受く等と説けり、(三)嘉祥大師は又彼土の壽は無量なりと雖も、必ず終終する故に知んぬ彼の土は分段生死なりと判せり。若し余らば唯變化の土にしし報佛の土にあらざるべし。此等の文理に依て天台嘉祥淨影等の諸師盛りに化身化土の義を談す。但し同性經の文に至りては、報土は唯淨なるに對し且く化身の土を穢土と云ふ、淨土を遮するにはあらず、是を以て(四)唯識論に云く、變現したまへる無量の隨類化身を淨穢土に居して、未登地の諸菩薩衆と二乘と異生との爲に彼の機の宜しきに稱ふと判せり、既に淨穢土に居すと云ふ、何ぞ西方淨土は變化淨土にあらずや、(五)荊谿湛照大師は、是れ(六)淨土なりと雖、男女

及び須彌等あるに由りて此れ同居の淨土なり、既に其れ不同なり、同居の穢土亦不等なるべしと釋せり、専ら據る所ありと見へたり。(一)撲揚大師彼の經文を會して云く、(二)受用に對せんが爲に化を稱して穢となす亦相違せずと。文但し(三)出し申す所の釋に至りては、撲揚は變化淨土に於て長時暫變の二釋を作す中に、長時淨土の義を許さざる前に彼の釋を作すなり。實義を述ぶるの時、今(四)前の説に同じく多く經論の中に淨を生ずと説く故にと。文西方を以て變化長時淨土と爲すと見へたり。次に(五)他受用に間斷ありと云ふこと尙ほ然るべからず、能現の智品は平等性智なり、佛果に相續して間斷なし、所現の他受用何ぞ間斷あるべけんや。又佛地莊嚴論等は他受用に約せずと云ふ事、溜洲大師は(六)此の中の食身は自他受用を攝すと釋せり、自他受用に通すと云ふ事分明なり如何。

答ふ、惣相龜論の時は二身の所化分段變易異りと雖も、據實通論の日は二佛の所化分段變易に通す可きなり、(七)故に彼の(八)七地以前の悲増菩薩他受用の教化に預り、(九)十地の菩薩變化身の會座に列する等此の意なり。若し余らば西方の教主報身にして分段身を以て所化と爲す何の過ぞや、況んや彌陀如來の弘誓は他佛の悲願に異なるが故に、

智増の菩薩及び八
地已去の變易身を
天善法華文
句八ノ二に云く、
蓮華化生は胎化
生すは胎卵濕化
の化生に非ずして
化言ふのみ、實
生は四生の中は
生に如きにはあ
す云云。
識述記には淨穢
に居すの唯此の
演秘の釋なり。佛
地論の文なり。佛
云云。上生經の疏
云云。觀經疏 支義
分の釋なり。

世饒王佛 世
自在王の別名なり

常途の謂情を以て重難となすべからず、但し受胎生の文に至りては、(一)天台法華の疏
に云く、胎蘊に處して久しきものを胎生となす實胎にはならず、佛へば遺精化生とは
亦濕卵にして濕卵にあらずと稱すと。文是れ即實の胎生にはあらずるなり。次に唯識
論の淨穢土に居すの文に至りては、(二)慈恩此の文を釋して云く、暫く淨土を變すと。文
長時の淨土にあらずるなり。撲揚の釋は恐らくは慈恩の釋に違する故に依用すべから
ず。所以に(三)親光論師は處處不定の義を釋して、或は西方等處處不定と云ひ、(四)慈恩
大師は西方唯報土の義を以て實義と爲す、此等の判文に違して長時の淨土を變化すと
判す、師資稟承に背かぬや。次に他受用間斷の事は設ひ能現は間斷なしと雖、所現の報
身間斷するに何の過ぞや、此の如く答へ成するは諸難悉く遮せらるゝものか、過なし
と答へ申す可きなり、(五)觀經疏第一に云く善導問ふて曰く彌陀淨國は爲當是れ報なり
や是れ化なりや、答へて曰く是れ報にして化にあらず、云何んが知ることを得ん、大
乘同性經に説くが如し、西方安樂の彌陀佛は是れ報佛報土なりと、又無量壽經に云く、
法藏比丘(六)世饒王佛の所に在して、菩薩の道を行せし時四十八願を發し、一一に願ふ
て言く、若し我佛を得たらんに、十方の衆生我名號を稱して我國に生せんと願ひ、下

十念に至るまで若し生せずんば正覺を取らず、今既に成佛す即ち是れ酬因の身なり。
又觀經中の上輩の三人命終の時に臨んで、皆阿彌陀佛及び化佛と此の人を來迎すと云
へり、然るに報身は化を兼ね、共に來て手を授くる故に名けて與と爲す、此の文
を以て證す、故に知んぬ是れ報なり、乃至問て曰く、既に報と言ふは報身は常住にし
て永く生滅なし、何故ぞ觀音授記經に、阿彌陀佛に亦入涅槃の時ありと説く、此の一
義若爲通釋せん。答へて曰く入不入の義は唯是れ諸佛の境界なり、尙ほ三乘淺智の關
ふ所にあらず、豈に況んや小凡輒く能く知らんや、然りと雖も必ず知らんと欲せば敢
て佛經を引て以て明證とせん、何となれ大品經の涅槃非化品の中に説示するが如し、
乃至須菩提言く、何等か是れ不生不滅にして變化にあらずる、佛言さく誑相なし、涅槃
是の法のみ變化にあらず、世尊、佛自ら諸法平等にして聲聞の作にあらず、辟支佛
の作にあらず 諸菩薩摩訶薩の作にあらず、諸佛の作にあらず、有佛無佛諸法の性常
に空なり、性空即ち是れ涅槃なり、云何んぞ涅槃の一法化の如くにはあらずる、佛須
菩提に告げたまはく、乃至是れ新發意の菩薩の爲の故に、生滅のものは化の如く、不生
不滅は化の如くにはあらずと分別するをや、今既に斯の聖教を以て、驗かに知んぬ彌

至の乃至此の乃至
の皆正定聚なる
はの句ありの聚なる
三群疑論西都
撰全七卷なり此
の中三種の土
は、一には法性
土、二には受用
土、三には變化
土なり。

陀は定んで是れ報なり、たひ縦使後涅槃に入る其の義妨げなし、諸有智の者應に知るべし。
問て曰く彼佛及び土は既に報と言ふは報法は高妙なり、小聖階がたし、垢障の凡夫云何
んが入ることを得ん。答へて曰く、若し衆生の垢障を論すれば實に欣趣し難し、正し
く佛願に託して以て強縁と作すに由りて、五乗をして齋しく入れしむと。文同經の疏
天台に云く、安養の清淨池に入徳を流し、樹七珍を列ね、こ乃至凡聖同居上品の淨土な
り。三群疑論第一に云く、問て曰く、今此の西方極樂世界は三種の土の中には是れ何
の土の攝ぞ、釋して曰く、此に三の釋あり、一には是れ他受用の土なり、佛身の高さ
六十萬億那由他恒河沙由旬なりと其の中に多く一生補處ありと、衆苦あることなし、
但し諸の樂等を受くと云ふを以ての故に、唯是れ他受用の土なり、二には言は唯是れ
變化の土なり、何の聖教にも佛の高さ六十萬億那由他恒河沙由旬なり等と言へること
あるを以て、即ち是れ他受用身土なりと證すれども、何ぞ淨土の變化身の高さ六十萬
億那由他恒河沙由旬なることを妨げん、觀經等に皆説て凡夫衆生の往生する淨土たる
を以て、故に知んぬ是れ變化の土なり、三は二土に通し地前に變化の土を見、地上他受
用の土を見る、同じく其の一處なれども、各自心に隨て所見各々異なる故に二土に通ず、

是の乃至此の間
夫の境にありす凡
當に丈六の觀を作
すべしとあり初
地以上所證の眞如
なり。

往生論具題
に云く無量壽佛
婆提舍願生の偈
造、復魏の菩薩
支譯、普通に往
淨土論といふ、生
果報は二種の機嫌
の過名と離る、即ち
とに三種あり、二乗
と女人と諸根不具

こ乃至問て曰く、前の第一の釋に、若し是れ他受用土とは云何ぞ地前の凡夫生ずるや、
若し變化の土ならば、云何ぞ地上の聖人生ずるや、釋して曰く計りみるに彼の地前の
菩薩・聲聞・凡夫・未だ^こ遍滿眞如を證せず、未だ人法二執を斷せざるは、誠心廉劣なる
を以て所變の淨土、地上の諸大菩薩の微細の智心所變の微妙の受用の淨土に同すべか
らず、然るに阿彌陀佛の殊勝の本願増上縁力を以て、彼の地前の諸小行の菩薩等、識
心劣なりと雖も、如來の本願勝力に依託すれば、還て能く彼の地上の菩薩の所變の淨
土に生じ、微妙廣大清淨の莊嚴を亦見ることが得しむ、故に他受用の土を生ずと名く、
佛地論等に初地已上は他受用の土に生じ、地前菩薩は變化の土に生ずと説けり、此れ
自力に據り地前地上の二土に居すると別なりと分判するなり、他方別願の勝縁に據て
説くにはあらず、乃至八萬四千の相好は唯是れ他受用身の佛なり、是れ地前の能く觀
見する所にあらざれども、下の文に言く、然るに彼の如來の宿願力の故に憶想あるもの
は必ず成就を得といふなり、故に知んぬ宿願力に乗して受用の身を觀見し、亦宿願の
力に乗して受用の土に生ずるなり。文^三往生論に云く、大乘善根の界には等しふして
^四機嫌の名もなし、女人及び根缺と二乗の種は生せずと。文^三三身義林慈恩に云く、初地

(一) 維摩 維摩經
(二) 今 今は唯
識の文を指し、前
の説は謂く二釋
即ち二乘異生亦生
の義ないふ。
(三) 大論 二十八
にありしして第三
十四に大に似たる
文あり。

(四) 有 三界の有
なり。
(五) 衆香界 維摩
經香積品に在り、
衆香界は衆香國な
り。

(一) 初門の因 凡
夫有を求むる淨業
なり。
(二) 初門の果 其
の所得の凡夫の善
果なり。
(三) 後門の因 凡
夫出を求むる善根
なり。
(四) 佛果 自成佛
の果方謂ふにはあ
らず、能化の佛を
佛果とするなり。

(五) 後門の果 其
の所感の佛土なり

(六) 道家 道諦所
感の果と云ふ如し。
(七) 報身 有漏の
果報の身なり。
(八) 淨土論 弘法
寺の釋の迦才の撰
三卷中の上卷な
り。
(九) 心地觀經 第
三卷報恩品の下
なり。
(一〇) 東沼 溜洲大
師なり。

變淨方の如し、(一) 維摩等同じ。詳して曰く(二) 今前の説に同ず、多く經論中に生淨を説く故に同性經の中には受用に對せんが爲に化を稱して穢と爲す亦相違せざるなり。淨土論に云く、彼の世界の相を觀するに三界の道に勝過せり、究竟して虚空の如し廣大にして邊際なし、文釋籤の第六に云く、(三) 大論二十八に云く、有る佛土は一乘を説き純菩薩なり、有る佛土は雜て彌陀の如し、菩薩僧多く聲聞僧少し、若大論の中には安養國は三界にわらずと明かせるは、只是れ此の娑婆三界にわらざるなり。若し彼の土に就て具に二界あり、故に無量壽經乃至是れ淨土なりと雖、男女及び須彌等あるに由り、此の同居の淨土既に其れ不同なり、同居の穢土亦不等なるべし。文大乘義章十九淨土義に云く、分別するに三あり、一には事淨土、二には相淨土、三には眞淨土、事淨土の中に三門の分別あり、一には惣して相を辨じ、二には別して之を顯し、三には諦に約して以て定む、惣相を云何が事淨土と言ふとは是れ凡夫人所居の土なり乃至次に別して之を顯す事淨土に二あり、一には是れ凡夫の(四) 有を求むる淨業所得の土は、上の諸天所居等の如き是なり乃至二には是れ凡夫の出を求むる善根所得の淨土は、安樂國(五) 衆香界等の如し、出世の善業より得るに由るが故に、受用の時能く出の道を生

ずと。文又云く次に四諦に約して其の相を辨定せば前の兩門の中に(一) 初門の因は唯是れ集諦なり、分段の因なるが故に、(二) 初門の果は體唯苦諦なり分段の果の故に、(三) 後門の因に其の兩能あり、一には正しく(四) 佛果を感ず、二には傍に淨土を招く正しく佛を感ずる邊は一向非集なり、能く佛德を生ず、生死の諸有果を集めず故に傍に土を招く邊は亦集にして集にあらず、向前の初門の因に形れば非集と言ふことを得、出の善根を求むるは是れ其の相似道諦の攝なるが故に、當分實に論せば體性は是れ集、能く有爲生滅の果を招くが故に、(五) 後門の果形前に非苦なり、是れ其の相似出世の果なるが故に、故に論に無量壽國は三界に屬せずと宣説す、彼には貪欲なし故に欲界にわらず、在地を以ての故に色界と名けず、形色ある故に無色界にわらず、是れ(六) 道家の果に相似するを以て之を攝して道に屬す、故に苦と名けず、佛の淨土菩提道の攝に似たり、當分實に體性を論せば、善諦生滅の果なるが故に有漏(七) 報身の所依處なるが故に事淨是の如しと。文(八) 淨土論迦才に云く是の化土と言ふは觀音授記經に出たり、觀世音菩薩菩提樹下に於て等正覺を成すと。文(九) 心地觀經に云く、他受用身の諸の相好乃至先佛入滅すれば後佛成ず、化佛の劫を経て現するに同せずと。文寂勝王經疏(一〇) 東沼に云く

(二) 觀經 第十三
雜想觀の文なり。

(三) 乃至 但し佛
像を想ふすら無量
の福を得の文あり。
(三) 又云く 自下
第九眞身觀の文なり。

應身は化身にわらずとは、是れ地前の身なるが故に。問ふ若し他受用ならば云何が下に應身と云ふは、無始より來た相續して斷せず、一切諸佛不共の法を能く攝持するが故に衆生盡くることなく、用亦た盡くることなし、云く他受用身は既に滅度を現す、如何んが無始相續不共の法能く攝持する故にと言ふことを得んや。答ふ相續と言ふは多分に約して説く、化身の多百千劫に始めて一び現るには同しからざる故にと。文唯識疏第十云く、相續と言ふは自性身を簡ふ、生滅ある故に、湛然と言ふは他受用を簡ひ及び化身を簡ふ、彼は時に斷するが故に。文(二) 觀經に云く若し心を至して西方に生せんと欲んものは、先づ當に一丈六像に於て池水の上に在すを觀すべし、先の所説の如く無量壽佛の身量無邊にして是れ凡夫心力の及ぶ所に非ず、然るに彼の如來宿願力の故に憶想すれば必ず成就を得(三) 乃至何んぞ況んや佛の具足の身相を觀じ、阿彌陀佛は神通如意にして十方の國に於て變現すること自在なり、或は大身を現じ虛空中に満ち或は小身を現じ丈六八尺なり、所現の形皆眞金色なりと。文(三) 又云く阿難當に知るべし無量壽佛の身は百千萬億夜摩天の閻浮檀金の色の如し、佛身の高さ六十萬億那由他恒河沙由旬なり、眉間白毫は右に旋り婉轉して五須彌山の如し、佛眼は四大海水の如

し、青白分明なり乃至圓光の中に於て百萬億那由他恒河沙の化佛あり、一一の化佛にも亦衆多無數の化菩薩あり、以て侍者と爲す、無量壽佛に八萬四千の相ありと。文

二門

他方佛土

論に云く願に隨て他方の佛土に生ずることを得と。文意如何ぞ。

答ふ、專意念佛の勝利を明すとすして、願に隨て他方の佛土に生ずることを得と此の文の意なり。故に(一)論に云く、謂く意を專にして佛を念する因縁を以て、願に隨て他方の佛土に生ずることを得と。文

問ふ、余らば今此の他方佛土は西方の淨土に局ると云ふべしや。

答ふ、義門不定にして學者の存知一准ならず、且く一義に依ては西方に局ると云ふべし。

問ふ、答へ申す所明かならず、夫れ本釋二論の施設を開きて他方佛土の(二)寛狹を案するに諸如來の言を以て一佛に局らず、隨願往生の文十方に通ずべしと覺へたり、之に依て(三)異譯の論には必ず餘佛刹中に往生すと宣へたり、人師は意に隨て十方淨土に往生すと判せり、他方佛土の言は西方佛土に局らずと云ふ事解釋誠に分明なり、余らば如何んが答へ申す可きや。

(一)論 釋論第十卷七丁左裏。

(二)寛狹 寛は十方、狹は西方なり

(三)異譯 唐の實又維陀の譯の起信論なり。

(一)論には 論十の九丁右裏。

(二)高祖大師 秘藏記の文なり。
(三)諸如來云云 釋論第十卷の九丁の右裏。

(四)藥師經 支非三藏の譯。

(五)願力 行者の願力なり、彌陀の願力にあらず。
(六)論中 釋論第十卷の九丁右裏。

(七)長水 起信論筆削記六の文なり。

答ふ、本より答へ申す所引證の經文既に專念西方極樂世界阿彌陀佛と云ふ、若し他方佛土は十方に通ずべし、何んとなれば西方に局る經説を引く可けんや、是を以て(一)論には、則ち妙樂の土に往生することを得るが故にと云ふ、妙樂土の稱は西方極樂に在るが故に、(二)高祖大師又最上の妙樂其の中に在るが故に極樂と云ふと判じ給へり。但し(三)諸如來の文に至りては、釋迦彌陀の二佛に通ずるが故に諸如來と云ふか。故に實際大師の釋に云く、勝妙方便とは具に願と教とに通ず、謂く西方彌陀如來の本願攝受と此の土の釋迦の説教誘導との如きは皆方便なるが故と。文 或は又諸佛皆衆生の願樂に隨て西方の淨土に化導する故に余か云ふなり、彼の(四)藥師經等の所説の如し。次に隨願の詞に至りては、凡そ安養淨土に生ずると云ふ事は、(五)願力に依て往生するが故に隨願往生と云ふ、是を以て(六)論中に自の所願に隨て即ち往生することを得と釋するは此の意なり。次に異譯論に至りては今の論文に違せず他方と云ひ餘刹と云ふ其の意全同なり、何ぞ難端とせんや、此の土に對して西方を指して餘の佛刹と云ふ、人師の釋は用否意に任すべし、故に過なしと答へ申す可きなり。問ふ、答へ申す所尙ほ然るべからず、凡そ衆生の願樂萬差なり、諸佛の方便何ぞ一佛土に局らんや、之に依て(七)長

十卷の九丁左表言
得善處不退門の
下にあり。

(二) 或は又云云
釋は善導の玄義分
及び懷感の群疑論
第六に具釋あり。
(三) 論の釋は彼の
土に生じ已れば眼
に如來の相好を具
する像を見れば具
聖説深妙の梵音を
聞くの文なり。

(四) 餘處 十住毘
婆娑に具文あり。

答ふ、本より成し申す所、論家の(一)所釋を開きたるに彼の土に生じ已りて、眼に如來の相好を具へたまへる像を見、耳に聖の深妙を説きたまへる梵音を聞く。文論判實に分明なり、何ぞ彼の土に生じ乍ら見佛開法を見すと云ふや、但し御難に至りては設ひ蓮花未開の前なりと雖も、何ぞ見佛等の義なからんや、是を以て妙樂大師の釋の中に、安養界下品生の如き人は、蓮花中に在りて常に彌陀觀音說法を聞くと。文開法既に有り見佛何ぞ無からんや、(二)或は又十信を以て上品下生の人と釋する意ならば、花中に生ぜざる故に花開の前後を論すべからず。次に賢首の釋に至りては(三)論の釋に違するが故に苦勞に及ばず、過なしと答へ申すべきなり。

問ふ、答へ申す旨尙ほ明かならず、蓮花未開の前に見佛開法すべしと成し申す事、甚だ以て然るべからず、觀經の説を開くるに或は花の敷くる時に當て大悲觀世音菩薩及び大勢至、大光明を放て其の人前に住し、爲に甚深の十二部經を説くと云ふ、上の文には或は云く、花既に敷け已りて目を開き掌を合せて世尊を讚歎したてまつり、法を聞きて觀喜すと宣べたり、是れ皆花開き已りて後見佛開法すと云へり、何ぞ未敷以前に見佛すと云はんや。是を以て論主(四)餘處の釋に信心清淨なれば花開けば則ち見佛す

(一) 觀經の疏 散
善義の釋なり。
(二) 歷事供養 偏
十方刹土に遊び
諸佛に歷事供養す
るなり。
(三) 論の釋 意は
彼の土に生じ已り
花も亦敷て後眼に
如來の相好を具し
たまへる像を見る
等。

と。文或は又善導の(一)觀經の疏を考ふるに花の内に在る時に三種の障あり、一には佛及び諸の聖衆を見ることを得ず、二には正法を聽聞することを得ず、三には(二)歷事供養することを得ずと判せり。但し(三)論の釋に至りては花開已後に約して余か云ふ、未敷の位に非ざるか。次に妙樂の釋に至りては蓮花の中に在るは無量の蓮花ある中に生ずと爲言合蓮花の中と謂ふにはあらず。次に十信を上品上生と存じ申す事然るべからず、(四)觀經の所説を案するに上品上生の人彼の土に生じ已りて佛菩薩の色相を見、

寶林演説の妙法を聞き即ち無生忍を證すべしや、(五)仁王經の施説に准するに無生忍は七地以上に在るが故に、是を以て吉藏法師の釋には當に知るべし此は是れ七地無生なりと判せり、淨影大師の所釋は四地已去は名けて上上生と爲す、彼は即ち無上忍を得るが故なりと述べたり、而らば此等の文理に背き十信を以て上品上生の人となすと云ふ事甚だ然るべからず如何。

答ふ、凡そ合蓮の中に生ずるは是れ罪障に依る、若し見佛開法の益なければ何に依りて花開の期あらんや、彼れ娑婆臨終の時尙ほ見佛開法あり、況んや極樂に生ずるの後開法等の義なきは、極樂の名言の實なきか、之に依て或釋の中に六時開法の樂を擧げ、

正聞をば法食に屬し、聞き已るをば喜食と爲すと。文 觀經に云く上品上生とは乃至即ち自ら身を見金蓮花に坐せり、坐已りて花合し世尊に隨て後即ち七寶の池中に往生することを得、一日一夜にて蓮華乃ち開き、七日の中乃ち佛を見るを得、佛身を見ると雖も、衆相好に於て心明了ならず、三七日後に於て乃ち了了に見たてまつる、衆音聲を開き皆妙法を演ぶと。文 又云く、下品上生とは乃至七七日を經て蓮華乃ち敷く、花の敷く時に當り、大悲觀世音菩薩及び大勢至大光明を放ち其の人前に住す、爲に甚深の十二部經を説き、聞き已りて信解して無上道心を發すと。文 又云く下品下生とは或は衆生ありて不善の業たる五逆十惡を作り諸の不善を具す、乃至十念を具足し、即ち極樂世界に往生することを得、蓮花の中に於て十二大劫を滿し、蓮花方に開きて觀世音大勢至、大悲音聲を以て其れが爲めに廣く諸法の實相を説くと。文 善導疏第四に云く、又下品下生の中に五逆を取りて謗法を除けるものは其の五逆は已に作れり、捨て流轉せしむるべからず、還て大悲を發して攝取して往生せしむ、然も謗法の罪は未だ爲す、又止めて若し謗法を起さば即ち生することを得じと言へたまふ、此れ未造業に就きて解するなり。若し造らば還て攝して生を得しむ、彼に生するを得と雖も、花

諸法の文に「除滅に罪の法を」の文字あり。

十住毘婆舍論 第五易行品

觀經疏 玄義

來し破す云 初に諸師の解を擧ぐ、當段は第二に諸師の解を擧げて破すといふ。云 法性云云 通記第五に曰く、傳初地以上分段身の捨て、法性微細の身を獲得す、所證の理に約して法性身と名く、因移り果易るを變易身と爲す。云 此の觀經主

合して多劫を還、此等の罪人花の内に在る時三種障あり、一には佛及び諸の聖衆を見ることを得ず、二には正法を聽聞することを得ず、三には歷事し供養することを得ず、此を除く以外は更に諸苦なしと。文 十住毘婆舍論に云く、若し人善根を種へて疑ふときは則ち華開けず信心清淨のものは華開けて則ち佛を見ると、文 觀經疏第一善導に云く、第二に即ち道理を以て來し破すとは、上み初地より七地に至る已來を言ひ、菩薩は華嚴經に説くが如し、初地已上七地已來は即ち是れ法性生身變易生身なり、斯れ等は曾て分段の苦なし、其の功用を論すれば己に二大阿僧祇劫を經て乃至神通自在にして轉變無方なり、身報土に居り常に報佛の說法を聞きて乃至更に何事をか憂へてか乃ち章提それが爲に佛を請するに籍て安樂國に生することを求む。此の文を以て證するに諸師の所説豈に錯にあらざるなり。文 又云く此の觀經の定善及び三輩上下の文の意を見るに惣て是れ佛世を去て後の五濁の凡夫なり、但し縁に遇ふに異りあるを以て九品を差別せしむることを致す、何となれば上品の三人は是れ大に遇へる凡夫、中品の三人は是れ小に遇へる凡夫、下品の三人は是れ惡に遇へる凡夫なりと。文 又第四には文を出して顯證すとは乃至定に凡夫の爲にして聖人の爲めならずと。文 觀經疏

吉藏云く前に上品上生發菩提心修行を明し、七日を経ば則ち彼の國に生ず、彼の佛身妙法を説くを聞きて則ち無生法忍を悟る、問ふ、此れは是れ何の地の無生なるや、解して云く、此は是れ七地無生なり、何を以てか知るを得んや、解して云く上下品は百法明門を生じ歡喜地を得、下品既に歡喜を得、當に知るべし此は是れ七地無生なり。文

(二) 雙觀經の疏淨影の無量壽經義疏下卷。四地以去謂四五六地なり是れ七地無生の義なり。(三) 初二三地小劫を過ぎて無生忍を得るが故に此れ亦七地無生の義なり。(四) 種性云云種性は十住十行解行は十廻向なり。(五) 地前種性解行の上下を指す。(六) 三心 觀行の深心、至誠心、向心の三心にして三行亦同じ。

(二) 雙觀經の疏惠遠に云く、細分の九とは、前の上品の中に乃至(三)四地以去を名けて上上となし彼に生じて即ち無生忍を得るが故に、(三)初二三地を名けて上中となし、彼の國に生じ已りて一小劫を逕て無生法忍を得、乃至(四)種性解行を名けて上下と爲す、彼の國に生じ已りて三小劫を過ぎて百法明門を得、初地に住す、故に知んぬ、(五)地前なり、乃至文群疑論第六に云く細く九品を分たば、且く上品の三人は諸師の取捨多く同異あり、一師の云へ上品上生は四五六地の菩薩なり、上品中生は初二三地の菩薩なり、上品下生は地前三十心の菩薩なり、乃至一師の云く、上品上生は十信及び十信の前に能く(六)三心を發して能く三行を修するを取りて、悉く上品上生と名く、乃至所以に諸師此の三品を判するに高下不同なることは、無生法忍におひて經論に位を判すること或は下或は上なるを以てなり。仁王般若に説く、無生法忍は七八九地に在りといへり、諸論

(二) 忍位 第十の廻向の満心なり。

(三) 淨土論 此には出處を擧げて文を略せるなり。

の中には無生法忍は初地に在り、或は(二)忍位に在りと説けり、菩薩本業璣珞經には無生法忍は十住の位に在りと説けり、華嚴經には無生法忍は十信の位に在りと説けり、占察經には無生法忍は十信の前の凡夫位に在りと説けり、故に諸師各々一位に據り無生法忍を得上三品を分ち高下不同なりと。文

(三) 淨土論上迦才に云く。

三問 惡趣往生

論に云く、妙樂の土に往生することを得るが故にと。文意如何。

答ふ、如來の方便に依て佛土に生るゝことを明すとして、即ち妙樂の土に往生することを得るが故にと云ふ文の意なり。

問ふ、爾らば三惡趣の有情同じく往生淨土の義ある可しや。

答ふ、此の事論判なしと雖、三惡趣の衆生は淨土に往生すべきなり。

問ふ、答へ申す處明かならず、夫れ論には(一)趣向假人と云ひ、(二)經には若人專念と云ふ、是れ惡趣を簡ふにわらずや、何んぞ況んや所引の經文には、所修の善根を廻向して彼の世界に生せんと願求すれば、鬼畜等の類豈に廻願の心あらんや、尠らば答へ申す所明かならず審定して成し申す可きなり。

答ふ、本より答へ申す所、論家の解釋なしと雖も、餘處の判文を伺ふに、(三)或は三惡趣往生極樂と説き、(四)或は五趣中に於て悉く能く西方の淨業を修すれば、極樂に得生すと述ぶ、爰に知んぬ三惡趣の有情極樂に往生すと云ふ事を、但し御難に至りて

(一)論 釋論第十卷の九丁右裏承力得勝妙處門の下にあり。

(二)趣向 論に顯示趣向假人門といふ、竟は假人と言ふて五趣の衆生を衆生と言はざるが故に惡趣に通ぜずとす。
(三)經 譯論所引の經を指す、具門に引經證自所説門といふ、謂く若人と言ふて餘趣を人と言はざるなりと。
(四)或は云云 不空彌索經の灌頂眞言成就品の竟を取るなり。
(五)或は云云 群疑論。

(一)擧勝爲論 五趣中に人を擧ぐるは擧勝爲論なりと。
(二)所引の經文 阿彌陀經、無量壽經、瓔珞經等なり。

(三)孝養仁義 中品下生の行なり。
(四)依正二報 十三の定善中初め日三の定善より第七座の定善に至るは依報にして像觀より第十の定善に至るは正報とす。
(五)三心 云云 觀經上輩觀に上品上生を明し三心を示す、即ち至誠心、深心、迴向發願心なり。
(六)彼の 小乘 云云 四善根中の忍位已去三惡趣に於て非擇滅を得ることを指し、菩薩處胎經なり。

は(一)擧勝爲論して若人等といふか、次に(二)所引の經文に至りては六趣の衆生皆佛會に列て信受奉行の禮を作す、何ぞ廻願往生の義なからんや、此の如く成し申さば御難自ら遮せらるゝものか。

問ふ、成し申す所尙は然るべからず、觀經等の說相を聞きて淨土の業因を案するに、

(三)孝養仁義の行を致し、持戒修善の誠に依る、十三の定善は正しく(四)依正二報を觀じ、

(五)三念佛は専ら無漏の眞土を感じ、惡趣愚昧の有情、何ぞ此等の行相を致さん乎、

(六)彼の 小乘の見道尙は惡趣の依身之を簡ふ、況んや大乘善根の境豈に往生することを得んや。

答ふ、三惡趣の衆生は淨土に往生すべしと云ふ事、先の重に成し申すが如し。但し御難に至りては、無量壽觀經に説く、無量の諸天龍夜叉、佛所説を聞き皆大きに歡喜すと。文稱讚淨土經には聽法の衆の中に諸天八部阿修羅等ありと見へたり、既に聽法衆の爲に何ぞ願求の心なからんや、但し孝行持戒の難に至りては、群疑論に(七)經を引きて云く、化生の龍、八關齊戒を持するをもて乃至壽終の後皆阿彌陀佛の國に往生すべしと。文既に畜類持戒の行あり、孝養仁義の心何んぞ無からんや、又淨土論に云く、

り、知る可し、淨土の業因は無明の所發なりといふ事、余らば答へ申す所此の難を招ぐ分別に成し申せ。

答ふ、本より答へ申す所、往生淨土の業因は無明の所發にはあらざる可し、凡そ欣求淨土は出離生死の行業、上求菩提の用心なり、何ぞ輪廻の業因に同じて更に無明の所發の爲めならんや、何ぞ況んや極樂世界は、三界の出過するの淨土出世善根の所感なり、若し無明の所發と云はゞ豈に出世善根の所生と云はんや、中に就き、今の論の意は、五十一位悉く始覺淨智の修行なり、十信四四心の菩薩西方往生の業因を修む、尤も始覺智の所發にして無明の所起にあらざるべし。是を以て對法論に云く、業煩惱力の所生にあらざるが故に、業煩惱増上起にあらざるが故にと判せり。但し御難に至りては具惑凡夫の所修なりと雖、菩提心所起の善の故に無明所發にはあらざるなり。次に惠沼の釋に至りては二義の中に正義にあらざる故に依用すべからず、此の如く成し申さば諸難悉く遮せらるゝものか、過なしと答へ申す可きなり。

問ふ成し申す所尙ほ余るべからず、西方佛土の凡夫の往生は皆分段身なり、若し余らば分段の業因は専ら无明の所發なるべし、有漏業を因とし四住を縁となして分段身を

(二)今の論の意は、
釋論第三に五十一位
の分滿の始覺は實
に轉勝漸次の異も
なく亦究竟圓滿の
極もなし云云

(一)十善 仁王經
上の善十信を十善
品は對法論と成る。上
述べし業煩惱力の
所生にあらざるが
故に自受用の法身
の因に約して云ふ
なり。卷論第十
卷如來方便殊勝十
の吉藏云云。嘉
祥の觀經の疏に、
因果を論する文に
具釋あり。云
云。慈恩大師釋
あり。淨土義林に釋
あり。淨土云云。淨
土の受生は穢土の
分段に異る。この
淨報身報土の段に
釋論第三の論云云
し。凡夫人の下の
あり。無際大師下
の三斷位を明す下

受くるの誠説、異論なき故に、但し四心下品の所修は始覺淨智の所發なるべしとは、今の論の意は十信位は又生死の業因を造らざるにあらず、所以に十信の菩薩(一)十善等を修す、是れ輪王の業因にあらずや、若し爾らば設ひ始覺智を起し菩薩行を修すと雖も、又發業無明を起して生死の業を造するに何の過ぞや、次に(二)對法論の文に至りては自受用土の因に約すか、爾らば此の難如何が會し申すべきや。

答ふ、凡そ安養淨土の業因は諸師の解釋一准ならず、是非紛紜として勝負定め難し、然りと雖、今(三)論の意は諸佛如來の勝妙方便に依り他方淨土の種々の依正を念するの時、何ぞ忽ちに无明妄想の心念を起すべけんや。是を以て(四)吉藏法師の云く、別は則ち菩提心を以て業主となし餘善を縁となすと判せり。(五)慈恩大師は淨土の因とは一には善根に由り、二には大願に由り乃至世の有支の愛取の潤に資らるゝが如く、方に内外二土の果を感ずる故にと宣べたり。但し有漏の業因は四住をもて縁となすの經文に至りては、彼は穢土の分段に約す(六)淨土の受生は彼に異なるなり。次に十信の菩薩輪王の業を造すと云ふに至りては彼は權教の意が、(七)今の論は生死輪廻の業果は過患なりと覺知して更に後の念を止む、何ぞ生死の引業を造らんや、之に依りて(八)無際大師の

にあり。

(一)本論 釋論第七卷成就發心の下に具文あり。

釋に云く、能く未來に至るまで新業を起せずと判せり、次に十善を修すと云ふに至りては、第七卷の(一)本論の文に云く、業果報を信じて能く十善を起して、生死の苦を厭ひ無上菩提を求めんと欲すと。文既に無上菩提を欣ひ修する所の十善なる故に全く輪王の業因と成るべからず。次に對法論の文は自受用に約すと云ふ事然るべからず、慈恩大師彼の文を引きて善根大願の因縁に依るの義を成じ畢りて、佛土を生ずる義は惣相なり、余なりと雖も然も佛の四土の勝因各別なりと。文是れ惣して四土の因に通ず、何ぞ自受用の土に約すと云はんや、故に過なしと答へ申すべきなり。

(二)十二有支云云 群疑論第四の釋を指すものにして即ち次に引くものなり。

問ふ、答へ申す所尙明かならず、淨土の因果は(二)十二有支の所攝、欲色二界の分齊なり、之に依りて群疑論に云く、未だ欲の惑を離れずして淨土に往生するもの無明支と行支とは即ち是欲界なり、乃至若已に欲界の欲を離れて色界の心を得たるものは、十二有支は即ち色界の攝なり。文既に無明行の所感豈に煩惱の力に依らざらんや。(三)又潤生の義を釋するの時、現潤種潤二義不同なりと雖も、煩惱潤生の義決定せり、煩惱潤生決定せば無明の所發勿論なり、但し十信は新業を起さずと云ふ事思ひ難し、仁王經の中に十信を説きて云く、十善の菩薩大心を發し乃至上品十善の鐵輪王と。文是れ則

(三)又潤生云云 群疑論第四卷住生愛潤章に在り。

(二)緣起經 具題は分別緣起初勝法門經上下二卷支非の譯、本書に此の文なし。

(三)群疑論 第四に且釋あり。

ち十善の修因に依り鐵輪の報を得るにあらずや、今の論又彼の義を忘るべからず、故に慈行大師云く、謂く信滿に至りて能く斷盡すと判せり。加之(二)緣起經に云く、内法異生の福不動の業を起するに無明の所發と。文内法異生は是れ三乘の凡位なり、今論の十信内法異生の故に福不動の二業を造る何の過ぞ爾らば如何。

答ふ、凡そ無上佛果を欣求するに依て廻願往生の心念を起し、十六想觀を修し、淨土の依正を念するの時無明煩惱を起すべからざる道理極成せば、何ぞ必ずしも人師の解釋に拘せんや、況んや十二緣起の攝不攝は(三)群疑論に二釋を出す中の一の釋に云く、此の十二有支は三界に據りて説くが故に淨土に於て分明ならずと、文此の釋は道理に叶ふの上は出す所の難文依用す可からず、次に煩惱潤生の釋に至りては、凡そ淨土の受生は聖衆加被して心顛倒せず、彌陀來迎し大聖手を授け更に惡境なし、何ぞ煩惱を起して受生を潤すや、是を以て慈恩大師、世の有支愛取の潤に資らるゝの例證を引きて善根大願を以て因縁となして彼の土に生るゝの旨を成せり。次に十信新業の事先の重に成し申すが如し、生死を弃背して出離を樂求するの菩薩、何ぞ更に生死の業因を造すべけんや、小乗の凡位尙ほ(三)彼の業を造らず、何ぞ況んや大乘の十信に於てをや、

(三)彼の業 生死の引業なり。

て曰く、又大小乗の論に契經を引ききて罪と福と不動との三種の業ありと説けり、未だ知らず三種の業の中には何れの種業を用ひてか極樂國に往生することを得ると爲す、釋して曰く有が説かく三業の中に於て福業と及び不動業とを用ひて西方に生ずるなり、三福は即ち是れ福業なり、十六觀に若し上界の定心を得るは即ち不動業なり、有るが説かく三業の攝にあらず、三業は並に穢土の業に據りて説くを以て淨土に約して論ずるにはあらずるなり、故に淨土の業は三業にあらずるなりと。文(二)淨土義林に云く、佛地論及び攝大乘には皆言ふ勝れたる出世の善根に起さるといふ、唯し無漏の善根を説て因と爲す、是の如くの諸文不同なることありと雖乃至。對法に云く業煩惱力の所生にあらず、故に業煩惱増上起にあらずる故に、然も大願清淨善根の引發する所に由る、惣して之を言はゞ淨土の因は一は善根に由り、二は大願に由り若し善根を修せずんば佛土因なし、大願を發せずんば佛土縁なし、因縁具足して方に果を感ずる故に、世の有支愛取の潤に資けらるゝが如し、方に内外二土の果を感ずるが故に、乃至佛土の義を生ず、惣相余なりと雖、佛の四土の勝因は各別なり、謂く法性土云云。(三)了義燈第六に云く、内法異生の若し放逸及び不放逸の福不動を起すには、あらゆる無明は一には云く有覆な

(二)淨土義林法苑林第七佛土義を或は淨土義林といふ。

(三)了義燈古本は第八卷にあり、現流の本には第六の下に在り。

り信を依とするが故に、乃至内法異生の善趣の生を求むるは、彼の生死の苦を了すること能はずと雖、是れ生死に於て定信を起すが故に、又復知足淨土に生せんと求むるも亦是れ生死に於て定信あるに由るが故に、彼の無明を攝して是れ有覆性なり、一には云く若し放逸の者の福行を起さば有覆と不善とに通じて無明に發せらる、放逸の者は當に惡趣を感ずべし、經には唯彼の不放逸のものは非福行を造りて惡趣を感せずと説くが故に如何ぞ不善の無明を起して福行を發せざらん、乃至若し知足を求め佛を見んと希ふ等は即ち有覆をもて發す、此の釋を勝れたりとなすと。文(二)演秘第六に云く、問ふ、本業經の佛母品に云く、一切の善は佛果を受け無明は有爲生滅の果を受く、是の故に善の果は善の因より生ず、是の故に惡の果は惡の因より生ず、善は生滅の果を受けず、唯し常佛の果のみを受くと名くと云へり。論に云く、善惡俱に異熟を招くと云へり、豈に相違にあらずや、答ふ有が釋して云く、三界を感ずる業は、若しは善にまれ不善にまれ、皆無明に引かれたるを以て惣じて無明と名く、資糧等の道の有無滿の善は皆佛果に向ふ、無明の發するにあらずるを以て、惣じて名けて善となす、無明に發せられたる福等の三界を感せずと謂ふにはあらず。詳して曰く若し資糧道の有漏の

(二)演秘古本は第六卷にあるも今刊の本は第八卷なり。

道等。此の位 資糧

門なり、隨轉隨轉理
化他部の説に隨ふ
故に隨轉といふ。
正地部名く薩婆
多部より出たり。
無漏三有なり。
聖位。

此れ既に爾ら
すんば、自餘の煩
惱皆招くこと能は
ず。彼れ何ぞ則ち然ら
んや。異熟の果を感ず
るこそを許さずといふ
を指す。

善法は皆佛果に向ふといは、十王の果の業は何れの位に在りてか造せん、若し此の位にして彼の業を造すと許さば、云何ぞ皆佛果に向ふと言ふことを得ん、故に義に餘りあり、今者之を會するに略して二の釋を爲る、一には經は隨轉なり、化他部に隨ふ、化他部の言く、善は有の因にはあらずと、二には三乗の無漏と資糧加行の正位の漏の善とに據て遠と近と皆佛果の因と名くるなり、明を縁と爲るが故に無明の惑の本に引かれたる漏の善をば亦無明と名く、故に無明の三界の果を感ずと、斯れに由りて諸の餘の煩惱と及び餘の漏の善とは生滅の果を感ずと、若し也た文を執して餘の善が異熟の果を感ずることを許さずんば、亦文を取りて唯し一つの無明のみ能く漏の果を感じて自餘の煩惱は皆招くこと能はずといふべし、文の中に唯し無明のみ得と説くが故に、此れ既に余らずんば彼れ何ぞ則ち然らんや、故に知んぬ經論各一義に據ていふ並に相違にあらず。

四問

永離惡趣

論に云く、常に佛を見る故に永く惡趣を離ると。文意如何。
答ふ、善處不退の義を明し、常に佛を見る故に永く惡道を離ると云ふ文意なり。
問ふ、答へ成するに就き明かならず、夫れ極樂世界を思へば、寶池の側には鳧雁鴛鴦聲を交へ、樹林の間には共命舍利翹を調ぶ、既に惡趣の隨一なり、豈に雜類の畜衆にあらざらんや、余らば論の釋明かならず如何んが答へ申す可きか。
答ふ、本より答へ申す所は論の釋を任ず、但し難勢に至りては慈行大師は謂く淨土の中には實に惡道の名なしと。文阿彌陀經に説かく、皆是れ阿彌陀佛、法音をして宣流せしめんと欲して變化して作せし所なり。文實類の畜衆にあらずんば全く難を成すべからず、過なしと答へ申すべなきり。

教法無常

論に云く、三世も動せず四相も遷さずと。文余らば所學の教法を指すべしや。

經の寶池觀及像觀
の取意の文。小
阿彌陀經一文の
取意なり。一
身報同にして識異
なり。法華經には
命命鳥を翻す。
慈行大師云
惡名を離るとは實
に淨土の中は實
と惡道の名なし
と。惡道の名なし
句に是の諸の乘鳥
は皆之れと接續せ
り。論に云く云
門とは依所學教法
の位下品の衆生信
は甚深無極の大衆
習一切諸佛に師と
世も動せず云。

(一)性根云云俱
舍頌疏界品一に餘
の諸蘊を攝する名
相を辨じて不文の
頌あり。

(二)上の論釋論
の第八の信法精進
修行門の下の拔抄
の文なり。
(三)深密云云今
の論の中に法身と
色形と能所依と爲
つて平等不二なる
義を明すといふ。

答ふ、所學の教法を指すといふべし。

問ふ、答へ申す旨思へ難し、夫れ教法は是れ色行二蘊の所攝有爲無常の法體なり、之に依りて(一)性相釋に云く、牟尼の法蘊を説くに、數八十千あり、彼の體は語なり或は名なり、此れ色行蘊の攝なり、若し余らば何ぞ三世不動等と云ふ可しや。

答ふ、本より答へ成する所は、歸依所學教法門とは、と標して述する所の釋義は尤も所學教法の義相と云ふべし、但し難に至りては、今の論の意は小乘に異なるの謂か、之に依りて(二)上の論に云く、三世の諸佛自の恩師と爲して生滅すること能はず、不動の軌則なりと。文況んや今の論は(三)深密の義を校する故に色塵の文字尙ほ法尔常住の義を存するなり。

五問

身體明白

(一)論に云く、心海澄淨身體明白と。文意如何、答ふ、往生人の行相を明して、心海澄淨身體明白なりと云文意なり。

問ふ、今之に付きて四十八願の隨一を案するに、設し我れ佛を得たらんに國中の人天、悉く眞金色たらずんば正覺を取らずと。文何ぞ眞金の經文に違して身體明白と云はんや。

答ふ、明白とは未だ必ずしも白色ならざるか、是れ則ち清淨の義なり、故に依抄へに正清しと云ふ、此の意なり。

稱名念佛

(二)論に云く、謂く意を專にして佛を念する因縁を以てと。文余らば稱名念佛と云ふ可しや。

答ふ、一義に依らば爾か云ふ可きなり。

(一)論云云釋論
第十に得善處定不
退門を明す下に彼
の淨土に生ぜし行
者の行相を明せる
文なり。

(二)論に云く釋
論第十卷七丁の左
真。

（二）論釋云云釋
論第十卷九丁の右
裏。

問ふ、答へ成するに就き（二）論釋を開くに、謂く專注の意をもて他方淨土の種種の依正を憶念すと。文何ぞ稱名と云はんや。
答ふ、善導の釋の中に六字四中に攝して依正に在りと。文六字の名號は依正二報を攝する故に更に相違なし。

國譯釋摩訶衍論廣短冊 終

國譯釋論名目私抄

印融之を記す

目録

- 釋論造者の事。 釋論譯者の事。 起信論造者の事。
- 起信論譯者の事。 釋論眞言所學の事。 五分惣釋の事。
- 因緣分八因緣の事。 三定聚の事。 立義分三十三法の事。
- 立義分本文注の事。 解釋分惣目數量の事。 解釋分四法の事。
- 解釋分三門大科の事。 二所入十名の事。 眞如門十名の事。
- 生滅門十名の事。 二所入三異二同の事。 二門七異一同の事。
- 五種言說の事。 二種名字の事。 十種心量の事。
- 二門分別三門分別の事。 十如來藏の事。 四無爲通別二牀の事。
- 四無爲通別二用の事。 五有爲通別二體の事。 五有爲通別二用の事。
- 十阿闍梨耶識の事。 四無爲名義の事。 五有爲名義の事。

又迹を龍猛と名くるは、大龍の念なれども、雲雨無邊にして種種の趣に隨て雨す所各異なり、○此の菩薩も亦復是の如し、○無縁の大慈を發し、雲普く平等一味の法兩を灑ぐ、○猛とは勇猛精進の義なり。文

一釋論譯者の事

問ふ、此の論は何れの三藏の翻譯なるや。答ふ、此の論の序に云く、弘始三年歲次星紀^{子の}九月の上日を以て、大莊嚴寺に於て、親り筆削を受け、敬て斯の論を譯す、直ちに翻譯せし人は、筏提摩多三藏なり。文是則ち筏提摩多三藏の所譯なりと見へたり。問ふ、彼の三藏は餘の經論翻譯の義見へず、爾らば釋論一部のみ譯する如何。答ふ、此の論一部のみ翻譯す、例せば佛陀波利三藏は唯だ尊勝陀羅尼一部のみ譯するか、此の外其の例非一なり、但し通法の疏に依らば、起信論をも譯すと見へたり、此の事與に之を書すべし。

一起信論造者の事

○彼の云云傳
○大師守護上
○釋論に七失
○其の中に翻
○了賢の師決
○四十七丁に
○七失を會す
○不分明の失
○る中に此の
○回答あり。○
○佛陀波利云
○通論十四に
○在り。

○弘始三年日
○本仁王十八
○帝の二年な
○り。

○其の中に論
○の四丁左表
○の十丁右參
○照。

○聖法 聖法の
○撰者の釋論
○記一卷

○論一 論一の
○十一丁右表

問ふ、起信論は何の菩薩の所造ぞや。答ふ、馬鳴菩薩の所造なり。此の菩薩は九十部の花文論十部の攝義論を造す。○其の中に起信論は十部の攝義論の隨一なり。問ふ、此の菩薩何れの時に出世したまふや。○答ふ、六時に出現したまふ、所謂る如來在世に二時、如來滅後に四時なり。問ふ、其の六時の方如何ん。答ふ、一には如來成道十七日の時に出現す。此は勝頂王經に見へたり、二には如來入涅槃の時に出現す、此は大乘本法經に見へたり、三には滅後一百餘歳の時に出現す、此は摩尼清淨經に見へたり、四には滅後三百餘歳の時に出現す、此は變化功德經に見へたり、五には滅後六百歳の時に出現す、此は摩訶摩耶經に見へたり、六には滅後八百歳の時に出現す、此は常德三昧經に説けり。問ふ、六時出現の中には、起信論は何れの時の所造ぞ。答ふ、之に付きて異説あり、智愷の起信論の序には、六百歳の出現の時に造すと。云云○聖法の記には一百餘歳の時に造作すと。云云此れ一の所論なり。問ふ、馬鳴の本迹如何ん。答ふ、○論一に云く、馬鳴菩薩は若し其の本に尅すれば大光明佛なり、若し其の因を論すれば、第八地の内、住位の菩薩なり、西天に誕生す。文

縁の名言は機教に通すべし、何んぞ偏に機根を因縁と名くるや。答ふ、惣則別名か。

第二立義分 三十三の法門を建立す。

(一)論 論一の十
九丁左裏。如意寶珠
の二、六丁右に云
く、金翅鳥心海に
入り如意寶珠とな
る。
(二)一切の云云
十六所入法及び十
六能入の諸法にい
ふ。

(一)論に云く、(二)如意寶珠は是れ一なりと雖も、一切諸寶の根本たり、摩訶衍の法は、唯し是れ一なりと雖も、(三)一切の諸法の根本たり。摩訶衍の法は唯し是れ一と雖、恒沙の法門の體性たり、重威の大龍の乃し受用する所、利根の智者の乃し領解する所なることを顯示せんと欲ふが爲めの故に第二に立義分を立つ。文

此の中に如意寶珠とは、所入の法譬なり、一切の諸寶の恒沙の法門とは能入の教法の法譬なり、重威の大龍と利根の智者とは能入の機根の法譬なり。但し摩訶衍法と云ふにつきて異義あり、(四)疏に云く、然るに如意珠は但し兩重の所入の十六に喩ふ、況んや不二にあらず、不二の體は唯是れ果海にして根宜を離るを以ての故に、教説に離るが故にと。文此の意は十六所入のみを指すと。(五)鈔に云く、論の意正しくは唯所入の十六にして不二を兼ぬ、此の不二を立義分に於て別して分明に建立する文なきを以ての故にと。文此の意は正しくは所入の十六兼ては不二と取

(四)疏 法教の疏
三卷あり。

(五)鈔 通玄鈔四
卷慈行の撰著。

るなり。記に云く摩訶衍の法は雖唯等とは謂く不二の法は而も三十二種の恒沙の法門の體性たり、是れ衆乘の通所依たるを以ての故に。此の意は摩訶衍の法は不二果海恒沙法門の三十二の因分と取る是れ則ち正義なり。

第三解釋分 (一)二法二門を釋す。

(一)二法云云此
の五分の惣釋は諸
論に通すべし、今
論者は起信論の五
分に約して爾か云
ふ。
(二)論 十九丁左
裏。

(二)論に云く、摩尼寶藏は無量の高寶を備ふと雖も、而れども千重の門を開きて群龍に了知せしむる所なり、大乘の本法に無邊の千義を圓すと雖も、而れども別釋散説して鈍根に分明ならしむるところなることを顯示せんと欲ふが爲めの故に第三に解釋分を立つ。

此の解釋の法譬の相待上に准すべし、譬説の摩尼の寶藏は無量の高寶を備ふと雖もとの法説の大乗本法の、無邊の千義を圓すと雖とは上の立義分を指す、譬説の而れども千重の門を開きて群龍に了知せしむる所なりと、法説の而れども別釋散説して鈍根に分明ならしむる所なりとは解釋分の正釋なり、群龍とは小龍なり。大乘の本法の言に付きて異義あり、記の意は通別を分て、通所依は不二、別所依は後重の四法なりと。云云鈔の意は大乘の本法とは、十六所入無邊千義の十六能入

なりと。云云疏の意は又之に同じ、其に付て立義分を利根となし、解釋分を鈍根とすることは一往の分別なり。再論の日は立・解・二分共に利鈍あるべし、真如生滅次の如く利鈍なる故に。

第四修行信心分

(一)論に云く論の二十丁右表。
(二)隔檀。近直門隔檀なり。
(三)如意寶藏。十六所入因分なり。
(四)廣略。廣は解釋、略は立義。
(五)加行。聞思の加行。
(六)堅固。眞生二門の堅固の信修なり。
(七)法界法藏。所入摩訶衍也。

(一)論に云く、眼耳の中に寶雨の妙術を見聞し、思心の中に無盡の圓徳を解知すと雖、而も舌威を出現するのみにして、競ふて門に入り、往向を開通すれども(二)隔檀に近かざれば、(三)如意寶藏を得て臺宮に祭るに由しなく、口語の中に教義の尊辭を誦持し思心の中に(四)廣略の深理を觀察すと雖も、(五)加行を勧め、勝進を添へしこと、金剛に方べて(六)堅固の信を起さなければ、(七)法界寶藏を得て玄理に契ふに由しなきことを顯示せんと欲ふが爲めの故に第四に修行信心分を立つ。又

此は修行信心分の釋なり、此の中に於て初は譬說、後は合法なり、譬說の中に於て始は上を承來し、而も出現以下は正釋なり。譬の意の小龍は如意寶珠の所在並びに寶を雨らす徳用を見聞すと雖、彼の寶珠を直に得ざるが如く、立解二分に於て廣略の法を觀察すと雖、修行を用ゐざれば所入に到らざるに譬ふるなり。舌威を

(一)記師。普觀の著記六卷あり、記師は普觀を云ふ。

(二)疏。疏は法教、抄は慈行なり。

のみ出現とは、此の句、上下に未定なり、右の點の意は承來に屬す、是は(一)記師の義なり、意は舌威をば出現すれども二門に入らざれば如意珠を得すと云ふ意なり。左の點は正釋に屬す、是は(二)疏、抄の兩師の義なり、意は舌威を出現せざるなり。競て門に入り、往向を開通すれども隔檀に近かざれば、右點は二門時立の義なり、此の時は門に入りとは二門の惣句なり、左點は權より實に入るの義なり、門に入るとは真如門なり。意ろ生滅を開通すれども真如に入らざれば、所入の玄理を得ずと言ふ義なり。如意寶藏とは二法惣して所入の一心なり。臺宮とは寶臺宮殿なり。寶珠の所在なり。雖口語中等とは以下は合釋なり。廣畧とは、一義には廣の立義の三十三略の解釋の四法なり、一義には廣は解釋の文、廣略は立義の文略なり、加行を勧め勝進を添へしこと金剛に方らべて堅固の信を起さなければ(左の點に讀めば、加行を勧め、勝進を添ふることに、金剛に方ふれども堅固の信を起さなければ)は右の點は二門時立の義なり、加行勝進は生滅、金剛に方ふは真如なるが故に、左點は權より實に入るの義なり、意は生滅を勝進すること真如に方ふれども、真如の堅固の心を起さなければ所入に到らざるの故の義なり。

第五勸修利益分

論の廿一
法弱の法
鈍根の法
略説の法
立義の法
進修の法
能はざるが
鈍根の法
衆生類の
勸請の縁
佛菩薩の

論に云く、廣略の法を開き、進入の門を示すと雖も、^(一)法弱の衆生は廣説の法門を聞いて、進んで修行するに堪へざるが故に、鈍根の衆生は^(二)略説の法門を聞きて解すること能はざるが故に^(三)厭離の心を生ず、かくの如く等の^(四)衆生類は、若し^(五)勸請の縁に値ふときは、漸々に進修して、百行の因を備へ萬徳の果に至る、若し^(六)勸策の縁に値はざれば、彌々遠退して恒沙の煩惱と將^(七)んじて無性に及びなん。馬鳴菩薩この利を見玉ふが故に利益を顯示して修行を勸請す、この故に後に勸修利益分を立つ。

此は第五分の釋なり、中に於て廣略等とは、疏、記、兩師の意は、廣は立義、略は解釋、進入は修行分なりと。云云抄師の意は廣は解釋、略は立義、進入は修行分なりと。云云怯弱は鈍根に限らず、退き易き衆生なり、鈍根は解了小さき衆生なり。勸請の縁とは今は佛菩薩衆生勸進して佛道に入れしむる義なり。百行の因とは實には無量なれども滿數に約するなり。恒沙煩惱とは一種の無明より次第に生長して無量の煩惱となるなり。無性とは是れ闍提の人なり、法相の意は、闍提に於て、

斷善闍提、大悲闍提、無性闍提の三種を立つる中に、無性闍提とは、理佛性を具すと雖も、行佛性なき衆生なり。問ふ、無性有情は永く成佛せざるの義は權門の意なり、實教大乘に於て此の義あるべからず、爾らば何ぞ此の如く釋したまふや。答ふ、此は衆生引入の方便なり、謂く彌陀遠退の佛性を廢せば、佛果を勸請したまふ言を成すべからず、實には爾るべからざるなり。

一因緣分論
一の廿一丁右表
本書三十二頁。

一因緣分の八因緣の事

本に曰く、是の因緣に八種あり、云何んが八となす。
一つには因緣惣相、所謂る衆生をして一切の苦を離れ、究竟の樂を得しめんがためなり、世間の名利恭敬を求むるに非ざるが故に。
二つには、如來の根本の義を解釋して、諸の衆生をして正解不謬ならしめんと欲ふが爲めの故に。
三つには善根成就の衆生をして、摩訶衍の法に於て堪忍して信心を不退ならしめんがための故に。

四つには善根微少の衆生をして、信心を修習せしめんがための故に。
五つには方便を示して悪業障を消し、善くその心を護つて癡慢を遠離し、邪網を出さしめんがための故に。

六つには止觀を修習することを示して、凡夫二乗の心過を對治せしめんがための故に。
七つには專念の方便を示して佛前に生じ、必定して信心を退せざらしめんがための故に。

八つには利益を示して、修行を勧めんが爲めの故に。

論じて曰く、是の八因縁の中に、初の一つは、立義分の爲めに正因縁と作る。次の二つは解釋分の爲めに正因縁と作る。次の四は修行信心分の爲めに正因縁と作る。後の一つは勸修利益分の爲めに正因縁と作る。文

以上は惣釋なり以下は別釋なり。

論に曰く。

(一) 因縁惣相とは、惣して能化教法出興門を擧ぐ、謂く八種の根本惣體の爲めに(二) 正因縁と作る、故に因縁惣といふ、(三) 二十四種の分別別相の爲めに正因縁と言ふ、(四) 三十

(一) 因縁惣論一の廿二丁左裏。衆生は正因縁なるなり。
(二) 二十四種前及び後重の十六能入及び後重所入の八法をいふ。
(三) 三十二種云云。惣は八種の根本、二十四の前及後重の能入の十六法なり。

二種の惣別の法相は立義分の中に自ら當に顯說すべし。

第二の因縁は、如來根本の義を解釋してとは、惣して能化教法出興門を擧ぐ。謂くこの因縁は、能く顯示正義と對治邪執との爲めに、正因縁と作るが故に。

第三の因縁は、分別發趣道相の爲めに正因縁となる、是を名けて能化教法出興門と爲す。

第四の因縁は、修行信心分の四種の信心、四種の修行の爲めに正因縁と作る、是を名けて能化教法出興門と爲す。

第五の因縁は、修行信心分の進門の爲に終り、復次に若し人信心を修行すと雖より、乃至諸障を免るゝことを得ん、善根増長のゆえにといふ文の爲めに正因縁と作る、是を名けて能化教法出興門と爲す。

第六の因縁に、修習止觀と言ふは、總じて能化教法出興門を擧ぐ、謂く修行信心分の修行止觀門の爲めに正因縁と作るが故に。

第七の因縁は、修行信心分の終りの、復次に衆生初めて是の法を學びしより、乃至畢竟して生を得て正定聚に住す、といふ文の爲めに正因縁と作る、是を能化教法出興門

と爲す。

第八の因縁は、勸修利益分の爲に正因縁と作る、是を能化教法出興門と爲す。文

問ふ、正因縁とは如何ん、答ふ、一義に云く、機教相應の義を正と爲す、必ず兼正の義にはわらず、是れ即ち正等覺と云はんが如し。一義に云く、是れ傍正の義なり、謂く立義に三定聚の機ありと雖も、利根を正機と爲す、其餘は解釋等を下すが如し。

一 三定聚の事

正 說

- 一 邪定聚 十信の前を邪定聚と名く、六趣と二乘とあり。此に於て十億八萬六千種の衆生これあり。
 - 二 不定聚 十信なり、三十種の衆生之に在り、一位に入住出を分つ故に。
 - 三 正定聚 三賢及び十地なり、此に於て百二十種の衆生これあり、位に入住出の三種を分つ故に。
- 一 說
- 一 邪定聚 十信の前を並びに十住心とあり、(一)皆根なきが故に。
 - 二 不定聚 三賢及び十地となり、皆未だ究竟せざるが故に。
 - 三 正定聚 無上覺の果なり、已に満足するが故に。

一 邪定聚 十信の前なり、樂求の心なきが故に。

二 不定聚 十信及び三賢なり、未だ正證を得ざるが故に。

三 正定聚 十地なり、已に眞理證を得るが故に。

以上三說の中に、初說を以て之を用ふべし、論に云く、是を名けて三となす。馬鳴菩薩は彼の初門を須ふと。文

一 立義分三十三法門の事

(一)論に云く、三十三種あり、十六所入の法と、十六能入の門と、及び不二と別なるが故にと。文

果分、機根を離れたるが故に不動本原論、甚深玄理論の所釋なり。能攝大乘即ち眞言の果佛なり。

不二摩訶衍

性徳 四海

前重 因分機に應するが故に、説に順するが故に (二)根本摩訶衍

心法根本摩訶衍中八種を開く故に。一體一心摩訶衍

國譯釋論名目私抄

(一)論に云く、左表、頌文なり。

(二)根本摩訶衍者、立義分の摩訶衍、惣に當ることを指す、本と稱するは、本と稱するに不二を、除きて外に自餘の門法、此を以て根、本と稱するは、前重の所入は未だ法義の心體相用を、分かつたす、但だ根、本大乘とす、云へり。

（二）惣別云云正
てしく總の字を用ひ
本法に屬す。八重八種

摩訶衍の（二）三字は惣體を開き牒するが故に十七大乘なり。然るに惣の字を以て前重の八法と爲る文の起盡と義を取るなり。謂く（二）惣別の四句分別の時は、前重の所入は唯惣非別の故に。云云抄の意は前重の八法と而も惣の字に於て、文に對し義に約して狭より寛に之くに三義を釋す。一には文に約すれば前重の八法なり。二には義に付き後重の所入に通ず。三には又義に就き唯し三十三種の能詮に局ると。云云學者の了簡には抄の三義共に非なり、何れも文に付きて意得べし。云云それに付きて立義分の文に不二を説くかのこと、末の師多分は不二を説かず。云云之に依て立義分の法數に三十三を擧ることは、義具に約して文には建立せずと義を取る。此の時は摩訶衍行者惣とは、前重の八法、説くに二種あり等とは、前門に言ふ所の法とは以下は後重の門法なる故に不二の説處之れなきなり。學者の義には不二を説くと。云云之に付て、一義には摩訶衍者惣の處に、不二惣と前重の八法惣にをば並びに意得べし。云云一義には、今の摩訶衍者惣とは是れ不二大乘なり、此の位は大丘の惣體の如し、此れを一法二義を説き分けて、前重の門が領すれば所入の八法と成る、此の方を取り所入根本惣體門と科す。譬へば惣の大虛に於て且らく東西別空を分つが如し、是の故に因分の機の領せざ

る惣體の摩訶衍者惣なりは不二の果分なり。其の上は今摩訶衍者惣と條する處は上の開惣體なり、彼既に並及び不二と云ふ、彼を受けて釋するに今何ぞ不二を除かんや、末師等は顯綱の執見ケツミに依る故なり。

説に二種あり、云何んが二となす、一には法、二には義、上の摩訶衍の惣體を開説するには法・義の二種あり。法は一心、義は三大義なり。凡そ摩訶衍者惣は前重の所入なり、彼を別説せば説に八種ありと云ふべし。然れども前重は略説なる故に二種と云ふなり。今此の四句の文に就て、疏・抄の異義なり、抄意は前重の門と取る、意は摩訶衍者惣の前重の所入、説に二種あり等の四句は前門なり、此の前門の一法二義を條して、言ふ所の法とは等と釋すれば後重門法と成るなり。之に依りて一には法、二には義とは、已説初重を結前し、言ふ所の法とは以下を第二重と科す。爾らば一法二義は前門に限る義分明なり。疏の意は今此の四句の文は前重の門と後重の法とを通説す、一法二義の名字は前門後法同しけれども、前門は所作の眞俗二諦、後法は能作の第一義諦なり。但し言ふ所の法とは等の條文は、本より四句の文に兩重貫通する中に後法の方を條して釋するなりと。云云其のれに付きて今此四句の文は、末論消釋を關るに三師の異

義あり。抄の意は四句の文は偏に前門なり、此の前門の事の上の文前問答は一心法界及び三大義等と釋す、八門名字既に顯たり。又下の八法の名字を列ねて、皆能入に従て其の名を建立すと釋す、此の上下兩處前門の名字分明なるが故に繁を恐れて重ねて釋を作らず。云云疏の意は此の四句の文に前門と後法とを合說す、一邊に屬し難き故に且く釋を開きたまふ。云云記の意は今此の四句の文は後重の惣表と成る。又前重の釋成と成るが故に一邊に屬し難し、仍て解釋なし。云云

言ふ所の法とは、謂く衆生の心なり、以上は前重以下は後重なり、此の下に、言ふ所の法とはより、自體相用の故に到るまで、當論所釋の一心の下は四法を釋し、言ふ所の義とは以下は餘論所釋の三大義の各の四法を擧ぐるなり。其れに付き言ふ所の法とは謂く衆生心せば、論に本法所依決定門と科す、意は所入の本法は衆生の心なりと決定するなり。

是の心に則ち一切世間の法と出世間の法とを攝す。論に根本攝末分齊門と科す。意は所入根本の一心に能入の末義を攝するなり、是の心とは所入の一心なり、一切世間出世間は次の如く生滅真如の二の能入なり、其に付て高祖五不二を立て玉ふ時、後

一切世間とは、
問は三出と
りは三出と
は彼の三出と
一切法と縁と
如平等不變と
す。高祖五不
攝大體性五大
前重根本摩訶
の二法不三心
は體大の二法
四には相大の
不二。五には
の不二。

重一心を能攝と名くることは今の是の心則と之を攝すの文に依るなり。能攝の不二所攝は二門なり、之を思ふべし。又世間出世相望重重なり、今は生滅を世間となし真如を出世とする義の通なり、二の卷の能入門の十名に見へたり。

此の心に依て摩訶衍の義を顯示す、論に二種摩訶衍を科する門なり。此の心に依りて二門の顯示摩訶衍は二法なり。今は法の方を取りて科名を立つるなり。其れに付て此の門に依るとは、(一)末論の御釋の如きは、上の是の心は所入、今の此の心は二種の門なり。此は次ぎ上の世間出世の法を義に約して此の心を指すと。何を以ての故に是の門の真如相は則ち摩訶衍體を示すが故に、是の門の生滅因縁相は能く摩訶衍の自體相用を示すが故に、此の一段に付て、一義も一心の下の一段の文に三の大科を立つる時、

此の心に依りてより自體相用までは、惣して第三の門なり、此の中に初の二句は正釋、何を以ての故に以下は餘義を釋す、故に徵問の言ばを置きて上の義を釋成するなり。一義には一心の下の釋段に於て、初は略說なり、何を以ての故に以下は廣說なり、其の故に解釋分に今の一段の文を條し釋する時略廣の二段あり、初の略說段には、言ふ所の法とは乃至を受け摩訶衍の義の文を顯示す、一心法に依りて二種の門あり等とは、

(一)末論云云
論に是の心を釋して
云く、是れ一法界
心總して二種門を
攝すと。

(一)上下二轉、論
 滅の第三にあり、段
 の大科を擧ぐるに依り
 は初めに能依るに別
 初に明にす二あり
 相に淨同異なり、後
 云ふべし。異なり、後
 には三對六重、一
 因縁、二には本應對
 末編、二に三に編對
 上下、上對の因縁は
 生滅、生滅の因縁
 餘義か或は生滅の中
 生一法義の釋す
 章梨耶二義の釋す
 生一切論なり。釋す
 るか論なり。釋す

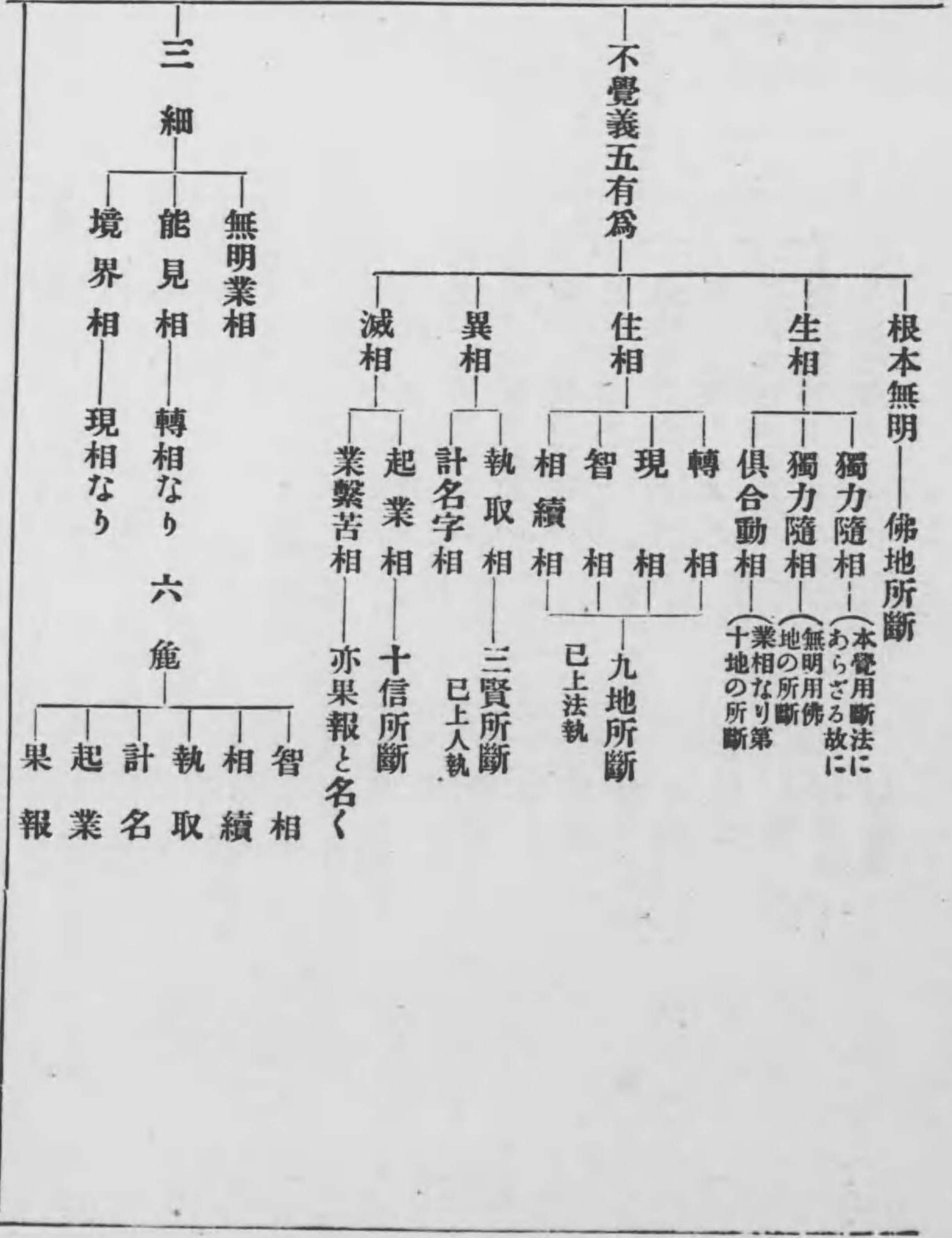
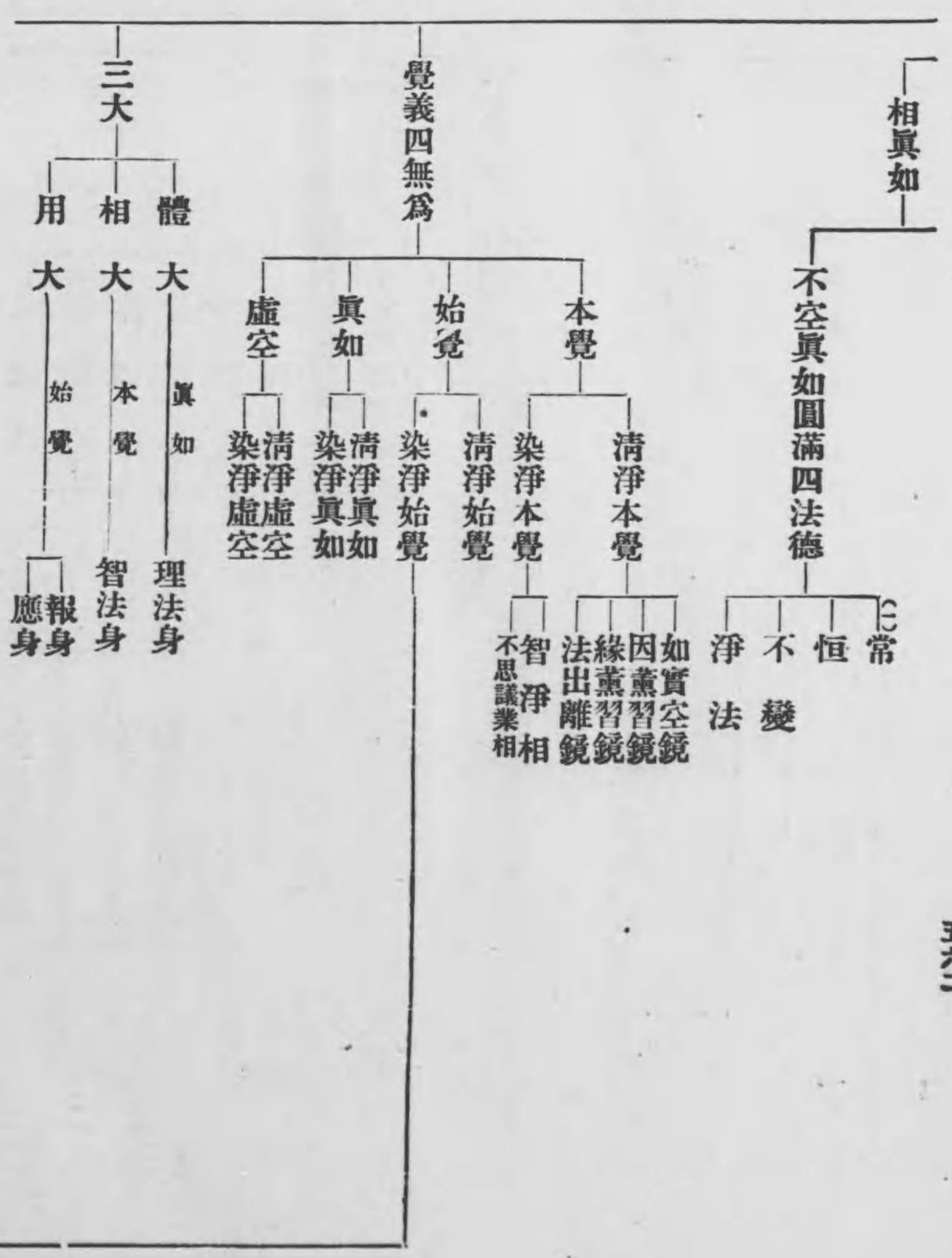
後の廣說段に此の心眞如相等の文を受けて、心眞如とは○心生滅等と釋する故に既に略廣二段明かなり、立解二分の略說廣說一具なるべきが故に。云云其に付て今此の一段の文に、是の心は眞如の相、則ち摩訶衍の體を示すが故に眞如門なり。此の中に摩訶衍の三字は所入その餘は能入なり、是の心と云ふも能入なり、眞如相の相は則ち義相にして、體相相望の相には非ず、下の體字は三大の中の體大にあらざるが如し、是の心は生滅因縁の相、能く摩訶衍の自體相用を示すが故には生滅門なり。此の中に摩訶衍の三字は所入その餘は能入なり、初め是の心生滅とは顯示正義の中、二の卷に生滅の廣說段の初より四の卷の上半に隨染幻差別染幻差別に至るまで之を釋する故に、末論に上より以來、本分を釋する中、是の心生滅の字句已ると結前せり。此の一段に於て生滅門の(一)上下二轉あり。又覺義、不覺義の二種あり、因縁とは四の卷の下半に、復次に生滅因縁とは所謂る衆生は心意意識に依りて轉すが故にと條釋す。此の中に(二)三對六重の因縁ある相とは、五の卷の初に、復次に分別生滅相とは等と條釋す。此の中に龜細二種の生滅あり、此の次に一眞三妄の四法熏生の釋段あり、此の(三)熏生の段は三章の餘儀なるかは論なり。自體相用とは、六の卷に之を釋す、此の三大は生滅に限るか、

眞如に通ずるかは一の論なり。生滅門の三大とは眞如を體大となし、本覺を相大と爲し、報應二身を用大と爲るなり。

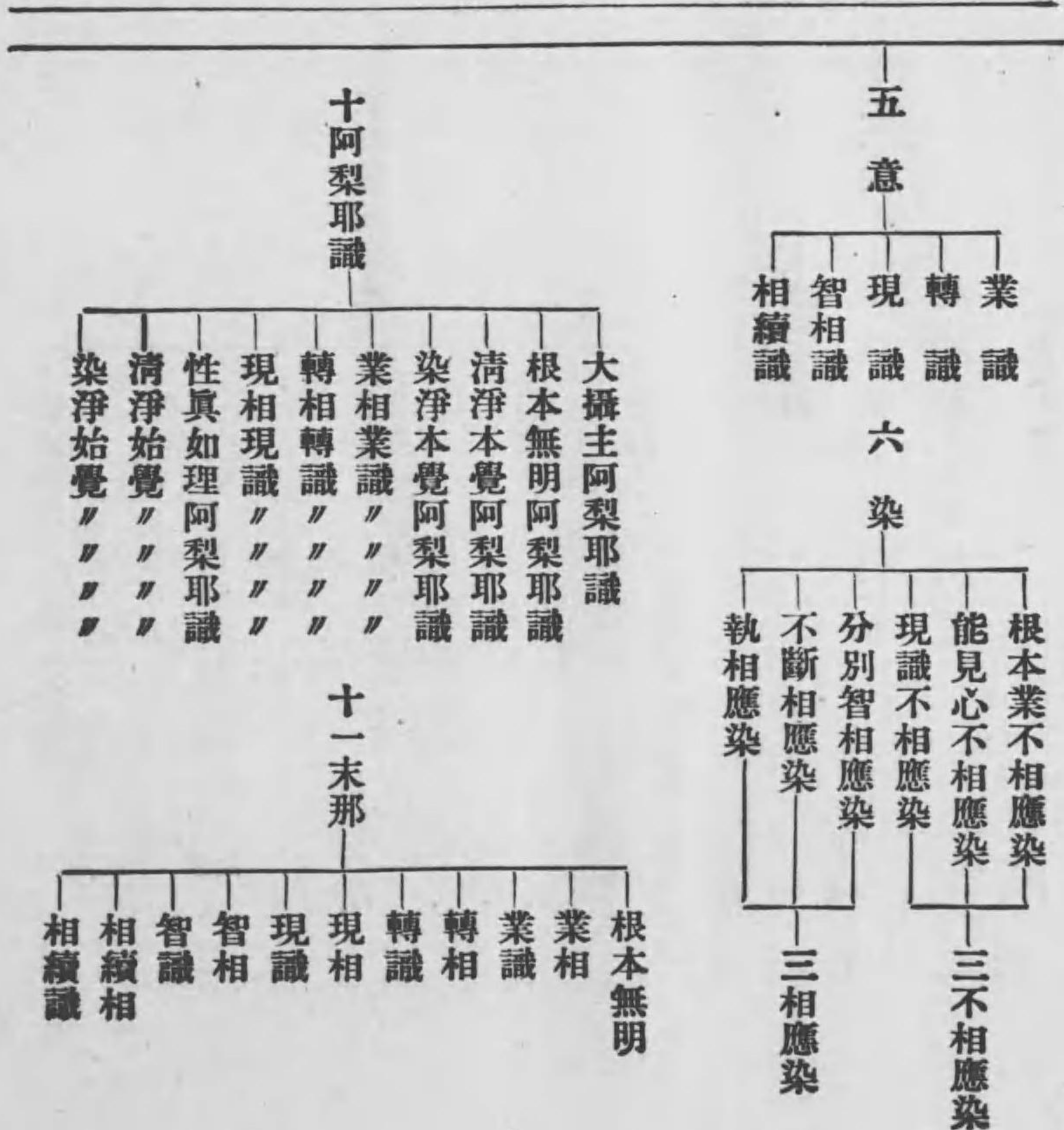
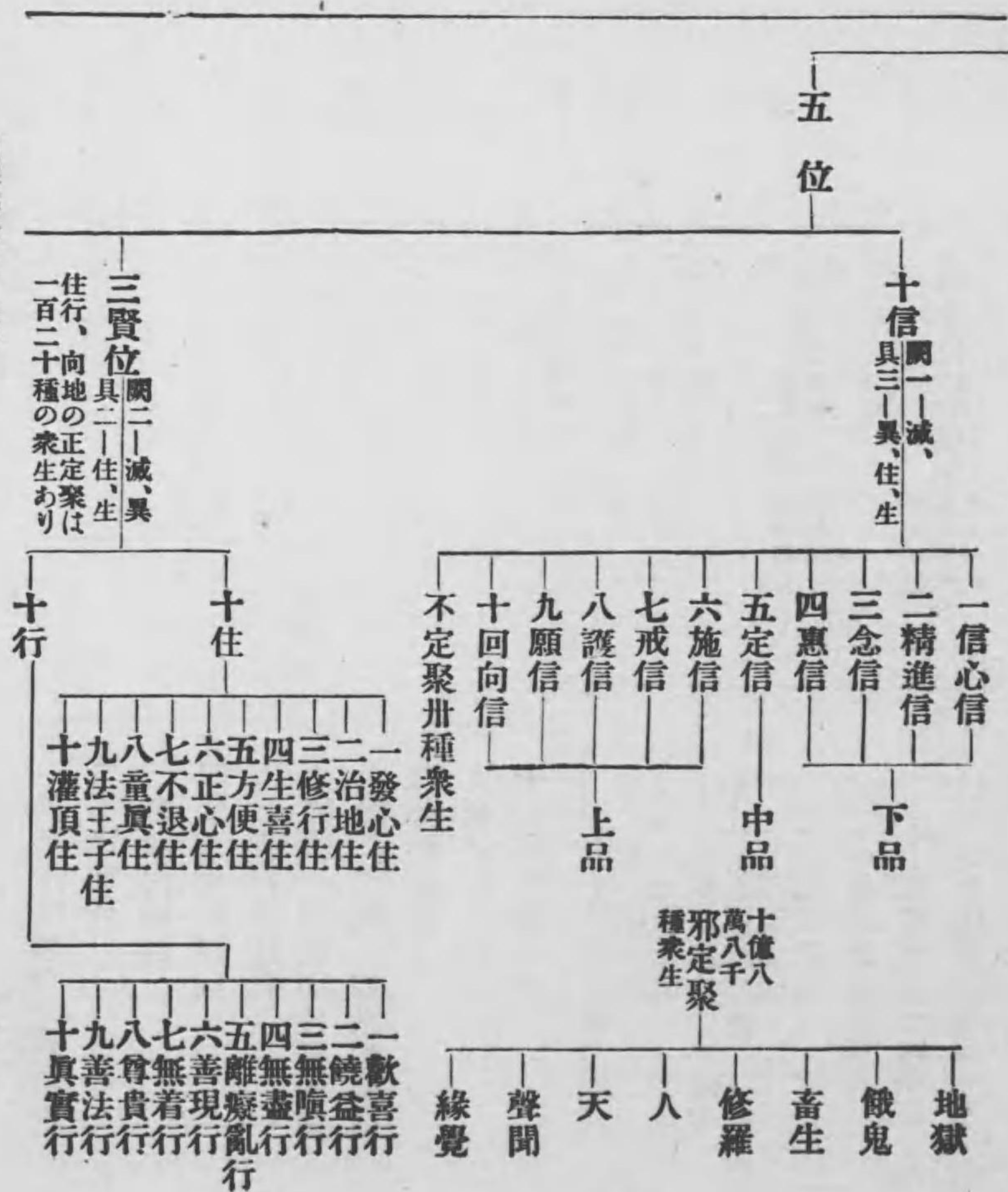
言ふ所の義とは則ち三種あり、云何んが三となす、此は上の二は義を條釋す、前門後法の事、三師の異義等上の如し、それに付て義に於て境界名義と道理名義の二種あり、今此の三大は衆生の心品に於て三大の義門差別するを義と名くる故に境界名義なり。凡そ三大に於て、重重あり、生滅門の三大は六の卷に之れ在り、眞如門の三大は二の卷に之を釋す、合論の三大は四の卷の同相異相門なり。所入の三大は當段分明なり。此の外に不二門・三大は兩部大經所說の六大四曼三密なり、其の形た皆別なり。一には體大、謂く一切の法と眞如平等との不増減の故に、體大は眞・生・二所入なり。一切法とは生滅門なり、生滅門は眞妄染淨諸法無量無邊の故に一切法と云ふなり。眞如平等は眞如門なり、眞如門は即ち一理平等の故なり、不増減の故は二門に通ずるなり、それに付きて前重には無量無邊諸法差別不増不減、體大摩訶衍等とは體大の言を列ねて(一)終りに置きて門の名となす、今後重の時は體大の言を初めに置きて二種の所入と爲す、慈行の前門を開きて後法と爲る義に符順する所なり。

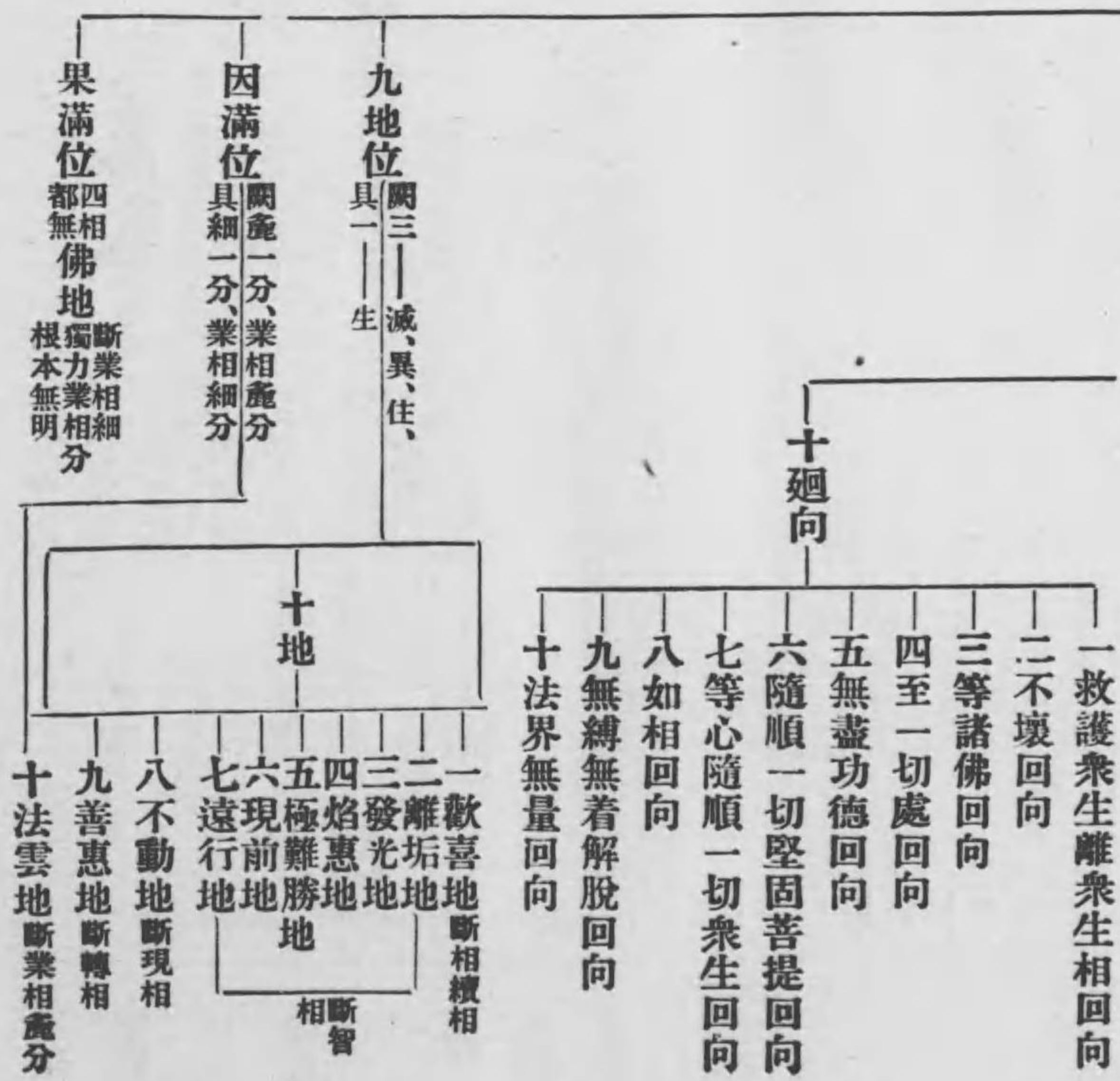
(一)終りに置
 りに置く故に門
 の名を謂ふにはあ
 らず。

(一) 常云云常は
 常徳恒は樂徳は
 不變は我の徳は
 反易苦を離れ業所
 繋にあらず自在
 なるを以ての故
 なる淨法さば淨徳
 なる此の相配は
 なる。此の相配は
 香象の疏に依る。



國譯釋論名目私抄

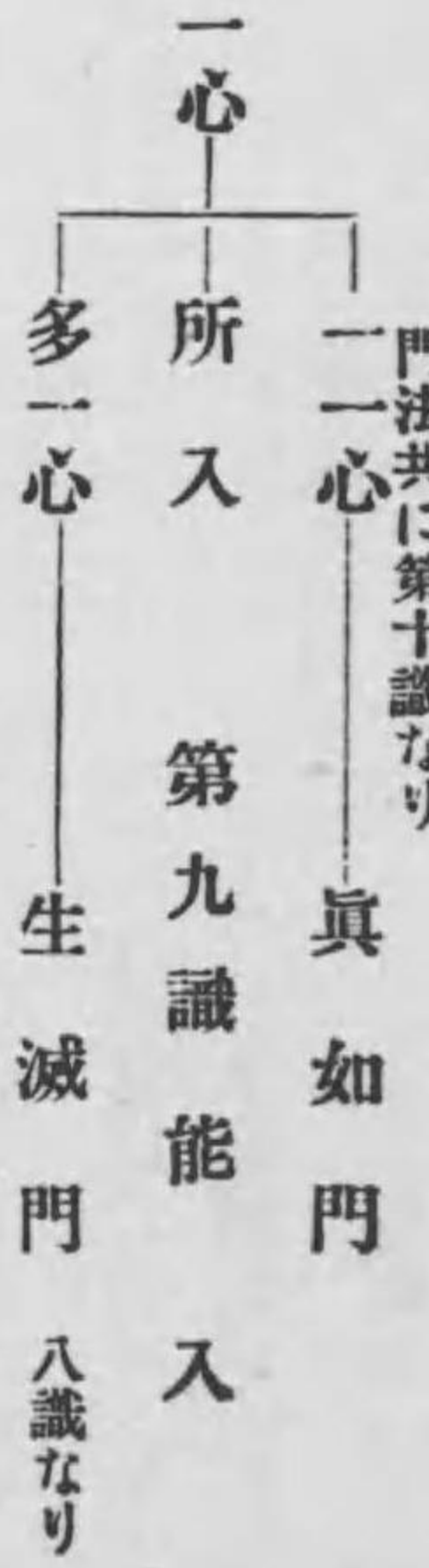




二〇本論 釋論第
二の二丁左表、
本書五十八頁。

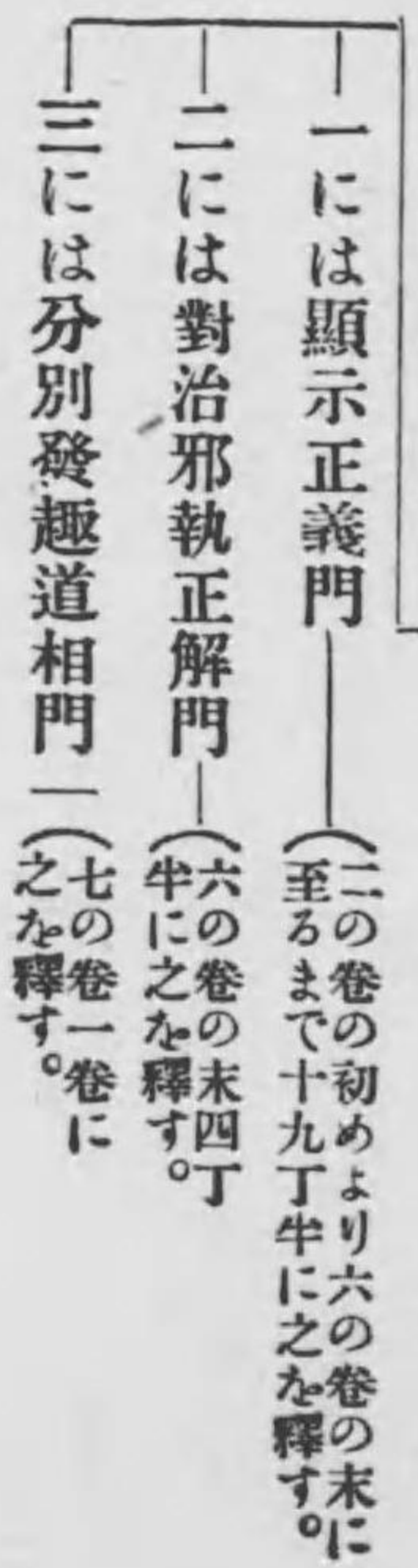
一 解釋の四法の事

門法共に第十識なり



二〇本論に曰く、顯示正義とは、一心法に依りて二種の門あり、云何んが二とするならば、一には心眞如門、二には心生滅門なり。云云
末論に云く、四種の法相門を建立すと。文

一 解釋大科三門の事



國譯釋論名目私抄

一二所入十名の事

- 廣大神王に二つ
 - 一には鳩那耶神王金山に住して一向に吉祥神衆を出す、眞如の所入なり、以下爾なり。
 - 二には遮毗佉羅神王大海の中に住して遍通して一切種種吉祥神衆と通患神衆を出生す、生滅所入なり、以下爾かなり。
- 二には大虚空王に二つ
 - 一には空に自在なる空王空容受を以て自在となす。
 - 二には色に自在なる空王色容受を以て自在となす。
- 三には出生龍王に二つ
 - 一には光明を出生する龍王淨光明を以て宮殿となし、淨光明を以て相身となし、淨光明を以て從衆となす、其の頭邊より澄水を出生し、其の尾末に風水を出生する龍王其の頭邊より澄水を出生し、其の尾末に風水を出生する龍王より、標風を出生し、水風は則ち淨法染法なり。
 - 二には金主如意唯し淨法の金剛をのみ出生す。
- 四には如意珠藏に二つ
 - 一には滿主如意染淨の善不善の物を出生す。
 - 二には白毫方等唯天像をのみ現前し。
- 五には方等に二つ
 - 一には亂色方等通して五趣を現前す。
 - 二には遠轉遠縛如來藏唯し覺者のみあり、唯し如如のみあり、流轉の因を離る、慮知の縛を離れて一日に白なり。
- 六には如來藏に二つ
 - 一には婆伽婆俱舍といふ善不善の因となりし苦樂を受く、因と俱に若し生じ、若し滅すること伎兒の如くなるが故に
 - 二には純白一法界空種無礙たること空劫の長の時如し。
- 七には一法界に二つ
 - 一には無盡一法界種種無礙なること住劫の長時の如くなるが故に。

(二)標風 記二に云く梵語即ち風名なり。或は毘藍とも旋蓋とも云ふ、並びに迅猛を翻す。

(一)眞如門云云 論二八丁の右表。

一〇眞如門十名の事

- 一には如來藏門雜亂なきが故に。
- 二には不二平等門差別なきが故に。
- 三には一道清淨門異岐なきが故に。
- 四には不起不動門作業を離れたるが故に。
- 五には無斷無縛門治障なきが故に。
- 六には無去無來門上下なきが故に。

國譯釋論名目私抄

- 八には摩訶衍に二つ
 - 一には體摩訶衍諸法一林平漢には大乘といふ
 - 二には三自摩訶衍諸法自體自相自用差別の故に。
- 九には中實に二つ
 - 一には等住中實若し眞如に依れば異を同する珠の如し。
 - 二には別住中實若し生滅に依れば異を同する珠の如し。
- 十には一心に二つ
 - 一には是一是一心第一の一心は所作に隨て名を立つ。
 - 二には是一是二心第二の心一は能作に隨つて名を立つ。

- 七には出世間門——四相なきが故に。
- 八には寂滅寂靜門——徃向なきが故に。
- 九には大惣相門——別相なきが故に。
- 十には真如門——虚偽なきが故に。

(一) 生滅門 論の
二八丁左裏。

(一) 生滅門十名の事

- 一には藏識門——一切染淨の法を攝持するが故に。
- 二には如來藏門——如來法身の體を覆藏するが故に。
- 三には起動門——相續して業を作すが故に。
- 四には有斷有縛門——治障あるが故に。
- 五には有去有來門——上下あるが故に。
- 六には多相分異門——染淨之法は恒沙に過たるが故に。
- 七には世間門——四相と俱に轉するが故に。
- 八には流轉還滅門——生死及び涅槃に具足するが故に。

- 九には相待俱成門——自成の法なきが故に。
- 十には生滅門——無常の相を表するが故に。

一二所入三異二同の事

(二) 三異 論の
九丁右裏。

(二) 三異

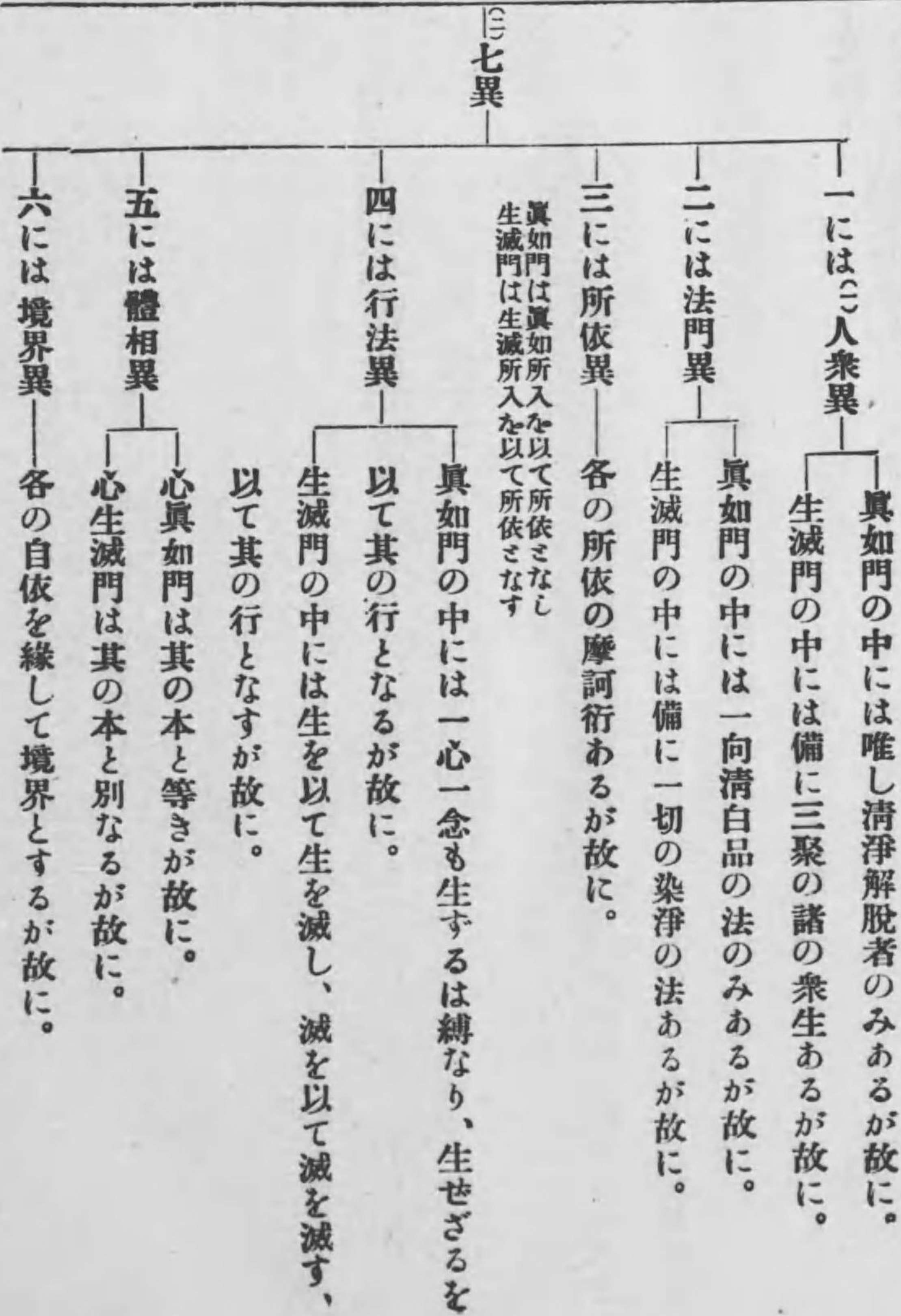
- 一には依異——各の所依の摩訶衍ある故に。後重の一體摩訶衍は前重の一體摩訶衍を以て所依と爲すなり、後重の三自摩訶衍は前重の三自摩訶衍を以て所依と爲すなり。
- 二には門異——各其の能入の門差別の故に其の義知り易し。
- 三には境異——各の自依を緣して境界となる故に。真如所入は自の所入を緣じ、或は自の能入門を緣じて所緣の境と爲る、生滅所入亦た以て此の如し。

- 二同
 - 一には遍同——法界に周遍して其の量等きが故に。
 - 二には名同——十種の名字二法に通ずるが故に。

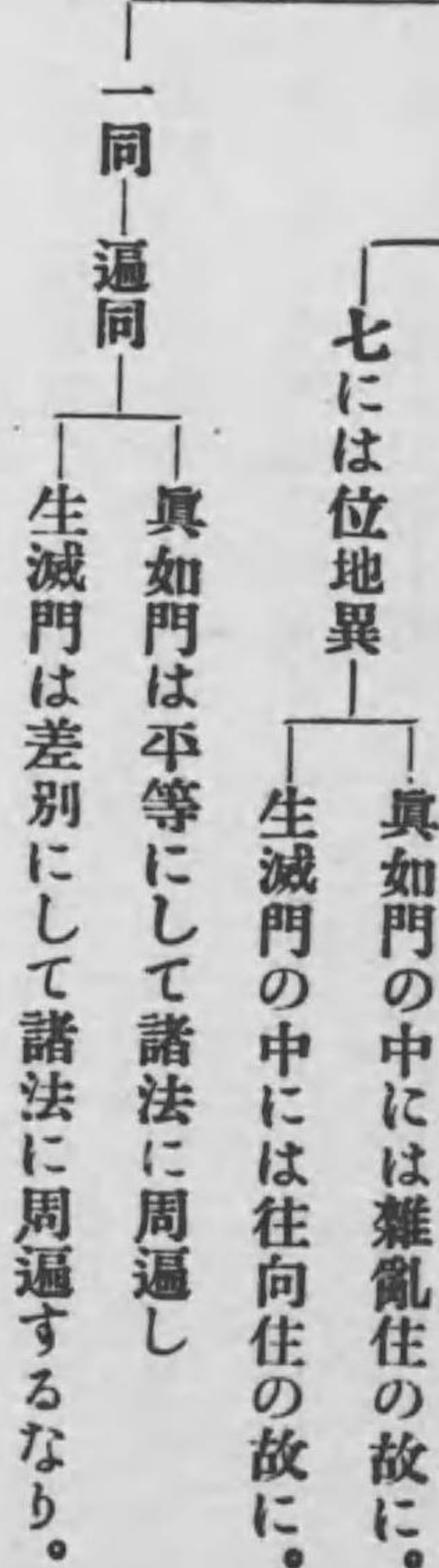
二門七異一同の事

(一) 人衆異 人衆の中に眞如門の中には染相盡きるが故に一切皆如なり唯し清淨解脱のみあり

(二) 七異 論の二九丁左表



眞如門は自門を縁じ、或は自の所入を縁じて境界と爲す、生滅門亦以て此の如し。



一(一)五種言説の事

(一) 五種の言説 論の二の十三丁左 真。楞伽 十卷楞伽。

一には相言説、(二) 楞伽經に云く、相言説とは所謂る色等の諸相に執着して生ず。文鈔に云く、自ら妄りに愛憎を以て遂に色に妍醜ありと計して言語を發するなり。文記に云く、相が言説なり、境に従て名を立つ。文私に云く、色等の諸相とは六道凡夫の執着する處の五塵の相なり。

二には夢言説、經に云く、夢言説とは本受用虛妄の境界を念じて夢み覺め已りて、虛妄の境界に依て不實なりと知て生ず。文鈔に云く、謂く睡り覺むるに従て、夢境の無性なりと雖も、而も妄りに吉凶を謂ふて言説を發生す。文記に云く、其の時昔

説文字に依りて起る、これを俗諦の相と云ふ、眞諦法性理を如實の義と云ふ、是れ則ち眞俗相望の難問なり。佛の言はく等以下は如來の答なり、此の答説の中に生説佛説の二種あるなり。生に在りて説く故にとは、鈔の意は在は隨在の義、生は人執の義と釋す、是れ衆生の義にあらず。不可説と説くとは、右の點（不可説と説くと訓す）は此の一句を生説に屬す。左の點（不可説を説くをと訓す）は佛説なり。我が所説とは等は、以下の一般に於て廣略の二重あること抄の釋に見へたり、其れに付きて今此の生佛二説に三重の相望あるべし。先づ（二）九界の説を妄語となし、佛界を義語となす、而らば生滅門の中の法門なり。次に二門相對して之を論ずる時、生説は生滅門、佛説は眞如門なり。次に顯密相望の時は生説は顯、佛説は密なり。それに付き大師處處の御釋に、前の四を以て生滅となし顯となし、第五を以て眞如と爲し密となしたまふ。爾らば顯乘至極の佛果にも四種の言説を用ふ可しや、答ふ爾なり。先づ相言説は色等の執着に於ては六道に限らず、廣く九界に亘り、乃至顯教至極の佛果をも此の中に攝すべし、是の故に今此の色等の相に於て善惡漏無漏等の重重意得べし。次の夢言説に於ても又淺深あるべし。彼の本性經には釋尊自ら我

（二）九界云云
滅門の佛は眞如義
を用ゆるかは一の
算題なり。

（二）花嚴云云
嚴之談演義抄一十
四丁の語なり。

が説法を、昔の夢を語ると説きたまへり。第三執着言説をば又は妄執言説と名く、一代の所説皆方便虛妄の説なり。之に依りて聲字義の意は、眞妄の言説を以て顯密の佛身の言説を爲すと見へたり。第四の無始言説とは無始の熏習善惡に通ず可き故に、顯乘の因果相感三祇成佛等は皆此の分齊なり。仍て生滅門の顯乘の佛果等皆前四言説の分齊なる可きなり。問ふ、何に事に第五の如義語を以て眞言の言説とするや。答ふ、如義語とは字義に約する言説なり、一字に無量の字を具し、一聲に無量の聲を具し、一義に無量の義を具する故に、此の字義をば顯乘には一向之を談せざるなり。隨て（二）花嚴の人師は理は圓なれども言は偏なり、言生すれば理喪すと判じて至極の玄理には言説を許さざるなり。言説は間斷無常の法なる故に。云云 眞言宗には如義語を談する故に。大師の二教論には、唯し自性法身のみ有して、如義眞實の言を以て、能く是の絶離の境界を説きたまふ、是を眞言秘教と名くと。文此れ則ち如如の言説圓圓の説法なり、全く偏にあらざる故に義語と云ふなり、前四の言説は文語なり、文語とは偏に文字言語の字相のみに約して字義を知らざるなり。字義を知らざれば是れ妄語なり。其れに付て其の後の一言説は眞理を談することを得、

眞理を、(二)末師等は眞如無相の眞理と取るなり、(三)高祖の御意は眞言眞實理と。云云
仍て五種の言説を以て顯密對辨の證據としたまふなり。

一 (三) 二種名字の事

生滅門なり

一には(四)字字名と依聲字となり、先づ字字名とは、所引の楞伽經に云く、名身とは所謂諸字に從へて名差別なり、(五)阿字より乃至訶字を名けて名身と爲す。文名身とは名句文の三身を立つる其の中に名身あるなり。身に於て體・依・聚・あり、今は聚の義を取る、阿とは摩多の初を擧げ、呵とは體文の終りを擧ぐるなり、マニヤン曼曼の二字は重子の故に之を除く。次に依聲字とは楞伽經に云く、字身とは謂く聲の長短と音韻高下とを名けて字身と爲すと。文聲は體、音韻は用なり。

二には字影名と依空字となり。先づ字影名とは、所引の道品經に云く、(六)鏡中の共説を名けて顯影名と爲すと云ふが故に。文鏡中の共説に付て、抄に云く眞は鏡のごとし、名は影に似たり。故に大抄に云く、師資説聽共に一鏡に對するが如し、則ち其の字なり。文此の意は眞理の外に名なきを鏡の外に影なきに喩ふるなり。頼瑜の義

(二)末師云云
師俱に眞理を談ず
ることを得る理を
別釋するの文なし
故に此の言の總意
を據て此の言を作
すなり。
(三)高祖の御意、
此亦密じて眞門を
以て密さす御釋
を指すなり。
(四)二種名字論
の二の十四丁左表
及裏なり。
(五)先づ字字名論に
は先づ二種の名を
明し、後に二種の
字を明す。字字名
の字を成する故に
り。
(六)阿字より云
云諸經の次列に
異りあり、今阿を
始となし、阿を終
となす、兩部大經
等此に同ふす。
(七)鏡中云云、眞
心は大明鏡の如し
諸佛の身説悉く眞
に於て現して同音
説に宣示す。故に共

に云く、鏡の面に對して言説を出せり、鏡中の影像本質に同じて言説を出す、故に共説と云ふ、然れども全く言説を聞くことなし、是れ則ち出世の無相の字義を知らざれば、法身説法の名句を聞かざる故に彼に喩ふるなり。南山の學者の一義には、鏡中に阿呵等の諸字を浮と雖、互に差別なきを眞如無礙の法門に喩ふ。云云次に依空字とは所引の大海經に云く、云何んが名けて虚空輪字と爲すとならば、譬へば虚空の中に飛ぶ鳥の明曜を踰ふる時、十種の和聲を出すが如く、虚空輪字も是の如く觀すべし。文聖法の記に云く、飛鳥の一び明曜を喩ふる時、十塵相觸るゝとき微音を出す故に、彼の一塵に於て各の一音を取る故に、十種の和聲を出すといふ。文意は光曜の中に飛ぶ鳥の光中に於て聲を出す時、鳥の體は見へざれども、其の聲必ず十塵に相觸れて平等眞如の法體は無相なるを虚空の光に譬へ、眞如の文字の平等なるを鳥の音へに譬ふ。十種の和聲とは四味と四大と身報と聲塵との十塵和合して聲を生ずる事なり。論に云く、是の如くの二が中、各の初の一種は甚深の眞理を詮表すること能はず、次の後の一種は眞理を詮することを得と。文各の初の一種とは、字字名と依聲字となり。此は生滅門の名字にして眞理を詮せざるなり。各の後の一

見取、邊見、邪見、五鈍疑の五なり。唯識第九に具文あり。唯識第六に相續するかの一の算題なり。

種とは字影名と依空字となり。此は眞如門の名字にして眞理を詮するなり。

一の心量十種の事

- 一には眼識心——眼根を以て所依となして色塵の境を緣するなり。
 - 二には耳識心——耳根を以て所依となして聲塵の境を緣するなり。
 - 三には鼻識心——鼻根を以て所依となして香塵の境を緣するなり。
 - 四には舌識心——舌根を以て所依となして味塵の境を緣するなり。
 - 五には身識心——身根を以て所依となして觸塵の境を緣するなり。
 - 六には意識心——第七識を以て所依となして法塵の境を緣するなり。
- 意識に於て五俱と五同と并に獨頭と觸散との重重之れあり、別抄の如し。凡そ法相意は意識十を具すと釋して、五判五鈍の煩惱相應す。此の十煩惱は人法二執に通ずる故に第六意識は、人法二執相應すと談するなり。當論の意は異相品の執取と計名との惑相應す、此は人執品の惑なり、仍て當論の第六識相應惑品は、偏へに、人執と之を定む。

識論第六に云く、唯識と相應する何の識には全くなし。

七には末那識心——此の識は第八識を所依とし外塵を緣するなり。

法相の意は但藏識の見分を緣じ餘にはあらず、第七識は偏へに第八識の見分を緣じて餘を緣せずと定む。當論の意は末那の位の中に始めて慧數ありて塵を分別するを智相識と名くと御釋ありて、第七末那に於て始めて愛不愛の念を起して外塵を緣すと見たり、但し末那内境を緣するが一の論なり、又法相の意は第七識には我癡・我見・我愛・我慢の四煩惱相應す、此も人法二執に通ずるなり。當論の意は、智相・相續の二種の法執相應す。但し相續相の六・七・二識の相應は一の論なり。問ふ、末那此には意と翻す、爾らば六・七・二識の差別如何ん。答ふ、名同義別なり。謂く第七末那には能生・依止の二徳あり、是れ則ち第七は能生所依、第六は所生能依なり。是の故に第七をば意即ち識と意得、第六をば意が識と意得べきなり。是は依主・持業の不同なり。

八には阿梨耶識心——阿梨耶は此に含藏と翻す、義翻に執持識と云ふなり。法相の意は、八識全無と釋して相應の惑品なし。當論の意は業・轉・現・三細相應すと定むるなり。以上は生滅門の能入分齊なり。

九には多一識心——多は門なり、一は所入なり、門に於ては有爲無爲の染淨の諸法衆多なるが故に多といふ。此の第九識は生滅所入なり、それに付きて、彼の天台・華嚴には九識を建立するは當論の第九識に同じきに似たり、然りと雖も、彼の第九庵摩羅識を此には無垢識とも翻じ、或は本覺識とも翻じ、又眞如の妙理ともいふ。此は當論の八識門の中の染淨本覺の理に當る故に、實には彼の九識の分齊は當論の九識には及ばざる一邊これあるなり。

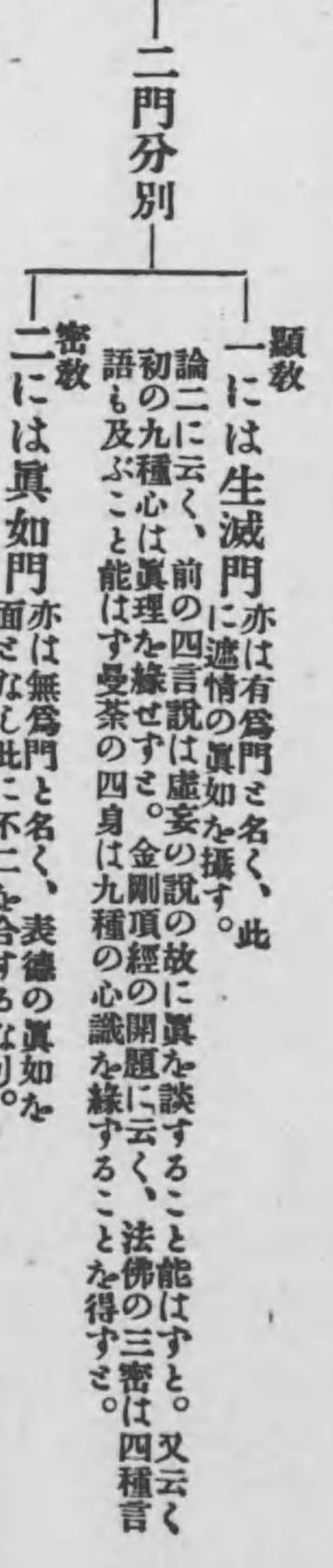
十には一一心識——此に於て遮情・表徳の二義あり、遮情の邊は顯乘なり、此の時の一一心識とは、能所入共に一識の上に建立して、一味平等の所緣なる故に表徳の邊は密乘なり。此の時の一一心識は、一は非一の一、無數を一となすの一なり。之に付きて甚深の宗義之れ在り。問へ、法相の意は心・意・識の三は其體各別なり。謂く心は第八識、意は第七識、識は第六識なり。今何ぞ心識を一處に擧げて十識各の心識の名を立つるか。答ふ、法相の意は諸識體別の故に心・識各別なり。當論の意は諸識體一の故に識即ち心、心即ち識なり、仍て増數の十識の時、第六意識に諸識を攝し、乃至第八識に諸識を攝する義之れあり。又論の四

二門云云具
二門三門の
顯密分別と云ふべ
し。

に云く、阿梨耶は即ち摩耶、摩耶は即ち阿梨耶、意識は即摩耶、摩耶は即ち意識等にしてと。

論に云く、是の如き十が中に初の九種の心は眞理を緣せず、後の一種心は眞理を緣じて而も境界となることを得と。文 此の文を以て大師顯密對辨の證據としたまふなり。

二門分別三門分別の事



論の二に云く、後の一言説は如實の説なるが故に眞理を談するを得と。文 又云く、後の一種心は眞理を緣するを得と。文 二教論に云く、唯し自性法身のみ有して如義眞實言を以て能く是の絶離の境界を説きたまふ、是れを眞言秘教と名くと。文 取勝王經の開題に云く、不二の理は甚深にして解し難くして、一如の趣秘奥にして入り

叵し、所謂る不二一如豈に遮二詮一の名ならんや、密號名字知らずんばあるべからずと。文問ふ、二門分別其の本據如何ん。答ふ、金剛般若の開題に云く、有爲とは三自の法、無爲とは一如の法なり。三自門の中に染淨、清淨一法界、三自、の四種の本覺あり、一如門の中に恒沙佛徳を具す、圓滿海の中に無量の徳あり。文二教論に云く、五種の言説、十種の心識の論文を引き了りて言語心量等の離不離の義は、此の論に明かに説けり。顯學の智者詳かにして迷を解くと。文此等の御釋分明なり。

三門分別
一には生滅門顯教常の如し
二には眞如門密教遮情の眞如を面となす。
三には不二門密教已上は三十二の修行修因海なり。
此は不二性徳圓滿海なり。

問ふ、三門分別の本據如何ん。答ふ、論の第一の卷の(一)得不得問答是れ又金剛頂經の開題に云く、九種の心量の所縁にあらず、一一心の所縁のみ、又一一心の所縁にあらず、不二心の所證のみ。文

(一)得不得云云
論一に云く、是の摩訶衍の法は諸佛に得するや、能く諸を得ずや、能くは得ずや、不なるか故にと。

(二)十如云云
論二の廿丁左裏。

一〇十如來藏事

如來藏とは隱覆藏の義なり。

(一)一清一滿は遠轉を釋し、一滿は遠轉を釋す。
(二)惑因 惑の因は(根本)果(枝末)の因(本覺)は果(始覺)なり。
(三)一白一上 下の一は即ち覺者、下の二は即ち如如、既に唯有と云ふ故に、一と名くるなり。
(四)與行云云 上に出す所の所入十名の第六なり。

一には大惣持如來藏。盡く一切如來藏を攝するが故に、此の第一の如來藏に就きて、抄には云く、第一は惣、餘の九は別云云疏には前重の根本摩訶衍と取るなり。記には不二藏と取るなり。仍て疏と記の二義を望めて一の論なり、不二と答ふるなり。
二には遠轉遠縛如來藏。(一)一清一滿の故に、此は眞如所入なり。一清一滿とは一味清淨圓滿なり。眞如所入は(二)惑因覺因なく、惑果覺果なきが故に(三)一白一上なり。
三には(四)與行與相如來藏。流轉に力を與へ、法身如來を覆藏せしむる故に此は生滅所入なり。與行與相とは、疏には正釋或釋の兩釋なり。正釋の意は惑に力を與へ行となす、遷流の義の故に。覺に力を與へ相と爲す、相とは眞實體の故に。云云 或釋の意は覺に力を與へ行と爲す、清淨行の故に。惑に力を與へ相と爲す、開鈍相の故に。云云 流轉に力を與へとは、記の意は、惑に力を與へ染法に限ると取る。抄の意は流轉とは生滅の異名なるが故に、惑に力を與へ覺に力を與ふに通ずと取る可しと。云云
四には眞如眞如來藏。唯し如如のみあるが故に、此は眞如能入門なり。眞如眞如は一義には初の眞如は眞如門の惣名、後の眞如は正しく眞如の法體なり。云云 一義には體相、二には如と。云云 其れに就て大師處處に重如の月殿とも釋し、雙如の一心と

(二) 生滅 此は生滅門の如理なり。

(三) 空如來藏 滅門の佛の一切染法なり。記の二に云く如來を覆藏すれば復名を覆藏すなり。空即ち是れ爲故にと。

(四) 不空云云 此は生滅門の淨法なり。所攝の淨法にて名を立つ。如來即ち不空なり。如來即ち出現せざるが故に。

(五) 能攝云云 此の藏の體は本覺の佛性を取る。

も御釋ある本説は、當段の釋に依る、爾らば如如の重言兩部の法體なり。

五には(二)生滅眞如如來藏不生不滅にして生滅が染を被るが故に、此は生滅門の中の四無爲隨一の眞如なり。生滅とは生滅門の惣名なり。眞如は四無爲隨一の眞如なり。不生不滅とは無爲なり、生滅とは有爲なり、上の生滅は有爲無爲の通名、今の生滅は有爲の別名なり、下の不生不滅と生滅と和合等の意ろ爾なり。

六には(三)空如來藏。一切の諸空は如來を覆藏する故に、此は能隱覆の諸法を如來藏と立つるなり。一切諸空とは一切染法なり。下の問答釋に、何の義を以ての故に一切染法を惣じて名けて空と爲す。所謂る一切の染法は幻化の差別なり、體相無實にして作用非眞なり、故に名けて空と爲す。文

七には(四)不空如來藏。一切の不空は空が染を被るが故に、此は所隱覆の淨法、如來藏と立つるなり、隨て下の問答釋に何の義を以ての故に、一切の淨法を惣じて不空と名くる。所謂る一切の淨法は自體中實にして作用勝妙にして虛假を遠離し、巧偽を超越す、故に不空と名く。文

八には(五)能攝如來藏。無明藏の中の自性淨心は、能く一切の諸の功德を攝するが故

に。文 此は三大中に於て能攝は體大、所攝は相用二大なり。此は淨法の中に於て能所を分つ、是の故に下の釋に従能所淨と結ぶなり。無明藏とは能攝體大の所在を擧ぐるなり。自性淨心とは體大なり。一切諸功德とは相用なり。

九には(二)所攝如來藏。一切の染法と無明地藏を既に乃ち出離したまへり。圓滿覺者の所攝なるが故に、此は染淨始覺なり。今此の所攝名字に就て、慈行の意は上の空

と不空も、今の八九の能攝所攝も俱に相對の義となす。意は第八の體文を能攝となるに對して、今の染淨始覺は用大なる故に所攝と名くと。云但し此の義は非なり、今必ず八九相對の名にあらず、當段の中に於て、始覺の佛果を能攝と爲す、無明染

法と所攝となす、此の所攝の方を名とするなり。論釋余が見へたり、一切の染法とは所生の枝末の無明なり。無明地藏とは能生の根本無明なり。圓滿覺者とは始覺なり。其れに付きて始覺の佛果に無明を斷じて佛果に至る、而るに所斷無明を以て所攝とせん事一往意得難し。然れども還同本覺の時も、體性清淨實に是れ功德と照すが故に余か云ふか。

十には(三)隱覆如來藏。法身如來は煩惱に隱覆沒藏せらるゝが故に、前前は一法に約

(二) 所攝云云 此の藏の體は生滅門の本末の一切の染法なり。

(三) 隱覆 此の體は三解あり、此は二解あり、此は多一の體、一は染淨に偏して、現に沈没淨心に、中に沈没淨心に、出現せざる故に。

